
ポケットモンスター * アスタリスク *

小雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター * アスタリスク *

【Zコード】

Z0742Q

【作者名】

小雨

【あらすじ】

ルネシティに住む少年スズ。

閑ざされた小さな世界で平凡な日々を過ごしていた彼だったが、テロリストの襲撃により当たり前の日常が崩れていいく。

- プロローグ的な - (前書き)

* * * 注意事項 * *

* ポケットモンスターの一次創作小説です。

* 遅ればせながらのbw発売記念。

* bw発売記念といいつつ、舞台はホウエン地方です。

* 登場ポケモンは第五世代までの範囲で登場します。原作のキャラ達も何人か登場しますが、作者はアニメをあまり見ていないのでアニメには準拠しておりません。なので、アニメを見ている方は違和感を感じことがあるかと思います（すいません）。

* オリジナルキャラも登場します。

* オリジナルポケモンは登場しません。

* いちおうゲームにも登場するルネシティに住む少年のスピノオフ的作品です。ここで、始まりはルネシティ。なんでそんなモブキャラを選んだのかというと、レジ系ゲットしたくて久々に起動した第三世代ROMのルネシティの雰囲気及び少年のセリフに魅了されたからです。

* 作者の都合のいい解釈、展開などが多数出てくるかと思いますが、生ぬるい目で見ていただけすると嬉しいです。全ては作者の力不足によるものです。

* 読者様の好きなポケモンが例えば敵として登場することもあるかもしれません。あくまでストーリー上の話であり、その種族全体を悪としてとらえているわけではありません。ご了承ください。

* 作者の第五世代ランダムマッチにおける勝率は3回に1回程度のレベルです。ネット対戦勝てない人挙手。

* 感想等お気軽に頂けると小雨は喜びます。

大体ここいら辺が許せる方、よろしくお願ひいたしますー。

- プロローグ的な -

まるく広がる空が蒼い。雲ひとつ無い空だった。

僕は大きく背伸びをして「ゴツゴツした大地に横になった。暖かな陽気だ。

僕の住むこの町は、大昔に火山が爆発して隆起してできた壅みの中にある土地らしい。

隆起だのなんだのと言われても僕にはあんまりピンとこないけど、とにかくそういう事らしい。

階段状の大地に連なる家々を広く見渡せるこの場所は、僕の秘密の場所だ。ただでさえ奥まったところにあるし、そもそもこんな何もないところまで「ゴツゴツした山道を登つてくる物好きはそういうなかつた。

この町は、外界から閉ざされている小さな世界だ。もちろん完全に外界とのつながりが皆無かというとそういうわけでもなく、物資の行き来なんかも当然ある。こんな岩と水だけの環境では完全な自給自足などは到底不可能だ。それにごく稀にだけ、ジムリーダーのミクリさんに挑戦しに来るトレーナーもいる。

しかし日常生活を送つていく上で、外の世界を感じる事はほとんど無いといっていい。その程度のものだ。

僕はまだ一度もこの町から外に出たことがない。

四方を擂り鉢状の山肌に囲まれていることが、その最大の理由だ。水に潜ることができるダイビングという技を使えるポケモンを持っている人だけが、町の入り口である湖の中の洞窟を通つて外に出る事ができる。とはいっても、それができる人もごくわずかしかいない。町の外に出たことが無い大人だって大勢いるのだ。

僕はよくこの場所で、この町を見渡す事ができる高い場所で、そこに高い空を見上げる。

あのまあるこの空の向こうにはどんな世界があるのかな？

- プロローグ的な - (後書き)

脳内再生BGMはルネシティでお願いします

でこぼこの山道を下り、家に帰る頃にはもう暗くなっていた。家々には明かりが灯り、暗い夜道をぼんやりと照らしている。

この町の夜は暗い。およそ街灯と呼ばれるものが無く、夜道を照らす光がおよそ月明かりしかないからだ。そう、外の世界には街灯というものがあるのだと、以前買ってもらつた本に書いてあった。しかし、夜を照らす明かりと引き換えにまるい空から見える夜空は格別のものだ。

「おかいスズ。今日は何してたの？」

「みんなと遊んでたよ。お腹すいたー。もう『飯になるの？』

「もうすぐできるからね。ちょっと待つてね」

母親が料理に戻った。

僕は嘘をついた。僕はずつといつもの場所でボーッと空を見ていたのだ。

周りの友人達は、最近みんな自分のポケモンを手にいれはじめ、見せ合つたりして遊ぶようになつていて。初めのうちは物珍しさで僕も一緒に遊んでいたのだけれど、いくら釣りをしてもポケモンをゲットする事ができないため輪の中に入れないので多くなり、次第にみんなと距離を置くようになつっていた。

どうやら僕には釣りの才能が無いらしく、ポケモン入手する手段が限られているこの町ではそれは絶望的と言えた。

「ああ、『はんできたよー。食べよー』

母さんが料理をテーブルに運んできてくれた。

「いただきます」

「いただきます」

一人でテーブルを囲み、ささやかな夕食が始まった。

僕には父さんがいない。詳しい事は聞かされていないけれど、僕の小さい頃に死んでしまつたらしい。

父さんは外の世界から町に物資を運び込む仕事をしていたのだが、町へ戻る途中嵐にあり、行方不明になつてしまつたらしい。僕が物心つく前の話だ。

周りの人たちはその事について随分気にかけてくれているようだけど、僕は父さんの事が全くといっていいほど記憶になかつたので、寂しさはそれほど感じなかつた。

「ひなうわま」「あま

「はい、『駆走様。食器片付けたりちゃんと勉強しなさいね「わかつてゐよー」

僕は食器を台所に運び、自分の部屋へ引き上げた。

狭い家だけど、一応僕は個室を与えられていた。友達の多くは自分の部屋を持つていないうつだつた。これも一人暮らしのおかげかも

しれないなと思うと、父親がいないのも案外悪い事ばかりではない。母さんはしつかり勉強しなさいとよく言つ。この町の中にいたら、どんどん外の世界から遅れていつてしまつから、と。母さんは外の世界で父さんと知り合つてこの街に来たから余計にしつ思うんだ、と。

でも僕は、別にいいんじやないかと思う。

この町での生活サイクルは今の時点で完結しているし、興味がないわけではないけど、無理して外の世界に行きたいと思うわけではないのだ。

僕はいまひとつ勉強に身が入らず、部屋の明かりを消した。窓から差し込む月明かりの中で、僕は眠りについた。

「すーずくんっ」「

翌朝、僕を呼ぶ声で目が覚めた。カーテンの隙間から朝日が差し込んでいる。

友達が迎えに来てくれたようだ。そういうえば今日はみんなで遊ぶつて言つてたつけ。

「…」「めん、すぐ行く」

僕は眠い目をこすり布団から起き上ると、カーテンを開けた。柔らかい日差しが部屋の中を包む。

さつさと支度を済ませて外に出ると、いつもの二人が待っていた。いわゆるガキ大将タイプのノリと、ちょっとゆつたりしたところのある女の子、シズク。

「ごめん、寝坊しちゃつた」

僕は謝りながら一人のところに駆け寄った。と、自然に目線が下に行ってしまう。

みな、自分のポケモンを持つている。

ノリはメノクラゲ。自宅にあつたという古い釣竿を使って、少し前に釣り上げた。僕は正直あまりかわいいとは思えなかつたのだが、ノリはえらく気に入つていたので何も言わなかつた。

シズクのポケモンはマリル。シズクの父親は町の外へ出る事のできる数少ない大人で、マリルリを持っていた。先日卵が孵り生まれたマリルの世話を、シズクが任されていた。

緩やかな階段をいくつか登り、いつもの広場に着く。二人はすぐにポケモンと一緒に遊び始めたが、自分のポケモンを持っていない僕は次第に輪に入れなくなつてきた。

「ノリ、釣竿貸してよ」

「おー、いいぞ。お前も早く自分の捕まえろよー」

僕はみんなと距離を置き、町と外とを結ぶ湖に釣竿を垂らした。しばらくそつしてでしたが、一向に何もかかる気配がない。水面は静かなもので、少しの波紋さえおきなかつた。そもそも海に繋がつてゐるはずなのになんでこんなに水面が静かなのか、僕は不思議で仕方なかつた。

それにしても、大人たちが雑魚雑魚とあざ笑うコイキングすらかからない。後ろからは楽しそうな声が聞こえていた。

何で僕だけゲットできないんだろう…。早々に切り上げていつもの場所でぼんやりしていようかと思い始めた頃、隣にシズクが腰掛けってきた。

「スズくん、調子はどう?」

僕は早くもボーッとし始めたので、突然話しかけられて焦つてしまつた。

「あ、え、ええと、うん。全然ダメだよ」

「あはは。釣りなんて運だから、仕方ないよね。私もお父さんにマリルもらわなかつたらきっと今も捕まえられてないもん」

シズクがそれとなく慰めてくれているのがわかつたが、それが余計に情けなかつた。

マリルはシズクに抱きかかえられており、良く懷いているようだつた。時折嬉しそうな鳴き声をあげている。

僕は深いため息をついた。

「しかし、こうも釣れないもんなのかねえ。才能つていうのがないのかな」

「…そんなことないよ。ね、私のマリル見て! 昨日水鉄砲出せるようになつたの!」

シズクが「マリちゃん、水鉄砲!」と指示を出すと、マリルは少量の水を水面に向けて放つた。

静かだつた水面に波紋が広がつた。

「おおー、すごい!」

「へつへーん!」

シズクが得意げに胸を張った。

「シズク、なんだ今の！」

ノリも見ていたらしく、こちらに近付いてきた。

「水鉄砲っていう技なんだって！見せてあげるね！」

「おー、すげえ！」

二人は再びワイワイと騒ぎ出し、僕は再び釣り糸を垂らした。

- 友達 - (後書き)

参考資料

http://wiki.ポケモン.com/wiki/%E3%83%A1%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%82%A%A%E3%83%83%A%B

http://wiki.ポケモン.com/wiki/%E3%83%9E%E3%83%83%A%A%E3%83%83%A%B

何日かたつたが、僕は相変わらずポケモンを釣り上げられないでいた。

最初のうちに悔しさと劣等感にさいなまれていたけど、次第にそれは薄らいでいった。そもそもこの町の中で自分のポケモンを持っている人は数少ないし、町から出たことすらない人だつてたくさんいるのだ。

ノリなんかは「メノクラゲにダイビングを覚えさせて外の世界へ行ってみてえ！」なんて言っているけど、僕は外界に興味こそあるにせよ、そこまで強く行ってみたいと思つてはなかつた。本当はこのままで。今ままこのルネシティの中でのんびりと暮らしていくのもいいと思っているのかもしれない。

その日は友人達もみんな用事があるらしく、僕は久しぶりに秘密の場所に行こうと思った。

何にも無いあの場所だけど、頭上に広がるあるいは空をゆっくりと見ていられる時間は僕にとって必要なものようだつた。

思えば釣竿を垂らさない日もひさしぶりだ。僕の性格上釣りは嫌いではないけど、さすがに何も釣れない日々が何日も続いてしまっては気が滅入る。

僕は日が傾き始めた頃、でこぼこの山道を登り、秘密の場所に向かつた。青く澄んだ空を仰ぐのもいいが、夕焼けもまた違つた味わいをかもし出してくれる。

それほど大きくないこの町で、よく誰にも知られていないこんな場所があつたなと思う。あるいは知つていてる人もいるのかもしれないけど、ここ最近で人の立ち入つたような痕跡は見受けられなかつた。その場所は、山の頂上へ続く道を横にそれた先にあつた。遠くからみると行き止まりのように見えるのだけど、近付いてみるとさらに

道が大きく曲がるように続いていて、展望台のような開けた場所に出るのだ。見下ろせば町の全景が、見上げればあるいは空が見える。この町で一番素敵な場所ではないかと僕は思っていた。

いつものように山肌を登っていたのだが、少し様子が違つことに気がついた。

どこがどうと言わると言葉では説明できないのだけど、何となく感覚に訴えるものがあった。僕は違和感の正体も分からず、いつもおり秘密の場所に足を踏み入れた瞬間、息を呑んだ。

驚いたなんてもんじやない。僕はピクリとも動けなくなってしまった。

そこには見たことも無いドラゴンが横たわっていたのだ。

薄暗い青い肌をしたドラゴンは僕にすぐさま気がつくと、その鋭い視線をぶつけてきた。僕は余計に動く事ができなくなってしまった。今までのことが走馬灯のように僕の頭を駆け巡る。

僕はこのまま食べられてしまうのだろうか…結局一度もポケモンゲットできていままだつた…。いざ死を覚悟してみると、やりたかった事が意外とたくさんあるものだなあと思った。

「あー、こら！だめだよ急に人にらみつけたら…」

突然女人の声がして、僕はさらに驚いた。

僕はあまりに動搖していたので、最初ドラゴンが言葉を発したのかと勘違いしたほどだつたがそんな訳は無く、ドラゴンの後ろから女人が姿を表した。

金髪で、黒い服をきた女性だ。

「ごめんね、びっくりしちゃつたでしょ？」

びっくりどころか死を覚悟した僕だつたけど、安堵感からへたり込んでしまった。

「ガブリアスっていうの」

金髪の女性は言った。

「それは…ずいぶん強そうな名前ですね。かっこいいなあ。僕はスズつて言います」

「違う違う。ガブリアスっていうのはこの人の名前。名前と違つてかわいいわよね。私の名前はシロナ」

僕は改めて青い肌のドラゴンを見た。

ガブリアスという名前はその外見に対して決して名前負けしていい。かわいいとは思わなかつたが、一応頷いておいた。世の中にはメノクラゲに愛を注ぐ人間だつているのだ。

それにはかわいいとは思わなかつたけど、シロナさんのガブリアスはすぐ格好よかつた。

「これも…ガブリアスもポケモン…なんですか？」

「そうよ。ホウエン地方には生息していないポケモンのはずだから、スズ君は知らなかつたのかもね」

もつとも僕はこの町から出たことすらないので、ほんの数種類のポケモンしか見た事がなかつた。言つてしまえば、コイキング、マリル（マリルリ）、メノクラゲだ。

「シロナさんはこんなところで何やつてるんですか？ガブリアスを持つてるつて事は、もしかして別の地方から来られたんですか？」

「やうなの…ガブちゃんで飛んできたんだけど、このコ長距離飛ぶの苦手なのよね…す”い早く飛べるんだけど、その速度で飛ばされたら振り落とされちゃうからねつくり飛んでもうつたんだけど、余計疲れちゃつたみたいで」

言われて見れば、ガブリアスは先ほどから起き上がる様子を見せない。

「ね、この町に宿泊施設つてある？できれば野宿はしたくないんだけど…」

残念ながら、この町に宿泊施設は無かつた。そもそも訪れる人がほとんどいないこの町で、旅館業はなりたたない。

「あの…もし家でよかつたら、たぶん大丈夫だと思うんですけど。母親と一人暮らしなんですけど、事情を話せば了解すると思います。この辺りは夜本当に真つ暗になつてしまつので…」

このまま放つておくのは憚られたし、外の話を聞いてみたいというのもあった。

それに実際、周囲は薄暗くなり始めていた。ガブリアスの薄暗い青い肌は早くも闇に溶け込み始めている。

「え、いいの？ありがとう！正直ずっと空の旅で疲れてたのよ…私もこの「も」

シロナさんはガブリアスの鼻頭を撫でた。ガブリアスは、その外見からは想像もできないほど穏やかな声を発した。

- 疲労 - (後書き)

参考資料

http://wiki.ポケモン.com/wiki/%E3%82%AA%E3%82%83%E3%82%99

事情を母さんに話すと、あっけなく了承してくれた。

シロナさんにああ言つた手前多少心配していたのだが、ホッとした。きっと外の世界の人と話す事は、僕にとつてもいい刺激になると考えたんだと思う。

実際外界の、それも他の地方に住む人と話すのなんて初めてのことだつた。

「シロナさんにはお父さんの部屋を使ってもらいましょう。いいわね？」

いいもなにも、僕は普段父さんの部屋には入らないし、実質なにも使われていない部屋だつた。

父さんが使つていた部屋を、母さんが今もきれいに掃除し、そのままの状態にしてあるのは知つていた。

シロナさんは相当疲れていたらしく、丁寧にお礼を言つと夕食も食べずに部屋に行つて早々に寝てしまつた。

翌朝、目が覚めるとすでにシロナさんはどこかに出かけていた。母さんもすでに外出していた。もつとも、すでに毎近くなりかけていたので当たり前といえ、当たり前ではある。

こんな小さな町に、シロナさんは一体何をしに来たんだろう。観光みたいなものだといつていいたけど、普段生活しているこの何もない町に、見るべきものがあるようには思えなかつた。

僕は遅い朝食を済ませると、家を出た。特に何かする当でもなかつたので、いつもどおり釣りに出かけた。

どうでもよくなりかけていた自分のポケモンを持つという目標は、シロナさんのガブリアスを見て再び輝きを取り戻していた。

僕はエサを付け、ノリから借りっぱなしの釣竿を投げた。相変わらず穏やかな水面に着水し、それは小さな波紋を作つた。

意気揚々と釣りを始めたわけだが、日が暮れる頃には僕のやる気も再びしほみ始めていた。なぜこつも釣れないのだろうか。仕掛けはピクリとも動かなかつた。

日は短く、一旦暗くなり始めるとあつとこつ間に日が落ちてしまつ。僕は仕掛けを回収し、家に帰つた。

「ただいまー」

「お帰りなさい。」>飯の準備できるわよ、食べよ^フ」

「お帰りなさい」

シロナさんは母親の手伝いをしていた。母さん以外の人からお帰りなさいを言われるのは初めての経験で、なんだかむずがゆかつた。

「すいませんねえ、お客様に手伝つていただいて」

「いえ、寝床をかして頂いてるので…できるだけの事はさせていただきますわ」

夕食の準備が整い、僕達は食卓についた。

「いただきます」

「いただきます」

いただきますの声がいつもより一つ多い。これも久しぶりの経験だつた。

母さんが張り切つたのか、シロナさんの腕がいいのか、料理はいつもよりもおいしく感じた。

「シロナさんはシンオウ地方からこいつしゃつたんですつて?」

「出身はシンオウなんですけど、ホウエンにはジョウト地方から來ました。色々な地方を旅しているんです」

「あら、そうなんですか。私生まればジョウトなんですよ。コガネシティつてご存知かしら?」

女性同士の会話に僕の口を挟めるタイミングは中々ない。もしかしたら母さんも、外の世界の人と話せるのが嬉しいのかも知れない。僕は食事を終えると、部屋に戻つた。

僕の家は棚田状になつてゐる大地の、ちょうど真ん中ぐらいの高さにある。窓から外を見ると、真つ暗な中に家々の明かりがポツリポツリと灯つてゐるのが見えた。

僕はふと何の気なしに町の入り口、いつも釣りをしている海底洞窟がある湖を見た。

少し驚いた。家々の明かりでぼんやり見える水面が揺れていたのだ。あれほど穏やかな水面が。

ずっと小さい頃に聞いた、町の誰かが言つていた事をふと思い出した。

「ルネと外の世界を繋ぐ洞窟……まるで何かをここから出せないようになされたみたいだわ……考えすぎかしら?」

僕は少し怖くなつて、カーテンを閉めて布団を被つた。

- 波紋 - (後書き)

シロナガシンオウチャンピオンになる前との設定です。

私事で恐縮ですが、Wi-Fi戦200勝到達。嬉しいです。

「おはよースズくん！」

翌日、再びモチベーションが高まつた僕が釣糸を垂らしていたところに、シズクが通りかかつた。

もつとも、おはようといつても毎に差しかかるつところの時間帯だつた。

「おはよ。シズク、大きな声で話しかけないでよ。ポケモンが驚いて逃げちゃうかもしれないだろ」

「う、ごめんなさい…」

僕の精神状態が余程切羽詰つていてると思つていいのだろうか、僕は冗談で言つたのだがシズクには通じなかつたようで、謝罪されてしまつた。

僕の状況。数日間何の釣果も得る事ができない哀れな背中を見ていては、そう思われるのも已む無きことかもしれない。

「いや、冗談だよ…シズクと話せて嬉しいよ」

「あ、ありがとう…」

シズクは顔を紅くして俯いた。

これも冗談で言つたのだが、シズクには通じなかつたようで、お礼を言われてしまつた。

「いや、冗談だよ」

シズクの顔がますます紅くなり、頬をふくらませた。

「もう、からかわないでよ！人がせつかくまつてあげにきたのにーーー！」

「いや、冗談だよ。一人で釣りしてのも中々精神力を使うから本当に助かります」

これは本心だつた。

「もうお昼だよ。スズくん、お腹すいてない？私お、お弁当作つてきたんだけど、よかつたら食べない？」

「本当に？すごい助かる」

ちょうど小腹がすいてきたところだった。自宅から近いとはいえ、釣り道具を片付けるのもめんどくさだと思っていたところだった。古い釣りざおとはいえ一応ノリからの借り物なので、あまり無用心な事はできない。

僕は釣竿を倒れないように置き、手ごろな岩の上に腰掛けた。

「じゃーん！」

シズクが作つてきてくれたのはサンドイッチだつた。みずみずしい野菜が食欲をそそる。

「おおー、すばらしい。… いただきます」

「いただきます！」

「ねえ… ところでスズくん…」

「なに？」

サンドイッチをほおばりながら、僕は答える。

「その、昨日スズくんの家から金髪の女の人が出でくるのを見たんだけど… あれ、誰？ 親戚の人じゃない… よね？」

金髪の女性。十中八九、シロナさんの事だ。

「ああ、あの人はシロナさんって言つてね。ルネシティに観光に来たらしいんだけど、宿泊施設がないから家に泊まつてもらつてるんだ」

「観光？ こんな町に？」

シズクが疑問に思うのも最もな話だつた。僕だつていまだに納得していられないなのだ。

「シンオウ地方の出身なんだつて。シズク、ガブリアスつて言つポケモン知つてる？ すごいカッコいいドラゴンでさ、」

「…じゃあ旅行者のトレーナーさんなんだ… ふーん…」

シズクは旅行者という言葉を聞いて、なにやら安心したようだつた。

「…シズク、聞いてる？」

「はう！ なに？ 聞いてる！」

聞いている人の反応ではなかつた。

「今度ノリも誘つてシンオウの話とか聞かせてもらおうよ。いろんな地方回つてるつていつてたし、面白やつ

「いいの？ 楽しみー！」

シズクは嬉しそうな笑顔を見せた。

「別の地方か…ね、スズくんもいつかはルネシティを出て、別の町に行きたって思つてる？」

「え、どうしたの急に…」

問われたのは急だつたが、その問い合わせは僕自身時たま考えるものだつた。

外の世界に興味が無いわけではない。ここ数日シロナさんの話を聞いていて、外の世界への興味はむしろ高まつたぐらいだつた。しかし実際に行くかというと、また別の話だつた。外の世界で生きている自分というものが全く想像できない。この閉ざされた町に流れている時間と外の世界の時間は恐らく違うだらう。そのくらいの事は僕にもわかる。結局いつも答えが出ず、その時点で思考は停止してしまつたのだ。

「僕は…ごめん、ちょっとわからない。シズクはど

「おーいシズク！ 広場に行つてポケモンやろうぜ！」

僕達に気がついたのか、ノリが近付いてきた。

「おうスズ、調子どうだ？」

ノリがニヤニヤしながら聞いてきた。

ちくしょう、わかつてゐくせに。悔しかつたが「まかしきつが無かつたので、僕は正直に告げた。

- 弁当 - (後書き)

展開遅いですね。。。

いつものように釣りに行く。何も釣れずに家に帰り、三人で夕食を食べて寝る。

同じ様な日々が2・3日続いた。

あの夜に見た水面の揺れは、良く考えてみればポケモンがはねただけだったのかもしれない。という事は、ここにはちゃんとポケモンがいるのだ。根気良くやればいつか釣れるに違いない。

そう思つて僕は釣りを続けたが、一向に釣れる気配は無かった。ここまで釣れないと、劣等感だかが再び顔を出してくる。僕は極力それを考えないようにした。

「ただいまー」

家に帰ると、母さんが食卓に座つていた。

「おかえりなさい。すぐ夕食になるからね」

シロナさんが台所で、食材と格闘していた。

「おかえりなさい。ふふ、今日はシロナさんが今までのお禮でシンオウの料理をじちそうしてくれるよう。楽しみだわー」

「あまりハードルをあげられると困りますわ。それに、随分お世話になつてしましましたから、ささやかですがそのお礼です」

台所から声が返つて來た。

「シロナさん、明日帰られるんですって」

母親が僕に耳打ちした。こんな小さな町にいつまでも滞在しているはずがないとは思つていたが、やはりがつかりした。シロナさんと別れるのは寂しかつたが、とはいえ、仕方ないだろうというのが正直な気持ちだつた。こんな小さな町、本来一日もあれば見て回れてしまうぐらいなのだから。

夕食は、とてもおいしかつた。

いつも食べるホウエンの料理とどことなく違和感があつたが、とても新鮮な味がした。

「とてもおいしいです」

僕は率直に言った。

「本当に？よかつたー！ホウエンの人の舌に合つか不安だったの。実は料理するのって結構久しぶりだつたし…」

「ふふ、料理人さんの腕がいいのかしらね」

「そ、そんなことありませんよ」

僕達は笑いながらシンオウ料理に舌鼓を打つた。

片付けが終わると、シロナさんはまるで家に初めて来た日のように、早々に部屋に戻ってしまった。

僕も特にやる事もなかつたので、布団に潜り込んで眠気が訪れるのを待つた。シロナさんともつと話してみたかったけど、きっと明日も早いのかもしれない。またガブリアスに乗つて別の町に行くのであれば、充分休息をとらなければならないだろう。

そんな事を思いながら睡魔に身を任せ始めたその時、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

ノックの音に、僕の意識は再び覚醒した。

「はい…どうぞ」

と言つても、母親は部屋のドアをノックなどしない。部屋を訪ねてきたのは、十中八九シロナさんだつた。

「こんばんは…もう寝ちゃつてた？」

ドアから顔だけ出して、問い合わせられた。

「いえ…ちょっと横になつてただけです。シロナさんこそもうお休みになつたのかと思つてました。明日大変なんじやないんですか？またガブリアスで帰るんでしょう？」

「いや…さすがにもう長距離をガブちゃんに乗るのは、ねえ…」

僕の言に、シロナさんは苦笑いした。

「この町にミクリさんつているでしょ？ジムリーダーの」

僕は頷いた。

失礼します、とシロナさんは部屋に入つてきて、僕のベッドに腰掛けた。僕は少しへキドキした。

「別に隠してたわけじゃないんだけど、言つてなかつたよね。私はミクリさんに会いに来たの。」

ミクリさんはこのルネシティのジムリーダーで、水タイプのポケモンを使うトレーナーだ。ホウエン地方のジムの中でも最高峰に位置するらしい。町のみんなが誇らしそうに語つていた。

「じゃあミクリさんに挑戦しに？」

「挑戦というわけじゃないんだけど…水ポケモン使いのミクリさんに指導してもらいたい事があつて、ここ数日はジムに通つてたのよ」道理で町中でシロナさんを見かけないはずだつた。ポケモンを持つていなき僕は、基本的にポケモンジムとは無縁である。

「スズ君は、毎日釣りしてたよね。ジムから見えてたよ。釣り好きなの？」

「あ…はは」

今度は僕が苦笑いする番だ。と言つ事は、ここ数日の釣果も全て見られていたわけだ。

「釣りが好きってわけじゃないんですけど…自分のポケモンが欲しいんです。周りの友達もみんなゲットしているのに、僕だけ全然だめ…」

ふーん、とシロナさんは言つた。

「スズ君ポケモントレーナーになりたいの？」

僕は悩んでしまった。自分のポケモンが欲しいとは漠然と考えていたけど、ポケモントレーナーになるなんて具体的な疑惑があつたわけじゃない。なんだか僕の頭の中には漠然とした考えしかないような気がしてきた。

「…わかりません。そこまで具体的に考えていたわけじゃないけど…ただ、みんなすごく楽しそうだなって。ポケモンについて幸せそうだなって思つたんです。だから…」

僕は力なく答えた。

「…そつかそつか。ね、ところでスズ君、私君にお礼がしたいんだ。あの日私を見つけてくれて、家に泊めてくれたでしょ。私すっごい助かつたし、感謝してるの」

「あ、いえ、そんな…僕も楽しかつたですし」

シロナさんの顔が急に近付いてきて、僕はドキドキした。

「それでね、君さえよければ受け取つてもらいたいものがあるんだけど…いいかな」

僕は首を縦に振つた。

「じゃあ、いいつて言つままで田をつぶつて？絶対あけたらダメだよ！」

僕は言われるがままに田をつぶつた。

どのくらいこうしていただらうか。随分長く感じられたが、実際はそれほどたつていらないだろう。時間の流れと言つのは不思議なものだ。

「はい、田を開けていいわよ」

シロナさんの言葉に、僕は田を開けた。

田を開けると、田の前に三つの小さな球状のものが置かれていた。ポケモンを捕獲したり持ち歩いたりできるという、いわゆるモンスター・ボールというやつだ。この町ではポケモンをボールに入れいる人は少ないため、それほど田にする機会はなかった。

「これは…？」僕はシロナさんを見た。

「この中にはポケモンの卵が入っているわ。もしあなたがそれを望むなら、この中の一つをあなたにプレゼントする。本当は全部プレゼントしてあげたいところなんだけど、いきなり三匹育てるのは少し難しいから…どうする？」

突然の事に僕は呆然としてしまったが、すぐに我に返った。

「ほ、ほしいです！」

「よし、じゃあ君に一匹だけプレゼント！ただし約束して。絶対に

大切にするつて」

「はい、もちろんです！」

「よし、じゃあ選んでね」

僕はベッドの上に置かれた三つのモンスター・ボールを改めて眺めた。三つの球は部屋の灯りに反射して、きれいに輝いている。

「中になんかポケモンが入ってるかわからないんですけど？」

「ん？ふふー、それは秘密。でも自分で言つのもなんだけど、どの子も強くて可愛いわよ」

ガブリアスを可愛いと表現するシロナさんの言つ可愛いをどこまで

鵜呑みにしていいのかはわからなかつたが、しばらべ悩み僕は真ん中のモンスター・ボールを選んだ。

「じゃあ…」これにします

「…………本当にその口でいいのね？」

シロナさんがイタズラつぽく言った。

「つ…は、はい」

「よし、今日からその口は君のポケモンよ。孵化するのはちょっとだけ先かもしれないけど、大切に育ててあげてね！」

「はい！本当にありがとうございます」

「お礼を言いたいのは私も同じよ。もうあの時本当に疲れちゃつて大変だつたんだから。本当はダイビングで普通に来たかったんだけど、私の地方ではダイビングを教えられる人ほんんどいないのよねー。空から来るのはかなり高レベルの鳥。ポケモンでも厳しつて聞いてたんだけど、つい強行しちやつたのよ」

我慢できなくてガブちゃんで飛んできちやつたんだけど、それがよくなかつたみたいね、と、シロナさんは舌を出して笑つた。しばらくシロナさんと談笑していたが次第に夜も更けてきた。

「じゃあまた明日。いつもみたいに朝まで寝てないでガブちゃんと見送りに来てね」

「はい、もちろんです。おやすみなさい」

シロナさんが出て行つたあと、僕はすぐ興奮する気持ちを抑えて部屋の明かりを消した。

明日は寝過ごすわけにはいかないのだ。

ありがとうございました。

翌朝、いつもより随分早く僕は目をさました。

普段昼前まで寝ていいので、こんなに早い時間に目をさますのは本当に久しぶりだった。カーテンから差し込む日差しの色が違う気がする。窓を開けてみると、早朝独特の匂いが漂っていた。

寝巻きを着替えて居間に行つてみると、シロナさんはすでに準備を済ませていた。

「スズ、遅いわよー。シロナさんもう出発するといいよ

「遅いぞー」

「すいません、いつもより随分早く起きたんですけど……」

「冗談よ。近くの町まで長旅だから、少し早く出よつと思つてね。見送りよろしくね」

僕は急いで上着を羽織り、一人と一緒に外に出た。久しぶりに早朝の日差しを浴びた気がする。僕は大きく伸びをした。外に出ると、ミクリさんが立つっていた。どうやら見送りに来たらしい。ミクリさんに会うのは久しぶりだった。

「あ、ミクリさん… おはようございます」

「おはよう、スズ君。シロナさんにポケモンを頂いたんだって？」

「はい、大切にします！」

僕は腰につけていたモンスター ボールをさわり、感触を確かめた。自然と笑みがこぼれてしまう。

「よかつたね。毎日釣りをしていた甲斐があるつてもんだ」

ミクリさんはハハッと笑つた。ミクリさんも見ていたのか？

しかし僕は昨夜のことを思い出して、なんとも嬉しい気持ちがこみ上げてきた。

今この嬉しさに比べれば、苦行のよつな釣りを続けた日々も報われる気がした。

朝の空気の中を歩き、僕達は町の入り口、海底洞窟がある湖までやつてきた。

「おばさん、ミクリさん、お世話になりました。」

「いいのよ、私も娘ができたみたいで楽しかったわ。何もない辺鄙なところだけど、またぜひ立ち寄つて頂戴ね」

「君は素晴らしいトレーナーだよ。またぜひ対戦しようね」

「はい、ぜひ！」

シロナさんがぺこりと頭を下げた。

「シロナさん、あの、また空から…？」

僕はシロナさんと出会った日のことを思いだした。

ヘトヘトになつていたガブリアスの姿が頭に浮かび、僕は不憫な気持ちになつた。

「もう空の旅はこりこり…私もあるの口もね。ふふ、実はミクリさんに少し稽古をつけてもらつてね。私のポケモン進化したのよ。…おいで、みーちゃん！」

シロナさんがモンスター ボールを投げると、なんとも美しいポケモンが出現した。

ほつ…と、ミクリさんが感嘆のため息をついた。

「シロナさんは本当に筋がいいよ。たつた数日でここまで美しいミロカロスに進化させるのは誰にでもできることじやない」

みーちゃん（ミロカロス）と呼ばれたポケモンが湖に着水すると、シロナさんが飛び乗つた。みるみるうちに薄い膜のよつたもので包まれる。

「みなさん、本当にありがとうございました。スズ君、しつかりポケモン育ててね！」

シロナさんが僕に向かつてウインクをし、次の瞬間ミロカロスは潛水を開始していた。

いつも静かな湖面が大きく波立ち、やがて小さな波紋になつた。行つてしまつた。

シロナさんは行つてしまつた。

僕はふと、腰につけているモンスター・ボールに触れた。
シロナさんが僕にくれた、僕だけのポケモン。
いつかきっとシロナさんに、このコが立派に成長した姿を見てもう
おつ。
僕はそう誓った。

- 潜水 - (後書き)

シロナのマロカロスはいつやつてゲットしたという、作者妄想話。
余談ですが、過去作あんなに苦労して釣り上げたヒンバスが第
五世代では簡単に釣り上げられてしまい、多少ショックでした。

シロナさんが行ってしまったからとこりうもの、僕は一日の時間の多くを布団の中で過ごした。

シロナさんが去ってしまった悲しさからではない。少しでも早く、シロナさんのくれたポケモンの姿を見たかったからだ。

安直な考え方かもしかつたが、やはり卵は温めた方がいいのではと思ったのだ。シズクやノリが誘いに来ても居留守を使つたり何かと理由をつけ、僕は外に出なかつた。驚かせてやろうと思つた。卵のことを一人には内緒にしていた。

しかしそんな生活を2・3日ほど続けたが、卵は依然として孵らなかつた。

「中々孵化しないもんなんだなあ…シロナさんにどれくらいで孵るか聞いておけばよかつた…」

そんな事を呟きながらも、僕は決して嫌ではなかつた。夢にまで見た自分のポケモンの卵が、今手の中にあるのだ。先の見えない釣りを続けるしかなかつた少し前とは大きな違いである。

卵が孵る日のことを夢見て今日も部屋の明かりを消した。

ある朝目が覚めると、僕は不思議な手触りを感じた。ふさふさとして、滑らかな短い毛に触れているようで、布団とは別のぬくもりを感じる。

まだ寝ぼけているのかな…シロナさんを見送つたあの日以来、眠くないわけではないのだがどうも早く目が覚めてしまう。ぼやけた意識の中で目を擦りながらふと目線を落とした僕は、一気に目が覚めた。

卵が無かつたのだ。

正確に言うと、卵があるはずの場所に、別の生物が寝ていた。

全身が青い毛に覆われていて、目の周りから鼻にかけて鉢巻きでも巻いているかのように黒い毛が縁取っている。

狐のような外見をしているけど、決して狐ではなかつた。

これは…これはポケモンだ。

僕のお腹に寄り添うようにして寝息を立てていた。僕の心臓は高鳴つた。

ふと、開いたモンスター・ボールの中に紙が入っていることに気がついた。手紙のようだ。

こんな所に手紙を潜ますのは他にいるはずがない。シロナさんだ。

”
スズ君、こんにちは。この手紙を読んでいるところとは、卵は無事に孵化したようですね。
私もとても嬉しいです！

さて、このポケモンですが、シンオウ地方でも比較的最近見つかったポケモンなのでホウエン地方の図鑑にはまだ載っていないかもしれません。名前はリオルといいます。とってもかわいいわよね！
このコはとっても賢いコで、相手の感情を読み取る事ができるそうです。仲良くなれば会話できるようになっちゃうかも！…なんてね。

ちなみにタイプは格闘です。大切にしてあげてね！

/ / シロナ / /

”
”

リオル。

僕に寄り添うようにしてすやすやと寝息を立てて眠る、このポケモンの名前。

僕はリオルを起こさないよう、元気で、そつと抱きしめた。

- 懐化 - (後書き)

リオルかわいいよりオル。

h t t p : / / w i k i . ポケモン . c o m / w i k i / % E 3 % 8 3 % A A % E 3 % 8 2 % A A % E 3 % 8 3 % A B

全国図鑑が完成しました。

最初に選んだポケモン ポカブ。

最後にゲットしたポケモン ピイ。

長かった……

それからしばらく、僕はリオルが田を覚ますのを待った。
いくらでも待つつもりだった。待てると思った。

当ても無く釣竿を垂らしているのとは訳が違う。僕は田の前の、小さく寝息を立てているポケモンと一緒にいれるだけで幸せだった。

しばらくすると、リオルがもぞもぞと動いて田を覚まし、ずっと見つめていた僕と田が合った。

「あ、あの…僕はスズ。ええと…」

どうしたらいいかわからずにあたふたする僕を尻田に、眠そうに田を擦つたりオルは再び寝てしまった。

僕は苦笑し、リオルの頭を撫でた。

僕が焦つてどうする。落ち着かなくては。

それからしばらくして再び田を覚ましたリオルは、とろんとした田で僕と向かい合つた。

「はじめまして、僕はスズ。君はリオルって言つんだよね?…よろしく…わつ」

言い終わらないうちに、リオルが僕に抱きついてきた。

しかし、卵から生まれ、いきなり外の世界に放り出されたばかりだ。考えてみれば無理もない反応かもしれない。

僕は再びリオルの頭を撫で、抱っこしてあげた。はやる気持ちを抑えながら居間へ向かう。

「母さん!」

台所で洗い物をしていた母さんは、振り返ると田を丸くした。

「あら! その口もしかして…」

「シロナさんからもらつた卵が孵つたんだ! リオルっていうんだっ

て！」

「そう、リオルちゃんつていうの～。とってもかわいいじゃない！」
母さんはそういうて、リオルの頭を撫でた。リオルは気持ちよさそうな声を出した。

「ミクリさんに見てもらつたら？あの人も楽しみにしていたわよ」「ああ、そうだ。うん、そうする！行つてきます！」
あらあら、「じはんも食べずに…と母さんのあきれた声が聞こえたが、構いはしない。

僕は勢い良く太陽の下に飛び出した。

家を出てふと湖を見ると、ミクリさんが湖の前にいるのが見えた。

「ミクリさん！」

ミクリさんは、町の入り口の湖の前にいた。

僕は大急ぎで湖まで駆け下り、ミクリさんの下へ向かつた。

「おはようスズ君。どうした、なんだか楽しそうだね…！そのポケモンは！そうか、卵が孵つたんだね！」

「はい！今朝！このポケモンはリオルつていうさうです！」

僕はシロナさんの手紙を見せた。

「へえ…なるほど、僕も初めて見るポケモンだよ。そうか、格闘タイプか」

リオルは相変わらず僕に抱っこされたままだったが、せつからあたりをキヨロキヨロ見回していた。始めてみる世界に興味津々なのだろう。

「ところで、ミクリさんは何をやつてるんですか？外の世界へ？」「いや…なんだか最近湖のポケモンがえらく大人しい気がしてね…気のせいだつたらいいのだけどね…」

相変わらず静かな湖面を、ミクリさんは真剣な顔で眺めていた。

普段飄々としているミクリさんの、あまり見たことない表情だった。

「そういえば、僕が釣りをしていたときも全然釣れませんでした。…何か関係あるんでしょうか？」
ミクリさんが笑つていった。

「ははっ、それは君の実力だろう。それより、リオルを友達にも見せてあげなさい。みんな驚くと思うよ」

ミクリさんはいつもミクリさんに戻っていた。

「あ、そうですね！早速行ってきます！」

僕は走りだした。

「何もなかつたらいいんだけどね…」

独り言のようになにかいたミクリさんの声は、僕の記憶からすぐに消えてしまった。

「おーい、みんなー！」

僕とリオルはでこぼこの道を勢い良く走り、いつもみんなが集まっている円形広場へと駆け込んだ。みんなは相変わらずポケモンたちと遊んでいるようだつた。

「おースズ、久しぶりじゃねえか。最近家から出でないみたいだつたからもう諦めちまたのかと思つたぜ。よつやくコイキングでも釣れたか？」

ノリがからかうよつに言つた。

「ノリくん！…スズくん、どうしたの？えと…ポケモン、釣れたの？」

僕は肩で息をしながら、言つた。

「ポケモンは…釣れてない」

ノリがバカにするように笑い、シズクは困つたような顔をした。

「でも…ほら！」

僕は後ろに隠れるようにしていたリオルを横に立たせた。

「この前シロナさんにもらつた卵が孵つたんだ！リオルって言うんだつて！」

リオルは僕の足にくつついて、恥ずかしがつてているようだつた。上目遣いに二人を見上げている。

「わー、かわいい！」

シズクが近寄つてきて、頭を撫でた。多分リオルは、今日が今後の人生で一番頭を撫でられる日じゃないだろか。

「リオルくんつて言うんだー。よろしくね！私はシズク、このコはマリル」

リオルは初めは恥ずかしそうにしていたが、次第に打ち解けたようで、マリルと追いかけっこしたりして遊び始めた。

「すごいよスズくん！私あんなポケモン見たことないつ！」

「なんだよ…」

ノリが呟いた。

「なんだよ、あのポケモン！全然見たこともねえぞー。図鑑に載つて
るのも見たことねえ！」

「り、リオルはホウエンには住んでいないポケモンなんだよ。シン
オウ地方で最近発見されたんだって」

突然大きな声を出したノリに、僕は驚いてしまった。リオルも驚いて、僕の後ろに隠れた。

「なんでそんなポケモンをお前が持つてんだよ！大体シロナつてのは誰だ！」

「誰つて…」

シロナさんは本当に僕の家とジムを往復していただけらしく、ノリの田には留まつていなかつたようだ。僕が卵をもらつたことはともかくとして、小さな町なのでシロナさんが滞在していた事は当然みんな知つていてると思つていたのだが、意外だつた。

「この前シンオウから來たトレーナーの人だよ。家にしばらく泊まつてたんだ。その人からもらつた卵が孵つたんだよ」

「嘘付け！そいつポケモンじゃねえだろ！」

「ちょっと、やめなよノリくん！どうしたの急に」

シズクがなだめようとしたが、ノリは止まらなかつた。

「俺のメノクラゲと勝負しろ！勝つたらそいつの事認めてやる！」

「何言つてるのよー！リオルくんは生まれたばかりなのに、勝負なんて無理に決まつてるでしょ！」

「シズクは黙つてろよ！メノクラゲ、バブル光線！」

ノリのメノクラゲは戸惑つていていたようだが、バブル光線を発射した。無数の泡がリオルめがけて襲つてきた。

「り、リオル、避けて！」

生まれたばかりのリオルだつたが、僕の意思が通じたのか、光線をすんでのところでかわす。

「ちくしょう、メノクラゲまきつけ！」

体制を崩しているリオルに、メノクラゲの触手が絡みつき、締め上げた。リオルは四肢をからめとられ、苦しそうな声をあげる。

「リオル！」

僕はどうしていいかわからず、完全に混乱してしまっていた。

「ああもうーーまりちゃん、アクアジョットで引き剥がして！」
シズクのマリルが目にも留まらぬスピードで一匹の間に割つて入り、
強引にリオルを解放した。

「ーーシズク、何しやがる！」

「何しやがるじゃないでしょーー！ノリくん、どうしたのーー？何が気に入らないのよー！」

しばらく立ちすくんでいたが、畜生と吐き捨てるヒ、ノリは行ってしまった。

僕は傷ついたリオルを急いで家に連れて帰り、傷薬を塗つてあげた。何箇所か擦り切れたようになつていて、大きなケガは無いようだ。僕は一安心した。

リオルはすっかりしょんぼりしてしまつていて、大きめの包帯を巻いていた。生まれたその日に誕生日をわからずメノクラゲに締め上げられたのだ。当然と言えば当然だ。

「リオル…大丈夫？ノリの奴どうしたんだ？」急に…口調は乱暴だけど、あんなことするヤツじゃないのに…」みんな喜んでくれると思っていた僕は、リオル同様しょんぼりしてしまつた。

「スズくん…」

外から声が聞こえてきた。シズクだ。僕は窓を開けた。

「リオル大丈夫？怪我とか…してない？」

「うん、怪我つていう怪我は心配なさそう。上がつておいでよ」

「う、うん…じゃあお邪魔しようかな。行こう、マリちゃん」

シズクが家に入ってきた。なんだか僕の部屋にシズクが来るのも久しぶりな気がした。

シズクもノリも、小さい頃からずっと一緒に遊んでいたけど、いつの頃からか互いの家に行つたりする事は少なくなつていて、大して広い部屋でもないので、人間一人、ポケモン二匹で部屋にいるとさすがに少し窮屈に感じてしまう。

「さつきはありがとう。あのままだつたら僕どうしていいかわからなかつたよ」

僕はお礼を述べた。そのままバトルを続けていたら果たしてどうなつていただろうか。

「ううん、私もちょっと乱暴になっちゃって…ごめんね」

マリルは心配そうにリオルの顔をぺたぺたと触つている。

「それにしてもノリのやつ、どうしたんだろう…あんな乱暴なことするやつじゃないのに」「元気と…悔しかったんじゃないのかな」

「悔しいって…僕が珍しいポケモン捕まえたのが?」

「わからないけど…といいつつも、シズクは小さく頷いた。

「なんだよそれ…ちょっと前まであんなに得意そうにしてたくせに」

「いつそのこと勝負して勝つちゃえればいいんじゃないの?本人もああ言つてたんだし」

シズクが意外にも好戦的な事を言つた。

「そんな…せつかくみんなで遊べると思ったのに…」

僕が再び肩を落としたのを見て、リオルが心配そうに覗き込んできた。

「あ…ごめんなリオル。大丈夫だよ」

生まれたばかりのリオルに心配かけてどうするんだ。

しかしそんな事言われてもなあ…こればかりはどうしようもなかつた。

「私はリオルの事大好きだよ!リオル、私とも仲良くしてね!」シズクがリオルを抱きしめた。リオルも少し落ち着いてきたのか、笑顔がこぼれた。

「ちょ、ちょっと、僕のポケモンだからね!?」

僕は慌てて言つた。

- 治療 - (後書き)

咳きですけび、ヤドランって進化の輝石効果なかつたのですね……。

rn

翌日も、翌々日も、ノリは広場に顔を出さなかつた。このままでいるのもすつきりしないので家にも行つてみたのだが、どうやら家にいるというわけでもないらしい。

あいつどこで何してるんだ…僕は疑問に思つたが、それ以上は特に何もしようとは思わなかつた。

別に僕が謝る筋合いもないだろうと少し意地になつていたし、それにリオルとの時間が楽しくて、ついつい一緒に遊ぶ時間が長くなつていたというのもある。

リオルは格闘タイプというだけあつて、身のこなしがとても機敏だつた。

また、これはシロナさんからの手紙に書いてあつたのだが、すでにバレットパンチという技を覚えているのだといつ。

もともと勝負事にそれほど執着心の強くない僕は別にトレーナーになりたいというわけではないのだが、先日のように有無を言わさず突然勝負を挑まれる可能性も無いとは言えなかつた（この町にいる上では限りなくゼロに近いだらうが）。

僕はいつもの円形広場で手ごろな岩を見つけるとリオルと一緒に前に立ち、拳を突き出すそぶりを見せた。リオルは僕と岩とを交互に見ていたが、やがて意味を理解したのか拳を握り、岩に向かつて突き出した。

一瞬のうちにリオルからものすごいスピードのパンチが放たれた。眼前にあつた岩が削れ、破片が飛び散る。

僕の目ではほとんどその拳の軌道を見ることができなかつた。

「おおー、リオルすごい！」

僕が目を丸くしていると、リオルは照れたような笑顔を浮かべた。

格闘タイプというだけあり、生まれながらに体の効率的な使い方を

知つてゐるのだろうか。

「り、リオルもう一回！バレットパンチ！」

リオルは得意そうに再び拳を繰り出した。

僕達はそんな風にして、一日を過ごしていた。

僕達はどこへいくのも一緒にだつた。

一緒にご飯を食べ、一緒に風呂に入り、秘密の場所で一緒に空を見上げ、寝るときは一緒に布団で寄り添つて寝た。

なんだか家族が一人増えたみたいね、と母さんは言つた。

次第に町の人たちとも馴染みになり、リオルは毎日が楽しそうだつた。

言つまでもないことだが、もちろん僕も楽しかつた。

何日かが過ぎたが、ノリは相変わらずだった。

家を訪ねてみてもおらず、どこかに出かけているらしい。

小さな町なのでどこかに行つているといつてもたかが知れているはずなのだが、ノリを見かけることは無かつた。もしかして町の外に出ているのでは… という考えが一瞬浮かんだが、まさかノリのメノクラゲがすでにダイビング使えるということはないだろう。

以前ミクリさんが言つていたのだが、ダイビングという技は秘伝技として位置づけられているのだという。

例えば秘伝マシンのようなものでもあれば別だが、誰の教えを乞うでもなく自力で習得するのは困難を極めるそうなのだ。

そんな技を、ポケモンを持つて日の浅いノリのメノクラゲが身に付けていいるとは思えなかつた。

ある日の昼下がり、家でリオルのブラッシングをしているとシズクが神妙な面持ちで訪ねてきた。

「スズくん、ノリくんの事なんだけど…」

「うん。あいつ相変わらずどこに行つてるかわからないよね…こんな小さな町で見かけすらしないなんて、ちょっとおかしい」

「…山の湖に行つてるらしいの」

「…の湖…嘘だろ！？」

僕は思わず大きな声をあげてしまつた。シズクも驚いたようだつたが、黙つて頷いた。

山の湖とは、町の入り口にある湖とは真逆に位置する山の、洞窟の中にある湖だ。ある時期から凶暴なポケモンが住み着いているという噂が流れ、出入り禁止となつてゐる場所だつた。この町で唯一、人の手がまったく届いていない場所と言つてもよかつた。

シズクの聞いた話だと、釣り竿をもつて山を登つていくノリの姿が

何度も目撃されていたようなんだ。

「なんでもんなところに…」

「…スズ君、本当にわからない？」

「…『ごめん、わかる

簡単な事だ。ノリは珍しいポケモンが欲しいのだ。

もしかしたらその凶暴なポケモンを手に入れて、僕を、あるいは僕達を見返したいのかも知れない。

「…やめさせないと」

僕はきつぱりと言つた。

「あいつが望むなら勝負でも何でもしてやる。だからそんな危ない事は止めさせよう。もしかしたらまたあいつのメノクラゲと戦うことになっちゃうかも知れないけど…『ごめんな、リオル』

リオルは力強く頷いた。

ここ数日の特訓で、僕達はある程度対戦の呼吸をつかんでいた。

…本当にある程度だけど、同じ初心者のノリとだつたらそれなりに勝負できるところまではきているだろうと思つ。

「で、でも、まだ決まったわけじゃないわ」

「決まりだよ。山で釣りができるところをシズクは他に知ってるの？」

シズクは無言で俯いてしまつた。

「すぐ行ってみよう。シズクはどうする？」

「も、もちろん私も行くわ！」

実際のところ、この町にそんな凶暴なポケモンが住み着いているとは僕は思えなかつた。

しかし凶暴なポケモン云々が単なる噂だつたにしろ、立ち入りを禁止されるにはそれなりの理由があると思つたほうがいいだろう。

僕達は念のために家にあつた傷薬を持ち、山の湖がある洞窟へと向かつた。

でこぼこの山道を30分ほど登つていくと、湖のある洞窟はすぐに見えてきた。

早足で来たせいか、僕もシズクも額に汗を浮かべている。リオルもマリルも、弱音をはくことなくついてきていた。

「ねえスズ君、本当にここに…」

それほど大きな洞窟ではないと聞いていたが、山肌にぽつかりとあいているそれは、なにか不吉なものの入り口のように見えた。

「ここまで来たんだから、もう行つてみるしかないよ。中にノリがいれば説得して連れて帰るし、いなかつたらメノクラゲにダイビングでも覚えさせて海底散歩でもしてくるんじゃないかな」

僕は冗談交じりに言った。だって、ダイビングなどという技を覚えたのならノリはきっと自慢げに披露してくるはずだから。

「シズク、ここで待つてる？ 中は僕が見てくるよ…リオルを預かってて貰える？」

「…うん、わかった。気をつけてね。何かあつたらすぐに戻つてきてね…」

シズクが心配そうに言った。

リオルを置いて行こうと思ったのは、リオルの姿を見たノリが妙な嫉妬心にかられてしまつては面倒な事になると思ったからだ。

本当は僕も心細くてみんなと一緒にきたかったのだが、シズクは明らかに怖がっていた。

シズクに抱きかかえられたリオルは心配そうに僕を見ていたが、僕は決意を固めて洞窟に踏み込んだ。

といつても、それほど大きな洞窟ではない。

確かに薄暗くて不気味ではあるけれど、ところどころ空が見え光が差している場所もあつたし、何より一本道で迷いようがなかつた。

時々何かの羽ばたくような音がかすかに聞こえるが、ポケモンだろうか。

足元に気をつけつつ進むと次第に視界が開け、湖が見えてきた。 もつとも、湖といつほど大きなものではないが、ここからも海につながっているらしい。

湖の畔には、釣り竿を垂らす見知った背中があつた。 ノリとメノクラゲだ。

湖は町の入り口と変わらず、搖らぎ一つなく静かだった。 もつともこちらは洞窟内にあるから納得と言えば納得であるけれど。

「ノリ……」

僕は静かに友人の名前を呼んだ。

「スズか……こんなところで何してんだ？」

ノリが座つたままゆっくりと振り返る。

「そりやこつちの台詞……ノリこそ何してるんだよ」

「俺か？見ての通りだよ。誰かさんよろしくせつせと釣りをしてるんだ。ここに住んでる凶暴なポケモン釣り上げてやろうつと思つてな」「なんでそんな危ない事……」

言つてしまつた後、僕はハツとした。

「何で、だと。……くそつ、まあいいや。……お前の青いポケモンはどうしたんだよ」

「リオルは……シズクと入り口で待つてる。ノリも早く……」

「俺は帰らないよ。ここでポケモン釣り上げるまではな

「ノリ、いい加減に……」

「うるせえつてんだよーさつさと帰れー畜生、変な気使いやがつて！」

「みんな心配してるんだよーお前にはメノクラゲがいるだろーーいいから早く……」

「はつ、こんなやつ珍しくも何ともねえ！俺は絶対このポケモンを捕まえてやるんだ！」

隣のメノクラゲがなんとも悲しそうな顔をしたのを僕は見逃さなか

つた。

「ノリ、お前…」

「文句があるならかかってこいよ。それとも俺に負けるのが怖くてあの青いポケモン連れてこなかつたのか？」

ゴボリ。

静かだつた水面が突如、揺れた。

- 嫉妬 - (後書き)

私事ですが、色違いリオル生まれました。これからリオルと一緒に冒険するんだ！

突如洞窟に響いた凄まじい音に、さすがにノリも驚いたようだった。

「な、なんだ…？」

突然静かだった水面が大きく波打ち始め、激しい水しぶきをあげて巨大な何かが飛び出してきた。

洞窟の天井に届かんばかりの大きさで、それは凄まじい咆哮を轟かせた。

それだけで僕は尻餅をついてしまった。天を仰ぐようにして声の主を見る。

「ギヤ、ギヤラドス…」

同じく腰を抜かしたノリが呟いた。

ルネ近海でギヤラドスの目撃例は確かに無いではなかつたがほんの数えるほどであり、町の人たちは大して危機感は抱いていなかつたし、にわかに信じていらない部分さえあつた。

「う、うわ…」

圧倒的な威圧感にノリが後ずさる。こいつなつてしまつてはもう捕まえるどころの話ではなかつた。

「ノリ、逃げよう。どうしようもないよ…」

「…うるせえ…俺は捕まえるんだ…メノクラゲ！」

「ダメだ、逃げなきや…僕らの力じゃどうしようもない事ぐらいわかるだろ！」

「メノクラゲ、超音波！」

メノクラゲがなにやら怪音波を発した。

相手を混乱させる技だと聞いたことがあるが、どうやら相手には効かなかつたようだ。僕達は完全に飲まれていた。

「メノクラゲ！…ちくしょう！」

「いい加減にしろ！」

再びギヤラドスが大きく吼え、こじりた向かつてきた。

メノクラゲが僕達を庇うように前に立ちふさがり、ギャラドスに吹き飛ばされる。

「メノクラゲ！」

メノクラゲは吹き飛ばされ、壁に叩きつけられて苦しそうな声を上げた。

「…」

ノリは無言でメノクラゲをボールに戻す。

「…ごめんな、スズ」

「こんな状況で謝られても…無事に帰れたらメノクラゲにもちゃんと謝れよ…」

「…うん」

とはいってもなんとかできる状況ではなかつた。シロナさんのガブリアスと初めて遭遇した時のような感覚が僕を襲つていた。曲がりくねつた洞窟の道まで戻れれば何とかなるかも知れないけど、たどり着くまでには簡単に追いつかれてしまうだろう。ギャラドスが咆哮をあげ、僕達に襲い掛かってきた。
「ああ…もうだめだ…」と思つた。

「マリル、濁流！」

突然声が聞こえ、ギャラドスを水流が襲つた。

虚をつかれたらしいギャラドスは怯んだのか、体を後退させた。

「早く！早く戻ってきて！」

シズクだ。ギャラドスの咆哮を聞いて助けに来てくれたのだろうか。僕達は弾かれたように走りだした。

しかしすぐにギャラドスは体制を建て直し、再び襲い掛かってきた。鋭い牙を僕達に食い込ませようと噛み付いてきたが、紙一重のところで攻撃が外れた。自分の心臓がものすごい速さで鼓動しているのを感じる。

「！リオル、だめっ！」

シズクの声で前を見ると、リオルがこちらに向かって走つてくるのが見えた。

「リオル！僕達ならすぐ行くから大丈夫だ！」

そつは言つたもののあと20㍍ほどの距離があり、ギャラドスはすぐ後ろにまで迫っていた。

濁流で目をやられたのかギャラドスは攻撃が定まらないようだったが、運よく外れ続けるというものでもない。こうなつたら一か八かだ。

僕は走つてくるリオルに向かつて叫んだ。

「リオル、バレットパンチ！」

ここ数日練習していた技をリオルは走つてきた勢いそのまま、ギャラドスの顔面に叩き込んだ。

「リオル、もう一回！」

パン、パンッと小気味よい音が響き、ギャラドスが再び湖に後退した。

倒すことは出来なくても、リオルの素早い攻撃は時間を稼ぐ事ぐらいはできるだろ？

「今よ、早く！」

「リオル、行くよつ！」

僕は、何故かたつた今攻撃したギャラドスをじつと見つめているリオルを抱え上げ、曲がりくねつた洞窟の小道に飛び込んだ。

- 凶悪 - (後書き)

b w発売当初、バスマラオはてつさりコイキング的ポジションだと思つてました。

ギヤラードスの咆哮を背中に受けながら薄暗い狭い通路を必死で駆け抜け洞窟から飛び出した僕達は、背後を確認するとへなへなと座り込んでしまった。みんな肩で荒い息をついていた。

「ああ……死ぬかと……思つた……」

ノリが息も絶え絶え仰向けに倒れる。

「……ほんとだよ！バカ！ノリのバカ！スズのバカ！もうあんなところ絶対行かないでよっ！」

荒い息をつきながら、シズクは泣き出してしまった。

僕までバカ呼ばわりされるのは心外な気もしたが、甘んじて受け入れた。

「……一人とも、『ごめんな』

か細い声で、ノリが謝った。

「いや、もういいよ……でも……その、メノクラゲにもちゃんと……」

「わかつて。怪我が治つたらちゃんと謝る」

しばらく三人ともでこぼこの山肌に腰を下ろして呼吸を整えていたが、シズクも泣き止み次第に余裕が出てきた。洞窟から出た後の太陽光の安心感といったらなかつた。

「シズク、ありがとう。あの時してくれなければきっと今頃やられてた。リオルもマリルもありがとう」

僕は率直にお礼を言い、リオルの頭を撫でた。リオルは誇らしさと照れくささの入り混じつた笑顔を見せた。

「スズくんが洞窟に入つてしばらく経つた後、急にリオルが洞窟に駆け込んでいったの。追いかけようと思つたらあのものすごい鳴き声が聞こえたから、きっと何かあつたんだと思つて……」

「リオルが……？」

どうしてリオルが僕達の危機を察知したのかは分からなかつたが、おかげで助けられたのは確かだつた。

「まさかギャラドスが住んでたなんて思わなかつたわ。本当に無事でよかつた！」

それは本当に僕も驚いた。凶暴なポケモンが住んでいるなんて噂は信じていなかつたが、おかげで命を落とすところだった。

いつの間にか日が落ちかけていた。

真っ暗になる前にみんなで山を下り、僕達は解散した。ノリはメノクラゲの手当てをしなくてはいけなかつたし、何よりあんな事の後で、みんなとても疲れていた。

僕はリオルと手を繋いで家路についた。

「リオル、本当にありがとう」

僕は再びリオルにお礼を言つた。

リオルは嬉しそうな顔で僕を見上げた。

「でもどうして僕達の危機がわかつたんだろう。シズクの話だと、ギャラドスの咆哮が聞こえる前にすでにリオルは察知してたみたいだつた……」

僕は一人独り言ちだが、考えてわかる事ではなかつた。あるいはシロナさんなら何か知つているのかもしれないけど、シロナさんはもう行つてしまつたのだ。

「まあ、いつかー」

僕は結局そう思つた。

今生きている。死を覚悟したあの瞬間の事を思つと、多くのことはどうでもよく感じられてしまうのだった。

「それよりさ、リオル。さつきのバレットパンチ、きれいに決まつたよね！あんなでつかいギャラドスがリオルのパンチで後退したもんなー」

リオルもテンションが上がつていいのか、僕の前で飛び跳ねていた。僕達は興奮状態で家に帰り、夕食を食べて早々に寝てしまった。

こうして僕達の初めての実戦は幕を閉じたのだった。

「ほり。

月光に照らされた湖に大きな波紋が揺らぎ、何事もなかつたかのよう

に止まつた。

- 脱出 - (後書き)

次回、新展開つ！

ギヤラードスと戦つた日（正確に言つて逃げ延びた日）から、数週間が経つた。

僕達は無事に仲直りし、以前のよつに三人で遊ぶよつになつていた。共に危機を乗り越えたという一体感もあつてか、僕達の仲は以前よりさらに深くなつてゐるような気さえする。

「母さん、行つてきます！」

僕は靴を履きながら言つた。

「はい、行つてらつしゃい。またノリくんと勝負？」

「そう、今日こそこあいつに勝ち越してやるんだ！」

ふふ、と母さんは笑つていつた。

「がんばつてね。リオルちゃんも怪我しないよつにね」

リオルはすでに外に出て僕を催促していた。

いつものよつに母さんに見送つてもらい、僕も大急ぎで外に出て走り出した。

「遅いぞ、スズ。逃げたのかと思つたぜ」

太陽が丸い空の真ん中まで登つたとき、いつもの円形広場で僕達は対峙した。

「別に遅れてないだる。なに、ノリもしかして焦つてゐの？・今日こそ勝ち越させてもらつよ」

「でかい口たたくね。んじやま、始めるかね。いくぞメノクラゲ！」

「じぱり。

「じぱり。」

湖に小さな搖らぎが生まれる。

このときすでにそれは起っていたのだが、僕達は気付いてはいなかつた。

「リオル、発勁！」

リオルの拳が光を纏いメノクラゲを捉えようとしたとき、リオルの動きが急に止まつた。

「…………！」

「リオル、前！」

何かに気を取られたリオルを、メノクラゲの水の波動が吹き飛ばし、決着はついた。

「リオル！」

僕は駆け寄つた。岩肌に叩きつけられたリオルは気を失つているようだつたが、やがて意識が戻つた。

「…………！」

意識が戻つたリオルは急に走り出し、展望台のようひらけている広場の崖から町を見下ろしていた。

「リオルどうしたの？…………大丈夫？」

僕は様子がおかしいリオルのところに行き、その目線の先を見た。町が広がつており、その先には町への出入り口である湖が広がつている。

普段は静かなその湖が、激しく揺れ動いていた。

「おい、どうした？…………なんだ、あれ」

不審に思つて追いついてきたノリモ、湖を凝視した。

湖に大きな影が現れたかと思うと水柱と共に巨大な生物が数匹、姿を現した。

「あれは……ホエルオー？あんなでかいの初めて見たぜ。なんでこんなところに……」

ホエルオーのダイビングが解除されると、灰色の服を着た人々が次々と町に降りてきた。

素早い動きで斜面を登り、家々に飛び込む。

「な、なんだあいつら……あいつら俺の家に一ぐそつ、シズクの家

も…」

言うが早いか、ノリは駆け出していた。

「ノリッ！ ちょっと待って、もう少し様子を見たほうが…」

男達がホエルオーから降りてきて10分もたつていなかろうか。町は完全に占領されていた。

「ミクリ！」

ジムの外側から、男達の一人が叫んだ。

「出て来い。抵抗したら町の人々を傷付けざるをえない。出てこなぐても同じだ」

ミクリさんは無言でジムから出てきた。

「よし、ポケモンを奪え」

男達が出したポケモンが、町の人々を威嚇している。

モンスターボールを手渡すミクリさんが見えた。

- 異変 - (後書き)

10000円超えました。ありがとうございました。

男達が使っているのは図鑑でも見たこと無いようなポケモンだった。なんだあれは…シロナさんのガブリアスのよつな、別の地方のポケモンなのだろうか。

僕達が息を殺している間に、瞬く間に町は制圧されてしまった。

「諸君、おとなしくしていれば我々は何もしない。特にミクリ。ポケモンを取られては何もできないだろうが、余計な事は考えない事だ」

「気安く呼ばないでくれるかい。僕には君達みたいな知り合いはないんだよ。……要求はなんだい」

ミクリさんが静かに言った。

「別に、要求するものは何もない。我々の滞在している間、ただ大人しくしてもらいたいだけだ。もちろん普段の生活に対する程度の制限はさせてもらうが、仕方ないと割り切つて頂きたい。ああ、そうだな。強いて言うなら、諸君らに要求することはただ大人しくしていてもらいたいだけだ。我々は決して積極的に危害を加えない。もちろん、君達が大人しくしててくれるのであれば、だ。ぐどいようだがもう一度言つ」

男は一呼吸あいて言った。

「君達に要求するのは、ただ大人しくしていてもらいたいという一点だけだ」

町の人々はいまだに何が起きているのか判断しかねる様子で、不安そうに顔を見合わせあつてている。ミクリさんだけが唇をかみ締めていた。

「ど、どうする…」

僕の出した情けない声に、しばらく考えてノリは答えた。

「俺達だけじゃどうしようもない……。けど」

「けど、ミクリさんが自由になれば、あいつら何とかできるかもしない。どうにかできねえかな…」

突然巻き起^ひった非日常的な出来事に、僕は完全に思考停止状態に陥っていた。

「幸い俺達はまだ見つかってないみたいだからな…なんとかして「お前らも今の話聞こえてただろ？暴れなければ何もしない。少しの間我慢してくれるだけでいいんだ。変な事考えないで俺と来い」突然背後で聞こえた第三者の声に、僕達は慌てて振り返った。

灰色の服を着て、明らかに敵の一昧と思われる男が立っている。男は一足歩行する亀のような外見で鎧のよろづに甲羅をまとっているポケモンを連れていた。

声の主はゆっくりと近付いてくる。

「くそ…見つかったか」

「ビ、ビ、ビ、ビ…」

「どうしようもこうしようもねえだろ…くそ。俺達の勝負はひとまずお預けだな…スズ、逃げるぞ」ノリが小声で話しかけてきた。

「う、うん…」

僕は少し意外だった。ノリの性格だつたらバトルを選ぶのではない
かと思ったからだ。ノリは僕なんかよりずっと冷静なようだ。

「俺達だけであんな強そうなポケモンに敵うとは思えない…この場
はなんとか逃げ延びて、チャンスを待とつ…ミクリさんさえ解放で
きればきっとなんとかなる」

「う、うん…わかった」

「同時に両側から逃げよう…行くぞ！」

僕とノリは円形広場の岩肌に沿つて走り出した。

「ガキが…まあいい。片方だけでも捕まえるぞ。…うつ、」

男が僕の方を向いたその時、突如男めがけて泡が勢いよく発射され
た。男のポケモンが立ちふさがり、それを防ぐ。

「バブル光線…」

「ノリ！」

「いいから早くいって。どのみちこいつなんとかしないと身動きとれねえ」

「…………！」

僕とリオルは全力で走り、円形広場を抜けた。

「お前ボケモントレーナーか？そのメノクラゲで俺のアバゴーラとやろうつてか。…抵抗する場合は安全の保障はしないって、お前ちやんと聞いてたよな？」

男がにたあと笑った。

「楽しませてくれよ」

夜になつた。

まあるい夜空に星が瞬いでいる。

町とは対照的に、夜空はいつもと変わりなくその美しさを存分に披露していた。

「…」

僕だけの秘密の場所で、僕は膝を抱えて震えていた。
寒い季節ではないのに、なぜだか震えは止まらない。

いつまでも震えているわけにはいかないのはわかつていた。
ここは確かに見つかりにくい場所だと思つけれど、いつ見つかってしまうとも限らない。

町の明かりが眼下に見える。騒動などは起つていないので、静かな夜だつた。

朝いつものように家を出た時は、まさかこんな事になるなんて思いもしなかつた。

ノリはどうしただろうか。あの男のポケモンはいかにも強そうだった。それにシズクや母さんは無事なのだろうか。

「…」

リオルが心配そうに僕の顔を覗き込んできた。

「ごめんな…大丈夫…大丈夫…」

僕は溢れそうな涙をリオルを抱きしめて、まかし、星明りの下で夜を明かした。

翌朝、リオルに揺り起されたるよつこにして目が覚めた。

リオルが崖の下を指さしている。

慌てて行ってみると、数人の男達が山道を登つてくるところだった。
まだいぶ下の方ではあるが、いずれここまで登つてくるであろうことは明白だった。

「「う…どうしよう…」

この場所が見つからない可能性もあつたが、ここは袋小路になつているため万が一見つかつてしまつた時に逃げ場がない。かといってここを離れたところで、どんどん上へ追い込まれていくだけだった。僕の動搖が伝わったのか、リオルも不安そうな顔をしている。

あいつらは大人しくしていれば何もしないと言つていた。ならばいつその要素直に投降してしまつのも手ではないだらうか。

…我ながら虫のいい考えだと思った。そんなはずはない。

何もしないのなら、そもそもこんな閉ざされた島まで（おそらく別の地方から）はるばる来るはずがないのだ。あいつらは、何か目的があつて、この島に来ている。そしてその目的は、おそらく人々の賛同を得られないと考えているのだろう。

このまま何もしないでいても、事態が好転するはずがない事はわかつていた。

わかつていても、僕にはどうする事もできない。この町から外に出る事は僕だけではできないし、あの人数相手に戦つて勝てるとも思えなかつた。

「ちくしょう…どうすれば…どうすれば…」

突然、リオルが僕の手を引いて走り出した。

「り、リオル！？どうしたの？」

山を少し下り、半ば強引に引きずられるようにしてたどり着いた先は、洞窟の入り口だつた。

数週間前、僕達がギャラードスと遭遇して死ぬ思いをしたあの洞窟だ。ここに逃げ込もうというのだろうか。

僕はためらつたが、どうにでもなれという半ばやけくそな思いで洞窟に飛び込んだ。

「どうせどこにいても見つかってしまうのだ。

そんな思いで洞窟に飛び込んだわけだが、やはり進む足取りは重かつた。

洞窟内の薄暗さのためだけではない。この奥の湖は、ギャラドスの棲み処なのだ。

僕の脳裏に数ヶ月前のことが甦り、思わず身震いした。
結局最奥まで進む勇気はとても起らず、洞窟の中腹で息を潜める事にした。

さつき男達がいた場所を考えると、この洞窟を見つけるのにはあまり時間はかかるないだろう。なんとかスルーしてくれないだろうか。洞窟の中から外の音は全く聞こえない。僕は男達がどのあたりにいるのかわからず、しばらく薄暗闇の中でリオルと息を潜めていた。

どのくらい時間がたつただろうか。10分? 15分? それともまだ5分も経つていだろうか。

ふと何かの気配を感じた。

薄暗い天井付近から視線を感じる。以前来た時はズバットでも飛んでいるのかと思ったが、それとはまた別の感覚だった。

僕が視線を上に向けたとき、突然何かが飛び掛ってきた。僕は焦つてそれを払いのけると、羽ばたきながら洞窟を出て行つた。
まもなく足音が聞こえてきた。座つていたリオルが立ち上がりつて入り口の方向をにらむ。間違いなく誰かがこちらに向かつてくるようだ。

「「口モリ達が何か見つけたみたいだ、確認してみよ」

「やれやれ……どうせ現地のポケモンかなんかだろ」
かすかに声が聞こえた。男達は洞窟に入つてきただった。
僕の心臓は早鐘のように鳴り出した。

「くそつ…まあい…まあいよ…」

洞窟は一本道で、薄暗いとはいえた隱れるようなところなど何処にもない。

僕達は次第に奥へ奥へと追い詰められていった。

「おい、誰かいるぞ！」

湖へと続く最後のカーブで、僕達はついに見つかってしまった。

「くそつ…これ以上先に行つたら…」

ギヤラドスの咆哮が再び耳に甦つて来た。しかしあつづいてようもない。

僕はついに洞窟の最深部へと足を踏み入れてしまった。湖面は、穏やかだつた。

「なんだガキか…おい、どうせ逃げられないぞ。早くこっちへこ」

二人組みの男達はニヤニヤと笑いながら近付いてきた。

ちくしょつ…何なんだこいつら…何が面白いんだ…

湖を背にし、僕は歯を食いしばつた。

「リオル…やるしかない…リオル？」

後ろを振り返ると、リオルは水際にしゃがみこみ、なにやら必死に念じているようだつた。

「リオル！何やって……え？」

突如、湖が激しく波打ち始めた。

僕は数週間前の事を思い出していた。

この波は…。

- 決死 -

「リオル、湖から離れろ！」

僕の呼びかけが聞こえないのか、リオルは水際から動かなかつた。

「な、なんだ？」

明らかにおかしい湖の様子を見て、男達が動搖し始めた次の瞬間、水面から巨大な影が伸びた。

周囲を威圧する咆哮が洞窟内に響き渡る。

見間違いようも無い。数週間前に見た、ギャラドスだつた。

「う、うわ…」

僕は後ずさつた。後ろには男達がいたが、このままここにいたら本当に食べられてしまうかもしない。前の時はみんながいたから何とかなつたけど、今回はそうはいかない。

ここで食べられてしまつぐらいなら、まだ男達に捕まる方がマシだと、リオルが突如僕の腕を掴み、水辺まで走りだした。

「リオル！ 何を…」

波打ち際にたどり着くと、リオルはギャラドスの目を見て何かを念じ続けているようだつた。

ギャラドスの咆哮が響き渡り、男達がじりじりと距離をとる。僕はその間に挟まれて完全に混乱していた。

「リオル、逃げよう。このままじゃ…」

リオルは僕を見た。リオルの目は不思議な輝きに満ちていた。その目を見ているうちに、僕は不思議と気持ちが落ち着いていることに気がついた。

「リオル… わかった。お前に任せるよ」

その言葉を聞くが早いが、リオルは僕の腕を掴んだまま水面に向かつて飛び込んだ。

「…」

さすがに驚いたが、恐怖はなかつた。

水上に出ていたギャラドスの顔が再び湖の中に戻り、僕達に向かって迫つてくるのがぼんやりと見える。

あー…これからどうなるんだろ? 町のみんなは大丈夫だろ? そんな場合ではないはずなのに、みんなの事が頭に浮かんだ。これは走馬灯というやつだろ? そういえばシロナさんのガブリアスを初めて見たときも似たような感覚だったな。

ギャラドスの長い胴体が僕達に巻きつき始めたところで、僕は気を失つた。

「おい、あいつら飛び込んだぞ!」

「追い詰められて錯乱したんだろ。あんなとこに飛び込んで生きちゃいないだろ…しかしまさかギャラドスが出てくるとは思わなかつたな。焦つた焦つた」

男達一人が湖を出ようとしたり、後ろから来た誰かと鉢合せた。

「すごい鳴き声が聞こえたけど、君達何をやつてるの?」

「あ…」

「はい、子供が一人ここに逃げ込んだんですが、観念したのか湖に飛び込みまして…この湖はギャラドスの棲み処みたいなので、恐らく生きてはいなと思います」

後から来た男は、まだ少年だった。年齢的には恐らくスズたちとそれほど変わらないだろうか。少年は少しの間考えていたようだったが、

「…君達はその子供の死体を捜して。万が一にもこの町の事が外に漏れでは困るからね。君達の言つとおり恐らく生きてはいないと思うけど…一応急ぎの任務といつことで取り掛かってくれるかい?」

「は、はい…」

男達が洞窟を出て行った後も、少年はいまだ激しく波打っている水

面と洞窟内を観察していた。

ギャラドスが棲んでいるにしては、周囲に被害がなさすぎる……。

少年は一抹の不安を感じたが、やがて洞窟を後にした。

- 決死 - (後書き)

これにて第一章終了。次話から第一章です。
読んでくださってる方、本当にありがとうございます。

ざあ……ざあ……

寄せては返す波の音が近い。

僕はゆっくりと目を開けた。

僕を覗き込む青い顔と、見知らぬ天井が目に入ってきた。

「り……おる……」

僕が上半身を起こすと、リオルが首つ玉に抱きついてきた。

「ここは……」

僕はリオルの頭を撫でながら周りを見渡す。
どうやらどこかの家のベッドのようだった。

あれ……僕は……どうしたんだっけ？

捕まってしまったのだろうか……

いや……いや……湖に飛び込んで、ギャラドスに……

ここはどこだ？

僕はゆっくりと身を起こした。

体に不自由なところはない。特に怪我はしていないようだった。

「リオルは……大丈夫か？」

リオルは笑顔で頷いた。

ここはどこだらう？ ルネシティにこんな家あつただろうか……

僕はベッドから立ち上がり、警戒しながらドアを開けた。

「うわっ」

ドアを開けたところに、中年の男性が立っていた。

「あ、ああ……びっくりした。君、目が覚めたのかい、大丈夫？」

見たことの無い人だつたが、あの男達の仲間ではないようだった。あの男達は、みな一様に同じ服を着ていた。

「あ……はい。あの……」

「大丈夫？ 怪我とかない？」

「はい、大丈夫そうです。あの、二二二は……」

「ああ、うん。君は浜辺で……」

中年の男は何か言いかけたが

「二二二で立ち話するのもなんだから、下に行こうか。何か飲み物を淹れてあげる」

二二二は二階のようだつた。僕は、助けてもらつたと思しきおじさんについて、部屋を出た。

階段の踊り場に窓があり、僕は何の気なしに窓の外を見た。そして驚いた。

そこには水平線が広がっていたのである。

ルネシティでは水平線は見えない。町の入り口は湖の底だし、町は擂り鉢上の山に囲まれていたからだ。

階下に下りていくと、開け放しになっていた玄関から、広がる砂浜が見えた。

「え……え？」

僕は混乱しながら、おじさんの勧めてくれた椅子に座つた。

「君達は浜辺で倒れていたんだよ」

僕は無言だった。何を言つていいのかわからない。

「今朝私が散歩しているときに見つけたんだけど、びっくりしたよー。水死体かと思つちゃつた」

おじさんは笑つた。

浜辺……まさか……

「すいません、おじさん……」

「ん、なんだい？」

僕はおじさんの笑いをさえぎるよつて言つた。

「あの、二二二はどこですか？」

「ん、二二二は二二二は私が経営している旅館で、」

「すいません」

そうじやなくて

「この町の、名前は、何ですか？」

「ああ、町の名前か。変な事聞くね。」

「ここはね

僕の心臓は高鳴った。

「ミナモシティだよ

- 田覚めると - (後書き)
(atashi)

二章スタートです。

テレビの一コースでは、忍び込んだ泥棒をポケモンがやつつけたなんていう二コースをやつていた。

「いいねえ……いや、泥棒 자체は全然よくないけどさ。ウチもボディーガードにポケモン育てようかなあ。たまに変なお客さん来るんだよね……あ、そういうば君のそれポケモンでしょ？あんまり見たこと無いけど、名前なんていうの？」

おじさんは話しこうらしく、喋り続けていたが僕は上の空だった。

ミナモシティ。おじさんはミナモシティと言つた。

僕はいつのまにか、ルネシティの外に出ていたのだ。

「すいません、あの……」

「あ、私モナミっていうんだよ。ミナモシティのモナミ。ふふつ。それで、どうしたの？」

「すいません、ご挨拶遅れました。僕はスズといいます。……あの、ちょっと外の空気を吸いたいんですけど……」

モナミさんの話があまり頭に入つてこなかつた。外に出てみたい。

「ああ、どうぞ。今日は良い天気だよー」

僕は外に出て見た。

民宿は海に面しており、視界が開けていて水平線が見渡せる。

モナミさんの言つとおり、いい天気だ。

町を囲う山など何処にも見当たらなかつた。

ここは外の世界……。

僕とリオルはしばらくの間突つ立つて海を眺めていた。

「スズ君、どうしたの？ そんなに海が珍しいの？」

僕はハツと我に返つた。

「す、すいません、なんでもないです」 僕は民宿に戻つた。

「もう元気そうだね。よかつたよかつた。ところで君、どこから來たの？」

「僕は…ルネシティから…」

自分で言いかけて、今更ながら疑問が浮かんだ。

僕はどうやってここまでたどり着いたのだろうか。

泳いでたどり着ける距離ではないし、それはリオルも同じだろ。それになにより、僕達はギャラドスに襲われたはずだった。あのまま生き残れるとは思えない。

「あ、それでね、倒れてた君の隣でコイキングがはねてたよ。これ君のポケモンでしょ？捕まえたから」

そう言って、おじさんはモンスター・ボールを差し出した。

「…コイキング？ いえ、これは僕のポケモンでは…」

コイキングはルネシティで釣りをしていた時でさえ釣り上げた事はなかった。

「あ、そうなの？ でも僕もコイキングはいらないからなあ…スズ君にあげるよ」

「そ、そりですか…ありがとうございます」

「ていうか、ルネシティから来たの！ めずらしいなあ。僕結構長く民宿やってるけど、あそこに住んでる人ひとりしか知らないんだよねえ。ここ数年みかけないんだけど、元気にしてるのかなあ。その人いつもギャラドスに乗つてここまできてたんだよ」

「いえ、そもそも町の外に出る人が少ないですから。……ギャラドス？」

「うん、そう。珍しいよね。まあ、ちょっと昔の話だからね。ところでスズ君、その様子だと初めてこの町に来たんでしょう？ 少し外歩いてくれば。デパートなんかはこの町にしかないから、行ってみると面白いかもよ」

「は、はい、ありがとうございます」

「満足したら戻つておいで。今はお客様をいのないから、特別に夕御飯ご馳走してあげるよ」

僕はお礼を言つて民宿を出た。

- 青空と水平線 - (後書き)

「マイキングゲットW

- デパート -

ミナモシティに来るのはもちろん初めてだった。

僕とリオルは海風を受けながら歩く。なんだかルネシティとは空気そのものが違うような気がする。

これが外の世界…僕の心臓は高鳴っていた。

ところで外に出てすぐ気付いたのだが、考えてみればデパートと言われてもどこにあるのかさっぱり分からぬ。

果たして右も左も分からぬこの町でたどり着けるのだろうか。一旦戻つてモナミさんに聞いたほうがいいだろかななどと不安に思つていたのだが、杞憂に終わつた。

デパートは町のどこにいても見えるような大きな建造物で、小高い丘の上に建つていた。迷う余地など全くなかったと言つていい。僕達はすぐにデパートにたどり着く事ができた。

「うわ……大きい建物……」

リオルも空を仰ぐようにしてデパートを見上げている。

遠めに見ても大きな建造物だったが、近くで見るとまた格別だった。僕達は石段を登り、入り口と思われるドアから中に入つた。

なんというか、近代的な建物だった。僕はキヨロキヨロしていた。

「リオル…すごいね…」

「…」

ガヤガヤと、群集が発する特有の音がデパート内に満ちている。

どうやら一階はエントランスになつていていたようだつた。僕達は階段へ向かつた。

二階から順番に回る。僕達は最初は何だか気後れしてしまい、大人しく回つていたのだが、次第に面白さが勝つたようだ。リオルも僕の手を引いてあちこち回つていた。

デパートは、ルネシティの小さなショッピングでは考えられないほど多くのモノで溢れていた。

ルネシティにも売っていたような傷薬などから、ポケモンの縫いぐるみや写真。技を覚えさせるための技マシンなどというのも販売していた。もつとも僕は着の身着のままルネシティを飛び出してきたと言つていい状態だったの、何かを購入するほどの余裕なんてないんだけど。

一通り見て回ったあとで、僕たちは屋上のベンチで一休みすることにした。リオルもはしゃぎすぎたのか、少し疲れた様子だった。僕は屋上にあつた自動販売機でサイコソーダを買い、リオルと半分こした。炭酸の爽快な喉越しが広がる。

デパートにはたくさんの人達がいて、皆楽しそうだった。

買い物というのは、基本的には未来へと向かう行為だ。よりよい未来へたどり着くため、対価を払つて欲しい物を得る。この場所には人々のそんな前向きなエネルギーが集まつているのかもしれない。しかし、僕はとてもそんな気分にはなれなかつた。

デパートの屋上からは広く海が見渡せた。いつの間にか雲行きが怪しくなつてきていて、今にも雨が降り出しそうだつた。

今頃ルネシティはどうなつているのだろうか。僕は海の彼方に目を凝らしてみたが、ここからルネシティを確認することはどんなにがんばつても不可能だつた。

- デパート - (後書き)

そういうえば、攻略本の袋どじをあけてみました。ミズゴロウさんで
した。

しめりけ

- 灰色の追っ手 -

サイコソーダを飲み終わると、僕とリオルはデパートを出た。デパートはとても楽しかったが今後のために有用な情報が見つかりそうには無かつた。それに、思わずはしゃいでしまったが観光などしている場合では少しもなかつた。

空はどんよりと曇つていた。

日が落ちかけてきたせいもあるだろうが、今にも雨が降つてきそうだ。

外の世界で右も左も分からぬ僕は、ひとまず世話をしてくれた民宿に戻るつと思つた。モナミさんは夕御飯をごちそうしてくれると言つていたし、もし部屋が空いていたら一晩だけでも借りれないだらうかなどと多少都合のいい事を考えながら。

旅館に戻ると、モナミさんはフロントにいないようだつた。夕食を作ってくれてこむのだろうが、どこからともなくいい匂いが漂つてゐる。

とたんに僕は激しい空腹を感じた。

思えばルネシティを出たあの日から何も口にしていない。当然といえば当然だ。

ひとまず僕は先ほどまで寝かせてもらつていた部屋に戻るつと思つた。

階段を登り、部屋のドアを開ける。

と、異様な光景が飛び込んできた。

部屋の椅子にモナミさんが縛りつけられていたのである。こめかみから一筋、血が流れている。

ぐつたりとしていて、動く様子がない。

「…!? ど、どうしたんですか！」

無用心に駆け寄る僕の後ろで、部屋の扉が閉まつた。

「やつぱりここにいたか。おっさん、こいつの知り合いがなんか？」

突然後ろで声がして、僕は驚いて振り返った。

ドアの前に灰色の服を着た男が立っていた。

夕飯の事で一杯になつていた僕の脳内が、再び現実に引き戻される。「まさか生きてるとはな…どうやつてギャラドスから逃げのびたんだ？…まあそんなことはいいや。お前が生きてることと、こうして見つけられたつて事実だけあれば充分だ。おい、どうするべきかわかるな？さつさと俺と来い」

男は一人で喋り続けていたが、僕はすっかり動転していた。
追っ手…色々なことが急に起りすぎて考えも及ばなかつたが、考えてみれば至極当然の事と思われた。

男達にとって、ルネシティでのことが外に漏れるのは非常に都合が悪いのだろう。

モナミさんは気を失つてしているのか、相変わらず動く様子が無い。

「それにしてもあのおっさんもいい根性だな。昨日今日初めて会つたガキ匿つてやがったのか。……何かコイツから聞いたと考える方が自然か？…おいガキ、ちょっと待つてろ。逃げたらルネの人間一人ぶつ殺すぞ」

ぶつ殺す。

突然飛び出した非日常的単語に僕は仰天した。単語自体は日常的に使われてはいるが、それが意味を伴うとなると話は別次元だつた。

「ちょ、何言つて…それに、モナミさんに何する気…この人はただ海辺で倒れてた僕を助けてくれただけで、僕は別に何も話して」

「あー、いい。しゃべらないでいい。どの道お前の言葉を信頼する理由なんかないから。あのおっさんにしたつてそうだ。可能性があるなら俺はそれを潰すのが仕事だ」

なんだこれは。まさかこんな事になつてしまつなんて、考えもしなかつた。

でも、だけど。

モナミさんを殺させるわけにはいかなかつた。

「ま、待て！」

僕は精一杯大きな声を出し虚勢を張つたが、男には僕の弱気が見透かされているようだつた。

「…なれないことはやめとけ。わざわざ痛い思いする事は無いよ。昨日今日会つただけの民宿のジジイを見捨てるだけでいいんだよ。お前に何の関係も無いだろうが。それともそのちっこい青い奴で俺と勝負する気か？」

「う、うるさい！早く表へ出るーー！」

男は面倒くさそうにため息をついた。

「まあ俺は別に構わん。それより、俺がポケモン出すの待つてくれれるのか？」

「…だつて、そういうルールじゃないか」

「おまえなあ、ルール守つて大事なものを守れなかつたらどうしようもないだろうが。まあ、こんなこと俺が言う事じゃないけどな。…

ダストダス！」

見たことも無いポケモンが出現するとともに、ものすごい悪臭が鼻をついた。無数のゴミのようなものがいたるところに付着している。ダストダスと呼ばれたポケモンが僕とリオルを無造作に掴むと、窓に向かつて放り投げた。

「う、うわーー！」

窓ガラスが割れ、僕たちは外へと放り出された。

リオルが空中で身を翻し、僕のクッショוןになつてくれた。

「「」、ごめんリオル…」

灰色達も後を追うように窓から飛び出してくる。ダストダスが着地すると、砂浜の砂が舞い上がった。

「あんな狭い部屋で戦つて、巻き込まれるのはごめんだからな。じやあ、やりますか？」

僕は唇をかみ締めた。

「リオル、発勁！」

僕に様子を見ている余裕はなかつた。知識と経験で圧倒的に劣る僕には、初めて見るポケモン相手に取るべき手段といつたら先制攻撃ぐらいのものだ。

リオルの拳が淡い光を帯び、両手で掌打のようにしてダストダスの顔面に打ち込む。

もろに受けたダストダスだつたが、2・3歩後退しただけでほとんど効いていない様子だつた。ダストダスを纏ついていたゴミがいくつか周囲に散乱し、さらに臭いを撒き散らす。

ダストダスはそのまま宙に浮いていたリオルを掴み、砂浜に叩きつけた。

「！」

リオルの顔が苦痛に歪んだ。

「リオル！」

ダストダスは攻撃の手を緩めなかつた。リオルを再び掴み上げ、その指先からなにやら液体のようなものを噴射した。

「ダストダス、返してやれ！」

男が不敵に指示すると、ダストダスはリオルを無造作に放り投げた。今度は僕がリオルのクッショilonになつた。衝撃で砂浜に倒れる。

「リオル…大丈夫か？」

リオルは肩で荒い息をついていた。きれいな青色だつた毛並みは首から顔面にかけて紫色に染まつてゐる。リオルの苦しみ方が尋常ではない事に気づいた。

「ダストダスの毒をもろにくらつたんだ。早くしないと危ないぜ！」

男の声が聞こえる。腕の中で苦しそうに息をするリオルの姿からも、

それは容易に想像できた。

「お前もつ詰んでるよ。自分のポケモンにそんな辛い思いをせいでいいのか？さつさと諦めろよ」

悪いようにはしないから、と、男は諭すように言った。

しかし男が僕の言葉を信用しないように、僕も男の言葉を全く信用していなかつた。

だけど、僕には打つ手がない事も事実だつた。頼りのリオルは消耗してしまつてゐるし、コイキングを出したところどうにかなる相手でもない。

「ちくしょう…ちくしょう…」

僕は男に向かつて突進したが、あつけなくダストダスに捕まつてしまつた。ものすごい悪臭が鼻を突く。それだけで気が遠くなりそうだった。

「本当にめんどうかいなあ…お前もくらつてみるか？さつと毒で死ぬのは苦しいぞ」

男は心底どうでもよさそうに言い、ダストダスは右手を僕の顔面に向けて照準を合わせた。

”…う…”

何かが頭の中で聞こえた気がした。

”やめろ…”

今度ははつきりと聞こえた。この声は…？

僕は精一杯首を傾けて後ろを振り返つた。

リオルが光に包まれている。

- はじめに - (後書き)

20,000円超えました。ありがとうございます。

ぼたり ぼたり

水滴が肌をぬらしたかと思うと、突然バケツをひっくり返したような雨が降り始めた。

猛毒で紫色に染まつたりオルの毛並みが、美しい青色を取り戻していく。

光に包まれたりオルは先ほどまでのダメージが嘘のように立ち上がつた。

体つきそのものが大きくなり、力強さに満ち溢れているようになっていた。

「進化だと…っ」

男が舌打ちするのが聞こえる。

「ダストダス！」

僕はリオルのほうに放り投げられた。

今度はリオルが僕を受け止めてくれた。

「リオル…？えと…」

「ルカリオ」

「えつ？」

頭の中に声が聞こえる。

”僕はルカリオ。スズ、僕は進化できた。君のおかげだよ。ありがとう”

切れ切れで多少分かりにくいが、頭の中に聞こえる声はリオル…いや、ルカリオの声で間違いないようだった。

”スズといつぱい話したいけど、とりあえずこの場をなんとかしよう”

言うが早いが、ルカリオはダストダスめがけて走り出した。

「ダストダス、ヘドロ爆弾！」

重量感たっぷりなヘドロの塊がルカリオめがけて発射された。ルカリオは無造作にそれを払いのける。

「…こいつ、鋼か！」

ルカリオはダストダスの懷に飛び込むと、連續して拳を叩き込んだ。数発叩き込んだ時点で、ダストダスは膝をついた。

「ダストダス！…地面技か…くそつ」

男は吐き捨てるように言うと、ポケモンを戻した。

「毒に鋼じや分が悪すぎるな…ガキ、お前の勝ちだよ」

突然の事に何が起こったのかいまひとつ掴めていない僕だったが、男がポケモンを戻したのを見て、へたへたとその場に座り込んでしまった。

”スズ、どうする？”

「…え？どうするつて…？」

”あの男”

「おいガキ、今回は引いてやる。だがお前に制約を課す。ルネシティのことを誰にも喋らないことだ。もつとも、喋つたりビリになるかわかるよな？あのおっさんの姿を見ただらう！」

ぶつ殺す。

灰色が使つた言葉が頭の中で反芻された。

「…」

「…何を偉そうに…。ぼ、僕がお前をここで捕まえておけば、そんな制約課される事もないだろ」

「どうかな。お前、もう少し自分のポケモンのこと労わってやつた方がいいんじゃないかな？」

”じゅつ

背後で砂浜に重い何かが落ちるような音がした。

驚いて振り返ると、リオル…いや、ルカリオが倒れている。

「…！」

「さつさと治療してやつた方がいいんじゃないか？進化したからつてダメージが消えるわけじゃない。それに、民宿のおっさんも今頃どうしてるだろ？」「

男が余裕たっぷりに言った。

僕は歯を噛み締めて灰色を睨んだ。

「ルネの事を知った奴は処分しなければならない。俺達が地の果てまで追いかけやるから、そう思え」

灰色の声を背中に受けながら、僕は倒れてしまつたルカリオを抱えて急いで民宿へ引き返した。

「周囲の人間の事を思うなら、さつさとルネへ戻つてくる事だな」

- ハガネ - (後書き)

インフルへいらっしゃったんでちょっと更新おくれます。o-rz

倒れてしまつたりオルを扼ぎ、僕は一田散に民宿に戻つた。

リオルをベッドに寝かせ、モナミさんを解放する。モナミさんは意識を取り戻していた。

僕は何度も何度も謝つたが、モナミさんは気にしていないうつだつた。

「あー痛かつた…いや、スズ君が悪いんじゃないよ…君を助けたのだつて、僕が勝手にやつた事だし…ああもう面倒くさいなあ、そんなに頭下げるよ!」

とりあえずシャワーでも浴びてきなよ、とモナミさんは言つてくれた。

食事同様、灰色がルネシティに侵攻してきて以来風呂にも入つていなかつた。

僕はモナミさんの言葉に甘え、シャワーを借りる事にした。

民宿だけあつて、浴場はそれなりの広さだつた。僕の家の部屋を全部足したよりも、まだ広いだろ。

こんな広い風呂場など見たことがなかつたが、とてもほしゃぐ気にはなれない。

僕は蛇口を捻ると、頭から流水を浴びた。

次第に温まつていいく水が、浜辺の砂と共に疲れも流してくれているような気がする。

これからどうしよう…ルネシティに戻るわけにはいかない。かといって、モナミさんのような無関係の人を巻き込むわけにもいかない…僕はしばらくなままの姿勢でシャワーを浴び続けた。

「それにしても、あいつなんなの? 酷い事するよ本当に…スズ君の

知り合いじゃないんでしょう？」

シャワーから戻った僕に、モナミさんは暖かい飲み物を淹れてくれた。

「…

知り合いなんてどんなでもなかつた。

しかし僕はモナミさんに打ち明ける事をためらつた。灰色が言つていた事が頭をよぎる。少しでも関わった可能性があるというだけで殺そうとする連中なのだ。すでに巻き込んでしまつたとはいえ、これ以上モナミさんを引きずり込むのは憚られた。

「…いや、いいんだよ。言つたくなつたら無理には聞かないけどね。ところでもしかして君、タイガさんって知らない？」

「え…？」

意外な名前が出て、僕は耳を疑つた。

「タイガは僕の…父ですけど」

「やつぱり！ どことなく似てると思つてたんだよ。いや、どこかで見たことあるなあと思つてたんだけど、そうか、やつぱりタイガさんの息子さんかあー！」

おじさんは一人でうんうんと嬉しそうに頷いていた。

「タイガさん向こうとこっち行き来してたでしょ？ 昔よくウチに泊まりに来てくれてたんだよー。ここ数年見なくなつちゃつたなあ。もう引退しちゃつたの？ そんな歳でもないでしょ？」

「いえ、父はその…」

死にました、と、僕は短く伝えた。

「ええっ！ 嘘でしょ、あのタイガさんが…」

「すごい腕のいいダイビング使いだつたんだけどなあ… タイガさんとギャラドスはここら辺では結構有名だつたんだよ…」

「…ギャラドス？ 父はギャラドスに乗つていたんですか？」

「そうだよ、知らなかつたの？」

そのとき、ガヤハヤと背後のベッドで衣擦れの音がした。

「リオル…じゃなくて…ルカリオ?」

”うん、スズ。僕はルカリオ”

リオル、いやルカリオはベッドから上半身だけ起こして言った。
なんだかここ数日の間の出来事は濃密すぎる。僕はそろそろ肉体的にも精神的にも疲労のピークに達していた。

「進化…?」

”うん、進化”

リオルの体は一回り、いや一回りも大きくなり、雄々しさを増した
ような印象を受ける。

「そ、そうなの…といひで…その…普通に喋ってるんだけど…いや、
喋ってるというか…」

そうなのだ。会話している訳ではないのだけど、頭の中に直接声が
聞こえるような感覚がある。

浜辺で初めて聞こえたときは途切れ途切れな感覚だったが、今はス
ラスラと聞こえていた。

”僕が進化できたのはスズのおかげなんだよ。僕たちは相手の心と
か、感情とか、気質とか、そういうものを読み取る事ができるん
だ。本当に深く読み取るには相手の事を本当に理解しないといけな
いんだけどね。この力は波動って呼ばれるんだけど。スズの気持
ちがたくさん入ってきたから、僕は進化の力を得る事ができたんだ
よ”

「リオル…いや、ルカリオか。ずっとリオルって呼んでたから、な
んかルカリオっていうの慣れないや

”今までどおりリオルのままでいいよ”

「でも、考えてみればリオルっていうのは種族の名前だよね……今
更だけど、名前をつけないと」

”名前?“

「うん。リオルは僕の事、”人間”じゃなくて”スズ”って呼んでるでしょ？そういうもの」

”……うん、つけて！僕に名前を！”

言つては見たものの、名前を考えると言つのは難しいものだ。確かにシロナさんはミロカロスのことをみーちゃんと呼んでいた。シズクはマリルのことをマリちゃんと呼んでいた。ノリのメノクラゲは特に名前付けてなかつたんだっけか。うーん、なんだかみんな結構適當なような。

「うーん…リオル…リオル…」

名前を決めるというのは中々難しい。和名…洋名…うーん。

「リオル…ルカリオル…る…む、ルークなんてどうだろ？」

”るーく？”

「うん。ルカリオの頭文字をとつて、ルーク。気に入らなかつたらもつと考えるけど…」

自分で言つのもなんだけど、ルカリオの頭文字を残しつつ、ルカリオのかつこいい外見にマッチしているよつた気がする。

”うーん…”

ルカリオは大きく首を振つた。

”とっても気に入つた！ありがとうスズ！”
ルカリオ、いや、ルークはにっこりと笑つた。

- 名を - (後書き)

今更ながら名前が決まりました。

- 今後の「」と - (前書き)

ポケモンに名前がついたので、キャラ紹介を。

ルカリオ ルーク

- 今後の「」と -

「…君達さつきから見つめあつちやつてびうしたの？」
モナミさんが不思議そうに声をかけてきた。

僕はハツとした。そうか、僕達の会話は僕とルーク以外の人には聞こえないのか。

「い、いえ、何でもないです。」

「君のポケモン大丈夫みたいだね、よかつたよかつた。ところで、君達これからどうするの？」

問われて、僕は返答に困ってしまった。ルネシティから外の世界にいきなり放り出され、正直こっちが聞きたいぐらいだつた。とにかく灰色に見つかってしまった以上、ミナモシティからは早く出て行かなければならぬだろう。

「モナミさん…こんな事言われても困るとは思つんですけど…しばらくミナモシティを離れた方がいいと思います…」

「…詮索はしないけど、さつきの男が普通の奴じやないってことぐらいは私にもわかるよ。うーん、そうか…まだ今のシーズンだったら民宿閉めてもそれほど痛手にはならないかなあ…わかつた、しばらくどこかに身を隠すよ。スズ君はどうするの？」

僕は…。

「僕は…すぐにこの町を出て行きます」

「町を出て、それからは？」

それから。僕は黙り込んでしまつた。

「…私には状況がよくわからないけど…」

モナミさんは前置きして言つた。

「もしどこにも頼る当てが無かつたら、ジムリーダーの人を訪ねてみるのはどうだろう？この地方を代表するポケモントレーナーの人たちなら、何か力になつてくれるかもしけないよ」

ジムリーダー…今まで考えすらしなかつたが、確かに一つの手段だ

と思った。ジムリーダーの人たちだったらミクリさんの事も知っているだろ？」「話聞いてもらいやすいかもしない。それにあの時は戦うことも出来ずに捕まってしまったとはいえ、ミクリさんと方を並べるジムリーダー達が実力的に灰色達に遅れを取るようなことがあるとは思えなかつた。都合のいい考えだが、ルネシティを取り戻すのにあるいは協力してくれるかもしれない。

「モナミさん……ありがとうございます。僕、ジムリーダーの人たちと会つて見ます！」

「そう？何か参考になつたならよかつた。じゃあどうする？今夜はとりあえず休んで、明日の朝早く出発しようか」「

「い、いえ、これ以上迷惑かけるわけには…」

「今更だよ。それに、外はすごい雨だよ？今日はここで休んでいきなよ。ウチはなんたつて民宿なんだからせ」

僕はまたもや言葉に詰まってしまった。故郷があんな事になり、右も左もわからない世界の中で、モナミさんの暖かい言葉が本当に嬉しかつたのだ。

「…ありがとうございます…ほんとうにありがとうございます…」

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
コイキング（未定）

モナミさんの作ってくれた夕食は、本当においしかった。

「急」しらえだから、大したもの作れないよー」なんて本人は言つていたけど、この料理が大したものじゃないなんてとても思えない。僕もルークも無言になり、ひたすら食事を口に運んだ。

「すごい食欲だねえ…」

モナミさんは少々驚いていたようだ。

それもそのはずだ。料理がおいしいという事ももちろんだが、ルネを出てから初めて食べるまともな食事である。僕達はあつという間に食事をたいらげてしまった。

「ご馳走様でした…めちゃくちゃおいしかったです！」

「そ、そう？ これでも料理には多少自信あるんだよねえ。今度ちゃんとした料理作つてあげるから、楽しみにしてよー…ああ、君達疲れてるだろ？ から、先に寝ちゃって。私は片付けてから寝るから

正直なところ、僕もルークも披露困憊だつた。短期間に色々な事がありすぎた。

モナミさんの言葉に甘えることにして、僕とルークは寝室へ向かった。

ザアザア…

外は大雨のようだ。僕は暗闇の中、布団でその雨音を聞くともなしに聞いていた。

”スズ”

ルークだ。

「ん？」

”モナミさんの料理、すごくおいしかったね。スズのお母さんの料理もおいしかったけど、また違ったおいしさだよね”

「そう？母さんの料理より全然おいしかったよ」

僕は苦笑した。

母さん。ルネシティのみんな。今じゃどうしているのだろうか。心配しているだろうな…

”モナミさん…すごくいい人だよ。あの人の近くにいると、すごく暖かい気持ちが流れてくるんだ。僕達の事本当に心配してくれてる”

「うん…本当に嬉しかった。」

もし世の中あんな人ばかりだつたら…僕はそんな事を思った。それにしても、灰色達の目的は一体何なのだろうか。どれだけ考えてみても、ルネシティを占領するメリットなんて思い浮かばなかつた。それとも目的はルネシティそのものではなく、単にルネシティの閉鎖的な環境が重要だったのだろうか。

どれだけ考えても答えは出るはずも無かつた。僕達にはあまりに情報が少なすぎる。

わかっていること、推測できる事は

男達は一様に灰色の服を着ている

恐らく別の地方から来ている

この程度である。そして恐らく。

目的のためには手段を選ばない事。

人殺しをこうも簡単に行なおうとする人間がいる事を、僕は身をもつて知つた。

ぶつ殺す。灰色の言葉を思い出し、僕は身震いした。

”スズ、大丈夫だよ。僕がついてる。それに、コイキングも”

「…ははっ、そうだね！なんだか大変な事になつちゃつたけど、これからもよろしくね！ああ、そつだ。コイキングにも名前をつけてあげないと…でも…」

僕はあくびをした。

それはまた明日。とにかく、僕は眠気のピークを迎えていた。

「明日の朝一番で出発しよう…おやすみ、ルーク

”おやすみ、スズ”

雨音は一層激しくなっていたが、僕はいつの間にか眠りに落ちていった。

- 出発 - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
コイキング（未定）

「…………くん…スズくん!」

誰かが僕を揺さぶっている。僕は寝ぼけながら目を開けた。見上げる天井が自分の部屋と違うのに相変わらず違和感を感じた。僕を揺さぶっていたのはモナミさんだった。

昨日の出来事が脳裏をよぎる。

「…………あ!」

僕は飛び起きた。

隣を見ると、ルークもすでに起床していた。

「スズくん、君のポケモンも準備できてるみたいだよ。早く支度しないと……」

「は、はい、すいません!」

僕は慌ててベッドから起き上がった。

”スズ、荷物はまとめてあるからすぐ出発できるよ”

「あ、ありがとうございます!」

”スズはこんな時でも絶対寝坊すると思つたから。なんだか頼もしいや”

ルークがクスクスと笑う。

「からかわないでよ……」

僕はモナミさんから借りていた寝巻きを大急ぎで脱ぎ、自分の服に着替えた。

「朝ごはん用意してあるから、さあさあっと済ましちゃおうよ

「す、すみません…」

モナミさんはすでに朝食の支度まで済ませてくれていたようだ。それに引き換え自分ときたら……。

僕はなんだか情けなくなりつつ大急ぎで支度をして、階下へ降りていった。まだ外は薄暗いようだ。どうやら朝は止んでいるみたいだ。静かな早朝だった。

それほど寝坊したわけではないようだが、一人に比べたら寝坊には違いない。

僕は大急ぎでテープルについた。

「ここからだと一番近いのはヒワマキシティのジムだよ。スズ君はヒワマキに行くの初めて？」

モナミさんがサンドイッチをほおぱりながら言った。

「はい。というか、ルネシティから出るの自体初めての事なので…まさかこんな形で外の世界を見る事になるとは思わなかつた。」

「そうかい。私もそんなに頻繁に行くわけじゃないけど、あそこは何というかちょっと変わった町だよ。まあ行ってみればすぐわかると思うけどね」

ルネシティも中々変わった町だつたと思うけど、僕は頷いた。ヒワマキシティ…どんな町なのだろうか。

まだ見ぬ町を漠然と想像しながら、僕も朝食を平らげた。

「じゃあ、行こうか」

モナミさんがドアを開けた。

「はい。…え？」

「私もヒワマキに行きたいから、どうせなら一緒に行こうよ」

「…！」

正直、助かった。ルネシティから一步も外に出た事がなかつた僕は、あまりに物事を知らなさ過ぎる。

僕は心の中でモナミさんに感謝しながら外に出た。

水平線から太陽が登つてきた。日の出の瞬間を見るのも初めてだつた。ルネシティを出てから数日しか経つていないのに、僕の見る世界は様々な初めてで満ちていた。

「まずは121番道路だね。それから120番道路に抜けて、ヒワマキシティ。私も随分前に行つたきりだからあんまり道覚えてないんだけど、たぶん大丈夫でしょ。よし、じゃあ出発！」

行つてきます。

僕は海の向こうにあるルネシティに向かつて、心の中で呟いた。

- 出発 - (後書き)

30.000アクセス冴えました。ありがとうございます ()
m

ウォッシュキュロトム流行りすぎじゃないですか…

- こなゆき - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
コイキング（未定）

ルネシティに住んでいた身としては、町と町を移動するところのがそもそも不思議な感覚だった。

ルネにいた頃は、道路は町と町ではなく家と家を結ぶものだった。僕は今広い世界の中にいるんだなあと、改めて実感した。

昨夜の大雨は嘘のように止み、昇る太陽が世界を力強く照らし始める。

僕達は海風を受けながら、121番道路を120番道路へ抜けた。120番道路は僕が今まで僕が見た事がないような道路だった。昨日の大霖でいたるところに水溜りが出来ていて、青空と流れる雲を映し出している。

それは普通なのだが、異常に成長した背の高い植物がうつそうと茂っていた。

「…すごいや。外の世界の植物ってこんなに成長するんだ…」

「いやいや、ここは道路は特別みたいだよ。この辺りは特別雨が多いからか、植物が他の地域より大きく育つっちゃうんだって。ふふ、ヒワマキに行けばもっとすごいものが見られると思うよ」

モナミさんはなにやら含みを持たせた。

「こ、これよりすごいんですか？なんだかこわいなあ…」

「木の幹をくりぬいて住んでるとかね」

ルークが冗談っぽく言った。

「まさか…いくらなんでもそんな町さすがにないでしょ」

ルネシティみたいな町も他にあまり無いだろうが、僕は自分の故郷を棚に上げて笑った。

「じゃあ、ちょっと草むらの中を通りつか。はぐれなによつてついて来てねー」

言うが早いが、モナミさんは小さなジャングルに突入していった。

あつという間に姿が隠される。

僕も慌てて後を追つた。

それにもしても、岩肌だらけのルネシティとは大きな違いだ。いたるところに生命の気配が満ち溢れている。

僕とルークは草を掻き分けながら必死で歩いた。

草を掻き分ける作業に汗をかいっていた時、ふいに冷気がおさつた。

「さむつ…………ゆ、雪！？なんでこんな季節に……！」

上を見上げた僕は驚いた。相変わらず空は晴れているのに、雪がちらついている。

”ゆき……？”

「ああ、ルークは雪初めてだよね。雪つていつのはええと……気温が低いと、雨が凍つて雪になるんだよ。こんなに暖かかったら本来降るものじゃないはずなんだけど……」

”へえ……真っ白ですか？”

ルークは鼻頭に落ちた雪を手で擦りながら言った。

「うわ、なにこれ、雪じゃない！？」

前の方でモナミさんの声が上がる。

外の世界は本当に不思議なことだらけなのだなあと改めて思つたが、モナミさんの反応を見る限りどうやらこれは外の世界でも普通の事ではないらしい。

僕の常識はここまで通用しないのかと思って一瞬不安になつたが、少し安心した。

やがて、雪はすぐ止んでしまつた。

「なんだつたんだろ？」「雪の雪」

草むらを抜けたモナミさんが言った。

「あ……見当もつかないです……」

「うーん……まあいいか。すぐ止んだしね。それよりほら、ヒワマキ

シティが見えてきたよ」

- ヒワマキシティ - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
コイキング（未定）

ルネシティに住んでいる僕が言えたものではないかもしれないけど、ヒワマキは不思議な町だった。

建物が木の上に建っている。それに、こんなに縁に囲まれた空間は初めてだった。なんだか町に活力が満ちているような気がする。

僕は上を見上げながらモナミさんについて歩いた。

「私はちょっと知り合いのところに行つてくるから、スズ君じばりく町を見て回つてくれば」

僕は頷いて、町を回り始めた。

ヒワマキのポケモンジムはどこだろ。モナミさんは見て回つてくればと言つてくれたが、ミナモシティでの事を考へるとあまりそもそも言つていられない。また灰色達が襲つてきては面倒な事になつてしまつし、関係の無い人を巻き込んでしまうかも知れない。僕はジムを探して歩いた。

とりあえず手近にあつた梯子に登つて町を見下ろして見ると、この町の大きさがよくわかつた。大きさというか、高さというか。家と家はつり橋のようなもので繋がつており、木々で隔てられている建物へはそれを渡らないとたどり着けないようだつた。

”すごい高さだ。ね、スズ？”

「うん…」

実際に登つてみると、見た目以上に高く感じる。慣れてしまえばどうつてことないのかもしれないけど、この上で生活するというのはちょっと僕にはできそうにない。

”スズ、あの建物は他とちょっと違うよ。”

ルークの指差す方向を見ると、確かに他とは少し違つた建造物が建つていた。木の上に作られているほかの家とは違い、近代的な建物に見える。

「本當だ。とりあえず向かつてみようか…ん？」

上から見下ろして見たところ、ビルやアパートの建物まではつり橋を渡らないとたどり着けないようだ。

「これを渡るのか…」

”スズ早くー”

声のした方を見ると、ルークはすでにつり橋の中腹にいた。

「う、うん…すぐ行く…」

僕は下を見ないように意識し、おつかなびっくり足を踏み出した。

”スズ遅いよ。もしかして高いところが怖いの？”

こうじうのを高所恐怖症というんだっけか。これまで高いところに登った事なんてなかつたから気づかなかつたけど、やうか、僕はどうやら高所恐怖症というやつらしい。そういえばシロナさんはルネシティまでガブリアスで飛んできたと言つていたけど、僕にはとても同じ事はできそくになかつた。

目的の建物の前まで着くだけでなんだか消耗してしまつたが、ビルやらこれはジムで間違いなさそうだ。

ミクリさんのルネジムと、ほとんど同じ外觀をしていた。

「ちゃんと話聞いてくれるかな…入つてみよう、ルーク

僕達は緊張しながらヒツマキジムの門をくへつた。

ジムの中は独特な熱気に包まれていた。僕は入り口近くにいたトレーナーと思しき人に声をかけた。

「すみません、あの、ジムリーダーの方は…」

「おっ、君トレーナー？挑戦者なんて久しぶりだな

「え？ いえ、ジムリーダーの方に…」

僕は戸惑いながら言つたが、どうやら相手には届かなかつたようだ。

「いきなりジムリーダーと戦えると思つてゐる？ まずはこのジムのトレーナー全員倒してからだ！ すでにポケモン出して、やる気満々つて感じか… 受けて立とう。華麗な鳥ポケモンの戦いを見せてやるぜっ！」

「いや、あの、ちょっ

「

- お手伝い - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
コイキング（未定）

数十分後、僕とルークはジムから離れたところにあったベンチに腰掛けっていた。木漏れ日が優しく照らしてくれている。

”ごめん、スズ…”

落ち込んだ様子でルークが言った。

「気に入る事ないって。何にも準備してなかつたし、いきなり戦い挑まれたんだから…」

負けてしまった。

そもそも戦いに来たわけではないはずだったが、取り付く島も無かつた。

しかし、これからどうすればいいのだろう。あの様子では再び顔を出して同じ事だろう。

「ルカリオじゃないですか。珍しいポケモンを連れていますね」さてどうしたものかと考えこんでいると、ふいに声をかけられた。顔を上げると、女人人が立っていた。

この女性はルカリオを知っているようだ。

ホウエンではあまり知られないポケモンだと思っていたが、知つていてる人もいるようだった。

「はい、そうです。この地方ではあまり知っている人はいないと思つていたんですけど、お詳しいですね」

「ポケモン好きなんですよ」

クスクスと女人人は笑つた。

「ジムに挑戦ですか？ルカリオではタイプ的に中々厳しいと思いますが…」

その通りだった。ルークは鳥ポケモンに有効な技を覚えておらず、最初のトレーナーこそ倒せたもののすぐに息切れしてしまった。残

る僕の手持ちは、「イギングしかいない。

「いえ、ジムリーダーの方にお話したい事があつたんですけど……どうやらいトレーナーの人に勝たないとたどり着けないみたいで」

僕は苦笑いした。

「では、ジムに挑戦しに来たわけではないのですか」

女の人は少し考えていたようだったが、やがて言った。

「私これから用事があるのですが……もしよろしければ手伝っていたけませんか？ 一人では少々骨が折れそうなもので……もし無事に用事が済みましたら、ジムリーダーと話が出来るよう計らう事もできます。力を貸していただけませんか？」

突然の提案に驚いたが、途方に暮れていた僕達にとっては願つても無い話だった。

このままでいても埒が明かない。少し不安も感じたが、女性に協力することにした。

「僕達で力になれるかどうか分かりませんが、ぜひお手伝いさせてください。僕はスズといいます。こっちはルカリオのルーク」

僕達はペコリと頭を下げた。

「あらあら、ご丁寧に。助かります。それでは申し訳ないんですが、早速出かけましょうか。まず119番道路にある天気研究所に行きましょう。……あ、失礼しました」

女性はすたすたと歩き出しだが、ふいに後ろを振り向いた。

「私はナギと申します。スズさん、よろしくお願ひしますね」

* * Warning * *

作者はアニメ版をあまり見ていないので、アニメ版には準拠していない部分が多くあります。ので、アニメを見ている方は違和感を感じる「」があるかと思います（すいません）。

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（未定）

「雪？」

「ええ、雪です。最近このあたりで突発的な降雪が観測されているのです」

”ゆき…ねえスズ。それってこの前の…”

僕は頷いた。

「僕もヒワマキに来る途中、120番道路で雪を見ました。すぐに止んだんですけれども…」

前を歩いていたナギさんは、振り返つていった。

「まさにそれです。その原因を突き止めるのですよ。ヒワマキは自然とともに生きる町ですが、あの冷気は異常です。そもそもこの地方の気候は温暖で、冬でもあまり雪なんて降りませんからね…一部冷氣でやられてしまった植物もあるようです」

ナギさんは深刻な顔で言った。

「ナギさん、天氣研究所というのは…」

「その名の通り、天氣について研究している施設です。この施設から調査のお話を頂いたのですよ」

119番道路をしばらく川に沿つて進むと、小さな橋が見えてきた。その橋を渡つた先に研究所はあった。

僕達は研究所の門をくぐつた。

「ここにちは」

僕はナギさんの後に続いて研究所へ入つた。

「ああ、ナギさん。すいませんわざわざ…」

奥からいかにも研究員といった風情の白衣の若い男の人が出てきた。「いえ、こちらとしても何か対策を練らないといけないと思つていました。早速お話を聞かせていただきたいのですが…」

「はい…あの、こちらの少年は?」

「ああ、すみません。紹介していませんでした。こちらはスズさん

といいます。私だけでは大変な場面もあるかもしれませんので、今回の方をお手伝いしてくれることになりました

「よろしくおねがいします」

僕は頭を下げる。

「僕はアマツ。ひづりひづり、よろしくね。では一階へどうぞ」

最新の研究をするのだから当たり前といえば当たり前かもしないけど、天気研究所は近代的な建物だった。多くの書籍や端末が設置されている。僕はしばらくキヨロキヨロしていたが、やがてアマツさんがやってきた。

「早速ですが、突発的な降雪についてお伺いします。実は私はまだ実際に遭遇した事はないのですが…天泣のよつたものとはまた別なのですよね?」

ナギさんが話を振った。

「少なくとも、自然現象ではないと思います。説明つかないとこりが多すぎますし、そもそもこの地域で雪が降るといつて自体あまり考えられません」

「す、すいません、てんきゅうってなんですか?」

僕は話についていけずに言つた。

「ああ、ごめんね。天泣つていつのまにいわゆる天氣雨のことだよ」

アマツさんが説明してくれた。

「天氣雨ですか…僕がこの前雪を見たときは完全に空は晴れていて、近くに雪を降らしてこるよつた雲は無かつたと思いました。それに、すく暖かかつたし…」

「なるほどね…やっぱりこれは自然現象ではなさそつです。ヒツマキ一帯は豪雨地帯ではあるものの、肝心の氷点下以下の気温といつ降雪の条件を満たしていないですからね。人工的に雪を降らせるなんていう技術はこの研究所でも開発されていますし…」

「そうですか…となると、やはりこれはポケモンの仕業と考えた方が…」

ナギさんが呟いた。

”スズ、外みて！”

突然ルークが語りかけてきた。僕は窓の外に目をやつた。

「！ナギさん、アマツさん！」

窓の向こう側で、しんしんと雪が降っていた。

- 天氣研究所 - (後書き)

花粉辛い

- 吹雪 - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
コイキング（未定）

僕達は外に飛び出した。

降雪はそう広くない範囲で発生しており、徐々にヒワマキシティの方へ移動していった。

ついさっき僕達が渡つてきた橋の上を、雪が渡つていく。

“スズ、上！”

上を見上げた。雪間に何か小さい物体が浮遊しているのがかるりうじて見え隠れしている。あれは…ポケモン？

「やはりポケモンの仕業だつたみたいですね。イタズラ…にしては随分と気合が入つているような…ちょっと様子を見てきます。オオスバメ！」

ナギさんはポケモンに？ みると、上空に上つていった。

「ルーク…何か見えない？」

“ちょっと待つて… 途切れ途切れでよく聞こえないけど、この感情は… 恐怖…？”

「…恐怖？」

突如ナギさんを猛吹雪が襲つた。オオスバメは身を翻して吹雪をかわし、再び地上に降りてきた。

「ナギさん！ 大丈夫ですか！？」

「…ユキメノコです。なんでこんなところに… ますい、刺激してしまつたようです。こっちに来る！」

ナギさんはオオスバメをモンスター ボールに戻して言った。

吹雪の中心が僕達の方に向かつてきた。雪間からちらりとユキメノコの姿が見えた。小さい頃絵本で読んだ雪女のイメージと、それは一致した。

僕達は橋の真ん中で、吹雪の塊と向かい合つた。

“こわい… 怖がつてる？”

「まずいですね… 私のポケモンは氷に滅法弱い。 しかもこの火力、

少々規格外です… エアームド！

ナギさんは、まるで鋼のような羽を持ったポケモンを出した。

吹雪なのに火力なんてなんだかおかしな表現だなあと思つたけど、そんな事を考へてゐる場合ではなかつた。

”！危ない”

再び吹雪が僕達めがけて襲い掛かつてくる。ルークとエアームドが僕達の前に立ち、吹雪を防いでくれた。

「ルーク！」

”大丈夫……でも、このままじゃいすれ押し切られる…”

ルークのおかげで僕達には直接は当たつていなければ、冷氣自体を遮断できるわけではない。このままで次第に体の熱を奪い取られてしまうだらう。ルークの体力だつて無限ではない。

「ルーク！何とかあのユキメノコに話しかけられないかな…

”さつきからやつてみてるんだけど、うまく波長が合わせられないんだ。相当錯乱状態みたい…”

錯乱状態… 一体何に怯えているのだろうか。

びゅお！

一層激しさを増した吹雪が僕達を襲い、僕の腰につけていたモンスター・ボールが数メートル先に吹き飛んだ。吹雪にあおられて、橋の上をコロコロと転がつていく。

「あつ…」

衝撃でコイキングが姿を現した。吹雪の中で、ぴちぴちとはねている。

まずい。タイプ的には氷に耐性こそあるが、なんといつてもコイキングである。

これほどの吹雪にさらされ続けたら、あつという間に凍死してしまうだらう。

「くそつ…」

僕はルークの後ろから出て、コイキングに向かつて走り出した。と、ふいに吹雪が止んだ。

猛烈な冷気にさらされる事を覚悟してルークの後ろから飛び出したのだが、想像していた感覚は襲つてこなかつた。冷氣ですでに皮膚感覚が馬鹿になつてしまつてゐるのだろうか。

とにかく僕はコイキングの元へと走つた。

すうー、小さな影がコイキングの前に舞い降りた。

僕は驚いて足を止めた。先ほどまで強烈な吹雪を放つていたユキメノコが、コイキングの前にいる。

雪に隠れていたさつきまでとは違い、完全にその姿を見せてくる。

”……いい”

「えつ？」

”かわいい……だつて”

僕は思わずルークを振り返つた。かわ……いい？

再びコイキングのほうに目をやると、コキメノコがコイキングを抱きしめていた。

「……かわいいって、まさかコイキングが？」

”……そうみたい”

僕はなんとなく、メノクラゲをかわいがつていた故郷の友人を思い出した。

- はぐれユキメノコ - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
コイキング（未定）

- はぐれユキメノコ -

さつきまでの吹雪が嘘のようだった。

冷え切った体も次第に温かみを取り戻していく。

”ええとね…”

ルークはユキメノコと話したことを僕に伝えてくれた。

ユキメノコはずっと遠くからやつてきたりしに。ふよふよと漂つて
いるうちに、どこからきたのかわからなくなってしまったそうだ。
見知らぬ土地で気候も体に合わず、心を許せる仲間もない。心細
さから暴走してしまっていた。

二人の会話を要約すると、こんな感じだった。

「ふむ… まあ、異変の原因を突き止められたので、ひとまずよしと
しましょう。しかし、このユキメノコはビビりしまじょ。このまま
ではまたいづれ…」

ユキメノコはコイキングを抱きかかえて、嬉しそうにしている。

”スズ、スズ、ちょっと”

「ん？」

ルークとユキメノコが近付いてきた。

”スズ… このコの名前、なんていうの”

突如頭の中に声が聞こえた。ルークのものではない。

”ごめん、びっくりした？ 僕を介してユキメノコと話してもらつて
るんだ。”

僕は驚いた。こんな事もできるのか。では先ほど聞こえた声はユキ
メノコの声ということだろう。

名前… そういえばまだ決めていなかつた。

”名前… 名前か… うーん”

コイキング。今でこそコイキングでしかないけど、いずれギャラード
スになる存在である。未来を視野に入れた名前をつけるべきだろう
か。

ギヤ……ギュ……ギョ……突然名前を決めるところのは中々難しいものである。

ギヤ……ギイ……ギイ……！

「この口の名前はギイっていうんだよ」

勢いで決めてしまった。

”ギイっていうの……”

「トイキングって……かわいいのだろうか。世の中にはやはり色々な感覚の持ち主がいるもんだなあ。

”スズ、わたしも一緒に連れて行つてほしい。もう寂しいのいやだ”
”ユキメノコは寂しさで我を忘れてしまっていたみたいなんだ。もしできたら、一緒に……”

僕は少し考えたが言つた。

「ナギさん……このユキメノコ、僕が引き取つてもいいですか？」

「もちろんですよ。あなたのトイキングを随分と気に入つたみたいですね。私が引き取つてもいいのですが、ヒワマキの気候はきっとその口には少々厳しいでしょ？」

「わかりました。じゃあ、僕達と一緒に行こう！」

”ありがとう。スズ、わたしにも名前をつけてほしい”

ユキメノコはトイキングを抱いたまま、じっと僕を見つめていた。
「名前か……うん、わかった。そうだな……ユキメノコ……ユキメノコ……ユキ……キメノ……メメ……」

一日に二つも名前を考える事があるなんて思いもしなかつた。

「よし、君の名前はメメ！」

”めめ……ありがとうスズ”

ユキメノコは嬉しそうに口口口と笑つた。

「ナギさん！」

ヒワマキの方から、アマツさんが走つてきた。後ろに何人か人を連れている。

どうやらヒワマキから応援を呼んできてくれたらしい。

「大丈夫ですか！？おや、そのポケモンは…」

アマツさんがメメを見ると、メメは僕の後ろに隠れた。

「異変の原因はコキメノコだったようです。どうやら迷子になってしまって、寂しさから暴走してしまっていたようです。解決したので、もう大丈夫ですよ。雪が降ることはないでしょ」

「それはよかつた…いやーしかし無事で何よりだ。我らがジムリーダーの身に何かあつたら大変だ」

「ふふ、私もそんなにヤフではありませんよ。…今回はスズさんがいなかつたら危なかつたですけれどね」

ナギさんは駆けつけてきたトレーナー達と笑った。

…ん？ジムリーダー？

「さて、異変も解決した事ですしヒワマキシティに戻りましょうか」「ナギさん…あの…もしかしてナギさんって…」

ナギさんはこり笑つて言つた。

「お手伝いいただきありがとうございました。今度はヒワマキジムのリーダーとして、スズさんのお話を伺いしましょ」

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
コイキング（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

「正体不明の灰色の組織ですか…」

再びヒワマキシティに戻った僕は、ナギさんにジムの奥へ案内してもらつた。

ナギさんが出してくれたコーヒーを飲みひと息ついたところで、僕は早速ナギさんにルネシティの状況とこに数日で起つた事を説明した。ナギさんは真剣に聞いてくれていた。

一通り説明し終えたところで、ナギさんが口を開いた。

「すみません、私はその組織の事はわかりません。スズさんの話を聞く限り、私も他の地方の者達ではないかと思います。その話が事実ならば見過ごしてはおけない状況のようですね」

「じゃあ…」

「はい。ヒワマキジムリーダーのナギ、スズさんに協力させていただきます」

「…ありがとうございます！」

僕は立ち上がり頭を下げた。

「しかし、その組織は用意を周到に行なつているようですね。ミクリさんほどのトレーナーが身動きできない状況にさせられるほどに。私達だけで動くのは少々危険かもしません」

ナギさんはしばらく考えて言った。

「他のジムのリーダーにも協力を仰ぎましょう。話を聞く限りルネシティの人たちの安全はとりあえず保障されているようですし、こちらも万全の体制で望むべきでしょう。やはり町を一つを支配下に置くという行為は尋常ではありませんから」

僕は頷く。

この地図を見てください、とナギさんは言った。

「スズさんはそのご様子だと、ヒワマキが初めて立ち寄られたジムですね？私はまずトクサネジムに向かいます

ナギさんがヒワマキ・トクサネを指でなぞつた。

トクサネシティには、確か宇宙センターなる施設があると聞いたことがあった。つい最近ルネシティから出たばかりの僕は、今いる場所ですら広大で、宇宙の事を考えるとなんだか目眩がしそうだつた。

「私はその後、ムロ・トウカ・カナズミへと向かい、ジムリーダーへこのことをお伝えし、協力を仰ごうと思います。スズさんはフエンタウンとキンセツシティへ向かい、ジムリーダーにこの事を伝えください。私は先ほどの順番で町を回ります。最終的にカイナシティで合流しましょう」

「この地図の上半分の町は僕が回るような形になりますね……はい、わかりました」

今までの足跡から考えると、ホウエン地方を半周するような形になる。

「今日はもう遅いですから、明日出発しましょう。明日の朝またこちらにいらしてください」

僕はお礼を言つてジムを出た。

外はもう薄暗くなり始めている。

”ナギさん、話聞いてくれてよかつたね”

隣にいたルークが僕を見て言つた。

”スズとルークの故郷、たいへんなことになつていてるのね……”

ギイを抱いたまま、メメが心配そうに言つ。

「うん……でも、ナギさんが話を聞いてくれて本当によかつた。これで僕のできることもはつきりしたし……」

次の目的地はキンセツシティ。ついさつき立ち寄った天気研究所がある119番道路をさらに進み、118番道路を抜けた先にあるようだ。

「おーい、スズくん！」

振り返ると、モナミさんだつた。

「あれ、新しいポケモン捕まえたの？」

「はい、ユキメノコのメメです」
僕の後ろに隠れるようにしてモナミさんを窺っているメメを紹介した。

「ふーん、す」「じやない。それで、どうだった、ジムは？」
「はい、協力してくださるそうです！」

「そう！よかつた！…それで、問題は解決しそうなの？」

「いえ…ナギさんと話し合つたんですけど、今度はキンセツシティのジムリーダーの方にも協力をお願いすることになりました」

「ええ、そうなの！？なんだか本当に大事みたいだね…」

モナミさんは驚いたような声をあげた。確かに、各地のジムリーダーに協力を要請するというのは中々に大層な出来事だらう。

「とりあえず私部屋を借りられたからさ、そこに行つて話そつか。
お腹も減つたでしょ？」

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

モナミさんに案内されて入った部屋は、木の匂いに包まれていた。そして広くは無いが、生活していくのに不自由はない広さだった。モナミさんはすぐに料理を運んできてくれた。人から指摘されたりおいしそうな匂いをかいだりして初めて空腹に気づくという事があるが、僕はまさにその状態だつたようだ。モナミさんが運んできてくれた夕食を見た瞬間、僕のお腹は悲鳴を上げ始めた。

”おいしゃつ…”

メメもじこつとお皿に盛られた料理を注視していた。

「実はヒワマキシティには昔の友人が住んでいてね。使つてない部屋があるから安く貸してくれることになつたんだよ」

僕は今日あつた事を説明し、ナギさんの協力を得られた事を伝えた。「じゃあズズくんはキンセツシティに向かうの？」

「はい。明日にでも出発しようと思います」

料理を口に運びながら僕は答える。簡単なものしかできないけど…

なんて言つていたけど、モナミさんの料理は相変わらずおいしい。

「…そうかい。私はここでしばらく隠れている事にするよ。民宿の事もあるから、そう遠くに離れるわけにはいかないし…。ズズくんさえよければここにいてもらつても全然よかつたんだけど、どうやらそういう訳にはいかないみたいだね」

本当にありがたい申し出だつたが、受け入れるわけにはいかなかつた。進展こそしたものの、問題が解決したわけではないのだ。

「すいません… そう言つていただけるのは本当に嬉しいです」

「気をつけてね… そうだ、私は使わないから、この地図持つて行つてよ」

モナミさんがヒワマキシティに来るときに使つていたものだつた。

「いいんですか、本当に助かります。何から何まで本当にありがと

「いざります

「いや、このくらいしか力になつてあげられなくて申し訳ない… そ
うだ、おいしいジュースを貰つたんだよ。トロピウスっていうポケ
モンに生る木の実のジュースだつて。飲んでみようよ。スズくんは
まだお酒は飲めないだろ？ から、わざやかだけこれで壮行会しよ
う！」

モナミさんは笑顔で言つてくれた。

翌日、僕は朝早く起きた。

外はまだ薄暗いようだ。こんな時間に起きる事ができたのはいつ以
来だろ？

モナミさんはまだ寝ているようだったので、僕はそつとツリーハウ
スを後にした。

ジムに向かうと、ナギさんはすでに外に出て準備をしていた。

「おはよいざります、ナギさん

「おはよいざります。スズさん、準備はできていますか？」

僕は頷く。

僕の返事を確認すると、ナギさんはモンスター・ボールを放つた。
大きな葉っぱのような羽を持った、首長竜のようなポケモンが姿を
現す。

トロピウスというのだと、ナギさんは教えてくれた。トロピウスは
優しそうな目をしていた。
昨夜飲んだジュースはこのポケモンが元になつてているのかと、僕は
しげしげと眺めた。

「スズさん、これを渡しておきます」

そう言つと、ナギさんは懐から封書のよつたものを出した。

「これは？」

「私の書いた書状のようなものですよ。ジムリーダーの皆さんにあ
なたの身分を証明することの手助けになると思います。… もつとも
ジムリーダーには癖のある人が多いので、それを見せたからといつ

てとんとん拍子に話が進むかは保証できませんが

「いえ、充分です。ありがとうございます」

「では、私はそろそろ行きます。道中大変な事もあるでしょうが、

お互い無事でカイナシティで会いましょう！」

そう言ひとナギさんはトロピウスの背に飛び乗り、朝焼けの空へ飛び立つていった。

「…僕たちも行こうか

僕はナギさんを見送り、ヒワマキシティを後にした。

- 次の町へ - (後書き)

地震の被害にあわれた皆様及び他府県で見守つていらっしゃる「関係者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

小雨の地域は震度6弱でした。まだ余震が続いております。直接的な大きな被害はほとんどありませんでしたが多少バタバタとしておりますので、しばらくの間今までのペースでの投稿は少し難しいかもしれません。

楽しみにしてくれた方、申し訳ありません。

40,000アクセス越えました。本当にありがとうございます。

「まず、あなた方の人数を把握させていただく。親しい者同士でひとかたまりになつていただけないか」

私は従つた。何か脅しの文句を言われたわけではない。しかし、男達の言葉には有無を言わせない力が込められていた。私はお父さんとお母さんと一緒に組んだ。

「よろしい。ご協力感謝する。今から、あなた方に番号を付けさせていただく。今後はそれで呼び合つてもらいたい」

私には23番と書かれたプレートが渡された。お父さんとお母さんは22番と24番だつた。

「それでは、これよりグループ分けを行なう」

町の人たちの間にどよめきがおこつた。

「今渡された番号から、なるべく離れた番号の者2・3人とグループを作つてもらひ。あなた方にはこれからそのグループで生活していただく」

今度はどよめきが怒声に変わつた。

どういふことだ！

話が違うじゃないか！

今考えれば、私達は随分甘い考えだつたのだなあと思つ。ほんやりと続く平和というのは人間の頭を鈍くする。危機感知能力を奪い取つていく。

灰色の男は特に感情を抱かぬ声で言つた。

「私は言つたな？普段の生活に対してある程度の制限はさせてもらうが、決して積極的に危害は加えないと。君達はそれに同意した。違うか？」

ある程度といつのはつまり、彼らのさじ加減といつだらう。私達は黙つてしまつた。

「文句がないようなので話を続ける。この町は湖によつて二つのゲ

ロックに分けられているようだな。これから君達の居住ブロックを指定する。日常生活はその範囲内で済ますよう。君達はこれだけ守つていればよい

いつのまにやら男達の私達に対する呼称は、「君達」に変わつていった。

いつのよう、太陽が昇つてくる。

私はカーテンを開けた。

部屋を出て、居間に向かう。

「おはようございます」

「おはよう、シズクちゃん

「あの……番号で呼んだ方が……」

「あら……そうだったわね。ごめんね、まだ慣れなくて……」

スズくんのお母さんは苦笑いを浮かべた。胸には「3」と刻まれたプレートが付けられていた。

私は今、スズくんのお母さんと暮らししている。

あの日。灰色の男達がルネシティを占拠したあの日。

スズくんトリオルは帰つてこなかつた。

おばさんは何も言わないので。悲しみの言葉は吐かないけれど。

その様子は見ていて胸が締め付けられるような気分になる。

私の大好きだったスズくん。こんな事になるなんて思いもしなかつた。

ルネシティでの平穏な日々が、ただただ続していくと思つていた。

私が町を散歩していると、顔にガーゼを当て、腕を吊つたノリくんが円形広場にいるのが見えた。私とノリくんは同じブロックに住んでいて、同じブロックに住んでいる者どうしだとすれば会話することも許されている。灰色達があちこちに配備されていて、あまり好き勝手にしゃべれるというわけではないんだけれど。

「ノリく… 8番くん、おはよう」

「シズク… いや、23番だっけか。うん、おはよう」

ノリくんは、何故だかバツが悪そうに挨拶を返した。
「何してるの?」

「いや…」

ノリくんは少し迷ったようだつたが、話始めた。

「ここは、あいつと最後に別れた場所なんだよ」
あいつというのが誰だか、聞くまでもなかつた。

「あの時はスズを逃がして少しでも灰色を足止めできればと思つたんだけどな… 余計なことだつたんじゃないかつて、か。もしあそこで、俺達が抵抗せずに捕まつていたら…」

私は何も言えなかつた。

「俺は、簡単にやられたよ。アバゴーラつて言つてたつける、あのポケモン。さすがに勝てるとは思わなかつたけど、逃げる事に徹すればなんとかなるんじゃないかつて思つたんだ」

「でも、ダメだつた。あいつ等は素人じやない。こんなことやうつ

つてんだから、当たり前だよな。なぶられて、それで終わりだつた」

「どうしても頭に浮かんで… 俺があんなこと言わずに大人しく捕まつていれば、スズは少なくとも死なずに済んだんじゃないかつて…」
ノリくんの声は震えていた。ノリくんの目から雫が流れ落ち、包帯に染み込んでいくのが見えた。

私には、かける言葉が見つからなかつた。

あの日。

灰色の男達がルネシティを占拠したあの日。

帰ってきたのはボロボロになつたノリくんだけだった。

男達は、スズくんは湖に落ちて死んだとだけ言つていた。私達に眞偽を確かめる方法はなかつた。

私がスズくんと最後に話したのはどんなことだつただひつ。

ノリくんの横に座り、私は静かに泣いた。

灰色達の意図がすぐにはわからなかつたのは、私が比較的氣心の知れたスズくんのお母さんと組んだからだつたと思う。

他の住人達は住み慣れない家、氣心の知れないパートナーと長時間一緒にいることに大きなストレスを感じてしまい、次第に元気を失つていつた。小さな町とはいえ全員が全員知り合いというわけでもないし、波長が合つ合わないは言わずもがなだつ。

そういうた抗議を、男達は徹底して撥ね退けた。

「我々はある程度の制限はさせてもらうと事前に要求したはずである。諸君らはそれを受け入れたから今があるのではないか?我々に抗議をするのは筋違いだ」

おかしな理屈だと思つた。そもそも私達に選択肢などなかつたじゃないの。

私たち町民は男達に対して、無力だつた。

「シズクちゃん晩ごはんできたわよ、食べましょ」

スズくんのお母さんだ。私達は料理当番を交代でこなしていた。今日は私は休みだつた。

「おいしいです!おばさん本当に料理上手...私もいつかこんなふうに料理できるようになりたいなあ...」

「あらあら、お世辞なんて言わなくていいのよ。お口に合わないかもしぬないけど、好き嫌いしちゃダメよ。スズなんて...」

言いかけてハッとしたように、スズくんのお母さんは黙ってしまった。

「…本当に悪いですょ！私自分の料理ふるまつのが恥ずかしいです！」

私はそう言って、オムライスにかぶりついた。それは本当に悪い、なんだか涙がこみ上げてきました。

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

天気研究所を訪れたときは119番道路は比較的整備された道だと感じたが、研究所を越えた辺りから再び背の高い草が目立ち始めた。すぐに僕たちは道を完全に多い尽くすほどの中の鬱蒼とした草の森にぶち当たった。

「またこの草の中を行くのか…」

120番道路ではモナミさんが掻き分けてくれた後をついていくだけだったが、今回は自ら進んでいかないといけないだらう。

”スズ、がんばりう！”

ルークが右腕を振り回しながら草むらに突入した。

”メメもがんばる”

そういう言ひと、ギイを抱きかかえたメメもルークの後に続く。

そうだ、こんな事で弱音を吐いている時じゃない。僕も慌てて後に続いた。

「うわっ、何か絡んだよ」

”ぜんぜん前がみえない…”

”スズ、足元気をつけて”

どのくらい草の中を進んだらうか、草の森から脱出すると、再び整備された道路に出た。

「潮の香りがする！」

必死で草の中を進んでいた時は気がつかなかつたが、海が近いようだ。

タウンマップを確認すると、どりやう内陸部を回り込んで再び海沿いに出てきたようだつた。

しばらく進むと、海にぶつかつた。

「ええと、ここはもう118番道路になるのかな。ここまできればキンセツシティは間もなくのはずだよ。もうちょっとがんばって歩こう！」

道中ずっとメメに抱かれたままのギイも久方ぶりの潮の匂いを懐かしがつているのか、ぴちぴちとせわしなく動いていた。

僕たちは浜辺に沿つて歩いたが、やがて歩みを止めた。

「あれ…道が途切れる」

浜辺は途中で途切れおり、対岸に小さく街並みが見える。地図上では特に記載されていないが、どうやら118番道路は海峡を挟んで隔てられているようだった。

「まいっただ…まさかギイにつかまつて渡るわけにもいかないし…」
僕はメメに抱きかかえられたままのギイを見た。ギイは相変わらずぴちぴちと動いていた。

そう遠くない距離とはいえ、泳いで渡るとはとても思えない。

「おー。お疲れ、随分待つたわ。君、中々立ち回りうまいじゃないか。仲間から通信で聞いたよ、まさかジムリーダー味方につけたは思わなかつた」

驚いて振り返ると、ここ最近でずいぶん見慣れてしまった色が出現していた。

「ここで待つてればいつか君と会えると思つていたんだよ。118番道路はこの海峡で東西に隔てられているから、この先へ進むには海を渡るしかない。君の持つてるポケモンはルカリオだけだろう?」

”メメとギイもいる”

メメが僕の後ろから顔を出した。

「…ん、それはユキメノロカ。へえ、ルカリオといいどっちもこの地方に生息していないポケモンじゃないか。君珍しいポケモンに好かれる術でも知つてるの?」

ギイがカウンタされていなかつたのはこの際気にすまい。後ろは海。前は灰色。逃げ場は無かつた。

「君達この先どうする?君の手持ちポケモンじゃこの海峡を渡る事はできない。まさかコイキングで進むわけにもいかないよな?」

灰色の言つとおりだつた。

「そこでだ、俺とちょっとポケモン勝負して遊ばないか？俺に勝てたらあそこにある船貸してやるよ。俺はヒマなんだ、ゲームしよう」灰色の視線を追うと、確かに小船があつた。長距離は難しいだろうが、この海峡ぐらいなら渡る事ができるだろ？

「あの船は…」

「あれは対岸にいた釣り人が持つてた船をちょっと借りたんだよ。あの船があれば君を釣りやすくなるだろ？と思つてな。君が勝てば船を入れて海峡を渡る事が出来る。且つ、船を奪われた哀れな釣り人に船を返すことも出来る。一石二鳥だ」

”スズ、やろう”

「ルーク、でも…」

ぼくは唇を噛んだ。まさかこんなに早く見つかってしまうとは思つていなかつた。あわよくばこのまま遭遇せずに町を回れないかと考えていたのだが、さすがに考えが甘すぎたようだ。

”大丈夫、必ず勝つよ”

ルークが力強く頷く。僕も覚悟を決めた。

「…あんたの話に乗るわけじゃないけど、確かにこのままじゃどうしようもない。いいよ、やろう」

「そうこなくつちや。待つてた甲斐がありましたわな。キリキザン！」

灰色がボールを放ると、見るからに攻撃的な外見をしたポケモンが姿を現した。腹部、腕、頭部にいかにも凶悪な刃が耀いている。まるで全身が凶器で覆われているかのようだつた。

ルークより少し上背があるようで、その分力も強そうに見えた。

”スズ…多分あいつも鋼だ”

”鋼…”

男の使うポケモンは、相変わらず初めて見る種族だつた。しかし鋼であれば、ルークとは戦闘の相性はかみ合つはずである。

「ルーク…気をつけて」

”
う
ん
！
”

- VS キリキザン - (前書き)

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
コイキング（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

ルークとキリキザンは浜辺で対峙した。

”オマエ、力。コンカイのテキは”

ルークとキリキザンの会話が頭に流れ込んでくる。

”そうみたいだよ。いくぞ！”

”タノシマせてクレ”

ルークは砂浜を蹴つて一気に距離を詰め、接近戦を仕掛けた。拳が闘気を帯び、徐々に輝き始める。

鋼と鋼同士があるので、ルークの格闘タイプはプラスに作用するであろうと思われた。

キリキザンは軽くバックステップし、迎撃体制に入る。

ルークの発勁がキリキザンと激突しようかというとき、キリキザンの前の砂浜が突如盛り上がり、巨大な何かが姿を現した。ルークより一周りは大きいだろうか。ボシュウウウウと、ルークの拳の衝撃が逃げていくような音がする。

”！”

「な、なんだあれ！」

それはまるでロボットのような…いや、実際僕はロボットだと思った。それほどに突然現れたそれは、ロボットのイメージにそぐっていた。

「おいおい、一対一なんて言つた覚えは無いぜ。君達まだ頭の中が少々平和みたいだな。俺達は一般的に言つてこの、まあ悪党だ。今この君みたいな顔見る瞬間が…くふふ、楽しくてしょうがないよ」灰色は耳障りな声をたてて笑つた。聞いてもいないのに、ペラペラと喋り続ける。

「あれはゴルーグって古代に作られたポケモンだ。ただの力任せの攻撃は中々通さないよ。あいつは本来生命を守るように戒律を定められてたらしいんだが、うちのボスがブラックボックスを書き換え

てくれてね。今ではご覧の通りだ

ゴルーグはそのままルークの腕を掴むと、無造作に放り投げた。ゴルーグがさらに地面に拳を突き立てるど、ルークめがけて地割れが走る。

ルークは空中で体勢を立て直して着地したが、地割れの衝撃が直撃し吹き飛ばされてしまった。

すかさずゴルーグが追撃にかかる。

「ルーク、前！」

ゴルーグが拳を組み、ハンマーのよろこび振り下ろしてきました。

”う……”

”オット、ウゴクなア”

いつの間にかキリキザンがルークの背後に姿を現し、回避しようとしたルークを押さえつけた。

ゴルーグは動きこそ鈍かつたが、その分いかにも攻撃に重さを感じる。

「ルーク！」

びゅお！

僕が叫ぶのとほぼ同時だった。追撃にかかるゴルーグを集約された猛吹雪が襲い、動きを一気に鈍らせた。

”スズ、ギイをもつてて”

ルークはその隙にキリキザンのいましめを解き、再び距離を取つた。

”メメもたたかう”

しんしんと雪が降り始める。メメがルークの前に舞い降りた。

- VS キッキサン - (後書き)

どう見てもロボ。

50,000アクセス越えました。感謝してもしきれません。

- 遠距離攻撃 - (前書き)

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

「メメ、ゴルーグの相手をしてくれ、ルークは隙を見て後ろのキリキザンを」

頷くと、ルークとメメはそれぞれ飛び出した。

ゴルーグが掌に黒い影の塊を生成し、メメに向けて放つてきた。

“ まけない ”

メメも目の前に黒色の球体を創造すると、迫つてくる黒玉に向けてぶつけた。

二つの玉は正面から衝突しじばらくの間せめぎ合つていたが、やがてメメの玉がゴルーグのそれに打ち勝ち、そのままゴルーグの胸を直撃した。方膝をついたゴルーグの肩を踏み切つてルークが跳躍しそのままキリキザンに向かつてとび膝蹴りを見舞う。

“ グツウ、オモイ ナ ”

かろうじて受け止めたキリキザンはルークの足を掴むと、後方へ放り投げた。

それは攻撃ではなく単に放り投げただけのようであり、ルークは難なく着地する。

キリキザンはルークを放り投げると同時にメメの方に向かつて走り出した。

“ ！ ”

メメは慌てて雪間に隠れようとしたが、キリキザンの方が一手早かつた。吹雪の中にその凶悪な手を突つ込む。

“ ツカマエタ、フフ ”

「メメ！」

メメが雪の中から引きずり出された。吹雪が止んでしまつ。

“ スズ…くるしい… ”

キリキザンが嬉しそうな笑みを浮かべた。

“ 一対一ダナンテ キメタ オボエハ ナイ ”

キリキザンはメメの首を掴んで高く掲げ、そのまま凶器のよつなもう一方の手をさらに研ぎ澄ませた。

”メメ！”

ルークの声が頭に響く。

”ソンナトコロカラ ジヤ マニアワナイヨ。… フフ、バイバイ”
キリキザンの手刀がメメを切り刻まんとしたその時、キリキザンの体が大きく吹き飛んだ。

”ガアツ！イ、イタイ…ナニ…”

ルークの両掌に青白い光が灯っていた。両手で光を包み込むようにして球をつくり、再びキリキザンに向かって打ち出す。

青白い球体がキリキザンを直撃し、キリキザンは動かなくなつた。

「メメ、大丈夫か！」

僕はケホケホと咳き込んでいるメメに駆け寄つた。

”勝つたよ、スズ”

ルークが戻つてくる。

「ああ…勝つた…よかつた…」

僕はほとんど見ていただけだったが、安堵感から脱力してしまつた。

「…ルーク…さつきの技は？」

”メメのさつきの技を見て閃いたんだよ。あの要領で鬪氣をじぼせるんじゃないから”

「それは…成功してよかつた。メメ、危ないところだったね」

”たすかった。ありがとうルーク”

「二人とも本当にお疲れ様。僕はその…なんにもできなくてごめん

…」

二人が戦つている間に僕が出来た事といえば、精々悲鳴を上げる」とぐらいのものだった。

”そんなことない”

ルークが頷く。

”スズが後ろで見ててくれるから、僕達は安心して戦えるんだよ”

僕の腕の中で、ギイがぴちぴちと動いていた。

- 遠距離攻撃 - (後書き)

波動弾？波導弾？

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

「あーあ、負けちまつたか

大して残念でもなさそうな灰色の声が聞こえた。僕は再び気を引き締める。

「結構やるもんだな。君トレーナーの才能あるんじゃないの？」

灰色にそんな事を言われても全く嬉しくなかつた。それに僕はほとんど見ていただけだ。

「まあ、ともあれ君の勝ちだ、おめでとう。君これからも別のジム回るの？」

「…そんな事お前達に教えるわけないだ」

「ははっ、そりやそうだな。まあ、精々用心することだね。俺なんかは下つ端だが、俺達の中にもそれなりの実力者はいる。ジムリーダーだつて余裕こいていられないぜ、多分。ヒワマキのジムリーダーが無事だといいな」

灰色がニヤニヤと笑つて言つた。

「…僕なんかがナギさんの心配したつて仕方ない。今は先に進む事だけ考えるよ」

「くく、言葉とは裏腹に、君随分心配そうな顔してるぜ。さて約束だ、あの船乗つていきなよ。俺はさつさと退散するから…あ、なんだ。ゴルーグ完全にやられちまつてるな。エネルギーだだ漏れじやないか。こりやもう使い物にならない…どうやつて帰るかな…まあいいか。キリキザン、行くぞ」

ブツブツ呟いていたが、キリキザンを連れて灰色は行つてしまつた。随分とあつさり行つてしまつた。

ヒワマキのジムリーダーが無事だといいな…灰色の残した言葉は少なからず僕の心に不安の影を落としたが、さつき灰色に言つたとおりだつた。僕がナギさんの心配をして仕方が無い。

「あいつ……ゴルーグ置いて行つちやつたけど……」

僕は浜辺で膝を突いたまま黒い煙を上げ続けているポケモンを見た。これもポケモンなのか……なんだかポケモンのイメージを覆すような感じだ。

これは……体は土で作られているのかな?

僕たちは恐る恐る近寄つて見るが、動く様子は無い。

”…………タ…………スク”

「え?」

ふいに頭の中に声が聞こえた。今まで聞いたことの無い声だった。ゴルーグの声という事だらうか。

”アス…………リ…………スク…………を…………守…………”

アスタリスク?

ゴルーグから出ていた黒い煙が途切れ、完全に活動音がしなくなつた。

”スズ、あすたりすくつて?”

「僕も聞いたことないよ……」

最後、ゴルーグはなんと言つたのだらうか。守つてと聞こえたような気もしたけど。

しかし心当たりが無いものを守れと言われてもどうしようもなかつた。

”……海を渡ろう。キンセツシティはすぐだよ”

僕達は灰色が置いていつた小船に乗り込んだ。

ナギさんは大丈夫だらうか。やっぱり僕は心配で、なんとなく空を見上げた。

この問題に取り組むことは、

「まつたく…あの一人はどうで何をしてこるのでしょ…」

ため息まじりにナギが呟いた。

大きな葉っぱのような翼を羽ばたかせ、風を受けながらナギとトロピウスが飛んでいる。

ヒワマキシティを飛び立つてから程なくナギはトクサネシティを訪ねたのだが、トクサネジムのジムリーダーは不在だった。

「リーダーのお一人は、たまにふらっと出かけることがあるんですよ…申し訳ありません、私達にも行き先はちょっと…ナギさんが訪ねてこられた事はお伝えしておきますので…」

ジムのトレーナー達に聞いてみたが、どうやら行き先に心当たりはないようだった。

仕方なくナギは手紙を残してトクサネシティを飛び立つたのだった。

トクサネシティのジムリーダー…フウとランに会つことができなかつたナギは、トクサネシティを飛び立ち、126番水道の上空を行っていた。

ナギの頭に、ふとよぎる。本当にルネシティは、あの少年が言つていたような状況に置かれているのだろうかと。

必死の形相で故郷の事を話してくれたスズの事を疑つているわけではない。信用していないわけではない。

しかし、ルネシティにはミクリというジムリーダーがいる。どのような状況だったかは詳しくはわからないがしかし、ミクリの実力を身をもつて知つているナギとしては、ミクリほどのトレーナーが何も出来ず捕らえられてしまつたという事態がにわかに信じ難くもあつた。

ここからならルネシティはそう遠くない。上空から様子を窺うことぐらいはできるのではないだろうか。ナギはそう考えた。ナギレベル

ルの鳥ポケモンの使い手なら、ルネシティを囲む外壁を飛び越える事も容易だつた。

「トロピウス…少し進路を変更しましよう。西へ…ルネシティへ向かつて飛んでください」

トロピウスは小さく鳴き、進路を微調整した。
そのまましばらく飛行し、ルネシティが目視できる程度の距離になつた時だつた。ふいに鳥の鳴き声が聞こえた。
目を凝らすと、ルネシティの方角から一羽の鳥が飛んでくるのが見える。

「あれは…バルジーナ！？なぜホウエンに…」

口に出したナギは、すぐに答えにたどり着く。あれはおそらくあの少年の言つていた灰色達のポケモンなのだろうと。ところが、侵略者達はイッシュ地方から…？

考へている時間はあまり無かつた。バルジーナはまっすぐナギとトロピウスに向かつて飛んでくる。

「トロピウス、ここの空域から離脱しましよう。まだ相手と事を構えたくありません。この距離であれば振り切れるはず」
トロピウスは即座に急旋回し、バルジーナの縄張りから離脱を試みた。と、その時バルジーナが大きな翼を羽ばたかせ、ものすごい突風を巻き起こした。方向転換仕掛けたところを強風に煽られ、トロピウスが大きくバランスを崩す。

「トロピウス！大丈夫ですか！」

気を取られた一瞬だつた。ナギはすぐに一手ミスをしたことに気がついた。

一手のミスであるが、大きなミス。

ナギたちのいる高度よりさらなる上空から、独特の風切り音が一気に接近してくる。

「…この風切り音は…まずい！」

遥か上空からトロピウスめがけて急降下してくる影を田の端で捕らえた時にはもう遅かつた。

急降下してきた影がそのままの勢いで直撃し、トロピウスの片翼がもがれてしまう。

影はそのまま滑空し、鋭く鳴いた。

「ブレイブバーード……ウォーグル……ですか……くつ」

片方の翼を失ったトロピウスは小さく声あげ、羽ばたく事を止めてしまう。万有引力の法則に従い、一人は落下を始めた。

「トロピウス……ごめんなさい……」

ナギはトロピウスをモンスター・ボールに戻すと、静かに大海原へ落下していった。

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

「ああっ、テッセンさんあの船です！私のだ！」

「うわっはははは、わざわざ犯行現場に戻つてきよつたか！手加減はしてやるからありがたく思うんじやぞ！ライボルト、10万ボルトじや！」

「う、うーん……」

僕は目を覚ました。

……目を覚ました？僕は眠つたんだつけ？

ここは……

「ああっ、目を覚ました！よかつた……」

僕はゆっくりと起き上がる。どうやらベッドに寝ていたようだつた。声の聞こえた方を見ると、見るからに釣り人といつた身なりの男性が安心したように胸をなでおろしていた。

「……あれ。確か僕は海を渡つていて……それで……」

なんだか記憶が曖昧だつた。

「……うん……あー……」

釣り人の話によると、こうだ。

いつものように砂浜で釣り糸を垂らしていると、突然灰色の服を着た男に暴行され、船を奪われてしまつた。

こんな暴力行為が許されてなるものか。次第に恐怖が薄れると怒りの感情が膨らみ、ジムリーダーのテッセンさんに話をし、船を取り返してくれるよう頼んだ。

犯人は犯行現場に戻るという言葉を鑑みて、釣りをしていた砂浜に二人でやつてた所、対岸から奪われた船に乗つた僕がやつてきたの

だと言ひ。

まさか犯人以外が乗っているとは思わなかつたのだろう。

しかし加減した電撃とはいえ、恐ろしい話だ。テッセンさんという人は随分と攻撃的な性格なのだろうか。

僕はなんとなくしり込みしてしまつ。

「ん… そういえば、ここは…」

「キンセツシティのジムだよ」

「あの、テッセンさんは… 実は僕、テッセンさんにお話があつて來たんですけど…」

「そうだつたのかい？ それがあの人急に用事ができたとかで、君をベッドに寝かせてすぐにハジツゲタウンに向かつちやつたんだよ。2・3日は帰らないかもしねないなあ」

君にくれぐれも謝つておいてくれと言つていていたよ、と釣り人のおじさんは言つた。

もう少し休んでいけばとおじさんは行つてくれたが、僕はお礼を言つてジムを出た。

痛い思いはしたけれど、船を持ち主の下に返すことが出来てとりあえずはよかつた。

”あ、スズ！”

ジムの外に出ると、ルーク達が待つていた。

「みんな！ 大丈夫だつた？」

”僕は大丈夫だよ”

”メメも。すゞぐりびりしたけど… ギイはまだしびれてるみたい”

メメの腕の中で、ギイはピクピクしている。……生きていてよかつた。

「ま、まあとりあえずみんな無事でよかつた。それで、これから的事情なんだけど… ジムリーダーのテッセンさんが留守にしているみた

いだから、先にフエンタウンを回りうと思つんだ

僕は地図を出して、キンセツ・フエン間を指でなぞった。

「テッセンさんはハジツゲタウンにいるみたいだから、もし順調に事が進んだらそのままハジツゲに向かおうと思つんだけど……いいかな？」

”もちろん”

”メメもいいとおもつ”

「ありがとう。あまり時間を無駄にできないから……早速出かけようか」

僕達は町の北の出口を出て、111番道路に向かった。

- ロープウェイ - (前書き)

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

111番道路は今まで通つてきた道路と違つて随分と歩きやすいと感じていたのだが、次第に「ゴツゴツとした岩肌が目立つようになつてきた。道もそれほど急ではないが、多少勾配を感じる。なんとか故郷のルネシティを思い出した。

聞けば、このあたりも火山地帯なのだと。やはりルネシティと共通点があるのかもしれない。

それはそうと、フロンタウンは少し標高の高いところにある小さな町であり、ロープウェイという乗り物に乗らなければ行けないらしい。

キンセツシティを出るときに、釣り人のおじさんが教えてくれた。ありがとうございますと言つて町を出たが、ロープウェイとは一体どのような乗り物なのだろうか。繩の道…？

未知の乗り物になんとなくワクワクしていた僕。だが、徐々にその姿が見えてくるにつれ、暗い気持ちになつていった。

「これに乗るの？」

ロープウェイって不思議なネーミングだなあと思つていたけど、何のことはないそのままの意味だ。

ロープにぶら下がつているあの小さな箱に乗つて、頂上まで運んでもらうというのだろう。

「冗談じゃない、僕達の命を支えてるのはあの小さなロープだけじゃないか。

張られているロープの先を田で追つていいくにつれ、僕は完全に腰が引けてしまった。

ルーク達はさつさと乗り込んでしまつたが、僕は中々一步を踏み出す勇気が出せなかつた。

ヒワマキシティのツリーハウスの比じゃないよ、これ。

”スズ、あんまり時間ムダにできないんでしょ？”

ルークが意地悪そうに言つ。

”スズはやく”

メメは初めて乗る乗り物に興奮気味のようだ。

僕は覚悟を決めて一步踏み出した。

ガタンと揺れロープウェイは動き出したが、僕はそれだけで尻込みしてしまった。

徐々に足場が不安定になつていいくのを感じる。

高度が上がるにつれルーク達は外を見て歎声をあげたりしていたけど、僕は座席から微動だにせず、硬く拳を握り目を閉じていた。

”スズあそこ、町が見えるよ！”

ルークが下を見て嬉しそうに言つたが、精神を集中させていた僕は最後まで下を見ることはなかつた。

”面白かつた！”

”またのりたい”

ルークやメメはまた乗りたいなんて言つてゐるけど、僕は一度と乗りたくなかつた。

ロープウェイを降りた時にはなんだか膝が笑つていて、地面に転がつてしまつた。

”…うわっ、なんだこの地面…”

僕が無様に転がつてしまつたのは膝が笑つていただけではないようだ。

踏み出した大地は予想以上に沈み込んだのだ。

「なんだこれ……これは、灰？」

特有の臭いが鼻を突く。

”スズ、灰だらけだよ”

今転んだせいで、僕の体中に灰がついていた。少し吸い込んでしまつたのか、なんだか喉に違和感がある。

”うわ……とりあえずフエンタウンに行こう。町には温泉が湧いて

るって聞いたよ

僕は咳き込みながら言った。

ロープウェイで登つてきた山を今度は若干下りつつ歩き、僕達はフエンタウンに到着した。

フエンタウンはヒワマキシティやキンセツシティと違い、小さい町だった。山間の集落といつてもよさそつた規模だ。なんだかのどかな雰囲気だった。

「ごめん、ちょっと早速温泉に…」

僕は大急ぎで温泉に向かった。温泉は無料で開放されているらしく、内心とてもホッとしていた。

看板に従つて進み、木造の建物にたどり着く。僕は勢いよくドアを開けた。

「きやつ…ちょ、ちょっと!」

「え…うわわっ、」「ごめんなさい!」

勢いよく飛び込んだ脱衣場には、真つ赤な髪をした女人の姿があった。

- ロープウェイ - (後書き)

高こうじいじあー。

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

「別には、は、はだ、裸を見られるくらいなんという事はないのだが、つい防衛本能で手が出てしまったのだ」

「は、はあ：すいません」

僕はヒリヒリするほっぺたを触りながら、すぐ隣で温泉に浸かっている赤い髪の女人に今一度謝った。

叩かれた箇所が火照っているのか単に温泉にのぼせているのかわからないが、なんだかほっぺたは熱を持っているような感じがする。結局僕は温泉に入った。もちろん僕は先を譲ったのだが、今は混浴の時間帯であるし油断していた私が悪いなどと言って、僕の提案は却下されてしまった。

多少リラックスできる事を期待して温泉に浸かったのだけど、なんだか変に緊張してしまう。

しかし温泉というのに初めて入ったのだけど中々、いや随分と気持ちがいい。旅の疲れが溶けていくようだ。ゆっくり入浴するなんていつぶりになるだろ。

こういう形態の風呂はいわゆる露天風呂といつやつだらうか。屋外で湯に浸かるというのはなんだかそれだけで解放的な気分になる。両足を伸ばしてお風呂に入るなんて初めてかもしれない。

これだけ気持ちいいと、なんだか外で待ってくれているルーク達に申し訳ない気持ちになってしまつ。

「どうだ、中々気持ちのいい露天風呂だらう

赤髪の女人が声をかけてきた。

「はい、とても気持ちいいです。露天風呂なんて初めて入るので…」

「そうなのか。住人の身で言うのもなんだが、ここは露天風呂はホウエンーだと思うぞ」

「言つだけあるなと思う。」

「そういえば君はポケモントレーナーか？それとも旅行者？」

「は、はい、一応トレーナー…です。旅行者……ではないと思い
ます、多分」

なんだか自分の身分が上手く表現できなかつた。トレーナーになつたつもりはないが手持ちポケモンはいつの間にか増えていたし、旅行しているつもりはないが各地を回つている事には違ひない。

「なんだはつきりしないな。トレーナーということは、この町のポケモンジムに挑戦しに来たと言つ事か」

「いえ、そういうわけでは…ジムリーダーの方にお話したい事が
あります」

「ほう。なんだ話と言つのは」

「いえ、ジムリーダーの方に直接」

あまりの気持ちよさに精神までふやけそうになつてしまつていたが、
僕は気を引き締めた。迂闊に無関係の人に話すわけにはいかないの
だ。

しかしそれでも女性は引かなかつた。

「だから、なんだと言つてているのだ」

「え」

「まだるつこしい奴だな君は。リーダーに用事があるくせに相手の
顔も知らないのか？ フエンジムリーダー、アスナは私だ」

- 温泉 - (後書き)

アスナさんがタオルを巻いているかどうかは「想像にお任せします。

- アスナ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^ズ

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ジムリーダーの顔どころか考えてみれば名前すら知らなかつた僕は、驚いて思わず立ち上がつた。

「す、すいません！お話があります！」

「だから、せつきからなんだと聞いているだろ？」「いや、ちよつと、君、した、下半身」

「す、すいません」

僕は慌てて湯に浸かる。

「それで何なのだ、私に話と言つのは」

「はい。あ、すいません、僕はルネシティのスズといいます。実は

…

僕はルネシティで起つた事を話し、ナギさんに協力をしてもらつて、いる事を話した。

ざつとではあるが、フロンタウンに至るまでを一通り話し終える頃にはすっかりのぼせてしまつていた。

「ふむ…なるほど」

しばらくアスナさんは考え込むよつとしていたが、やがて僕の方を向いた。

「わかつた、私も協力しよう」

「ほ、本当ですか！」

「うむ、本当だ。ナギちゃん…いや、ナギも協力していると聞いては黙つていられないしな」

「ありがとうございます！」

「いや、ちょっと、まつて、だからあんまりこつこつに近付かないです、すいません」

僕は思わず身を乗り出してしまつたが、慌てて元のポジションに戻る。

「こんなところで話すのもなんだから、詳しい話はジムに戻つてからじっかりと聞かせてもらおう。私は先に上がつているぞ」

ひとまず、良かつた…

僕は鼻まで湯につかり、ホッと安堵した。

脱衣所で着替えて外に出ると、ルーク達が出迎えてくれた。時折感じる風が火照つた体に心地いい。

”スズ、ずいぶん長く入つてたね。そんなに気持ちよかつた?”

「うん、めちゃくちゃ気持ちよかつた。なんだかみんなに申し訳ないなあ」

”スズいいな。ね、ギイ”

メメが腕の中のギイに話しかける。

「それでね、なんとフエンジムのジムリーダーさんが入浴してたんだよ。話聞いてもらえちゃつた。今からジムに向かおう」

”もしかして髪の赤い女人？さつき入り口から出てきたけど、僕

らをちらりと見て行つちゃつた”

あつちの方、ヒルークが指差した。

「赤い髪だつたら間違いないと思うよ。早速ジムに行つてみよう」火照つた体をゆっくり冷ましたいという気もしたが、僕達は急いでジムに向かつた。

- アスナ - (後書き)

アスナ参考資料

http://wiki.ポケモン.com/wiki/%E3%82%A2%E3%83%92%E3%83%88

- フェンジム - (前書き)

主人公の所持ポケモン^ズ

ルカリオ（ルーク）
コイキング（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

ポケモンジムはやはり他の町と似たような形状をしていて、すぐにわかつた。

ジムの門をくぐると、トレーナーが出迎えてくれた。後について歩きながら、ヒワマキジムに初めて入った時とは随分違つた。なんて思つていたらすぐにアスナさんの部屋に通された。

「きたか、スズ」

「すみません、遅くなりました」

僕はアスナさんが勧めてくれた椅子に腰掛けた。冷たい飲み物が用意されていたので、僕はそれをひと息に飲み干した。

「ただのコーヒー牛乳だが美味しいだろう。風呂上りは自分で思つている以上に水分が失われているから、余計においしく感じる」アスナさんも向かい側に腰掛けると、ひと息にコーヒー牛乳を飲んだ。

「さて、早速だが先ほど聞いた話をまとめさせてもらつぞ。ルネシティは謎の組織によつて占拠。ミクリは捕らわれ町の人に抵抗する術はない。お前だけが運良く脱出し、各地のジムを回つて助けを求めている、と」

現状ルネシティがどうなつているのかは全くわからないが、ルネシティの大まかな状況を飲み込んでくれているようだ。

「はい、そうです。ヒワマキシティではナギさんの協力を得る事ができました。ナギさんにはトクサネシティからムロ・トウカ・カナズミのジムを回つてもらつて、最終的にはカイナシティで落ち合つ予定です」

僕はナギさんに書状をもらつていていた事を思い出し、アスナさんに渡した。

一通り目を通してからアスナさんは言った。

「ふむ、なるほどな。ではスズが残りのジムを回るところとか。

…キンセツシティのテッセンさんの協力は得る事ができたのか？」

「いえ、実はテッセンさんはちょうどハジッゲタウンに出かけているらしくて…」

「そうか。では君はハジッゲタウンに向かうといい。私はキンセツシティで待機し、もし君がハジッゲタウンでテッセンさんと入れ違いになつたら私がキンセツで事情を説明しよう。もしハジッゲでテッセンさんと会えなくとも君はそのまま114番道路を通つてカナズミシティに向かうといい。私はキンセツシティに戻つてきたテッセンさんとカイナシティに向かおう」

「わかりました。では僕はこのままハジッゲタウンに向かおうと思ひます」

「気持ちはわかるが、まあそう焦るな。ハジッゲには炎の抜け道といつ洞窟を通らなければ行けないのだが、山道含め夜では危険だ。焦る気持ちはわかるが、今日はここに泊まつて明日出かけるといい。

「怪我をしてしまつては元も子も無いからなと、アスナさんは言つてくれた。

「ところで、スズの手持ちポケモンはその三体か」

「はい。ルーク・ルカリオ、ユキメノコ、コイキングです」

「そうか、とアスナさんは言ひ、一つの提案をした。

「スズ、一つ私と模擬戦をしてみないか」

- 脳内バトル - (前書き)

主人公の所持ポケモン^ズ

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

突然の申し出に戸惑っている僕にアスナさんは続けた。

「いや、実際に戦わなくてもいい。ゲーム感覚でやってみよう。お互いのポケモンのライフは3ポイント。効果抜群の技を受けた場合は-2ポイント。等倍ダメージの場合は-1ポイント。半減ダメージの場合は-0.5ポイント。行動順は素早さ依存。状態異常については都度説明しよう。もちろん先に相手のライフをゼロにした方が勝ちだ。さて、私はギャロップを出す。君はどうする?」

始まってしまった脳内での戦いに戸惑いながらも、僕も慌てて考える。

「ええと…僕はルカリオを出します」

「ふむ。私の一手目はフレアドライブだ。君の一手目は?」

「僕の一手目は…とび膝蹴りです」

「0点だ」

即座にアスナさんは言った。厳しい採点だ。

「フレアドライブはルカリオのライフを-2。とび膝蹴りはギャロップのライフを-1。普通に戦つたのではルカリオに勝ち目は無い。いいが、ルカリオは強力なポケモンだ。しかし、ギャロップが相手では相性が悪いのだ。ユキメノコも相性は良くないが、基本的にはユキメノコはギャロップより早い。一回先に動く事ができるわけだから、何か手段を講じる余地がある。これはあくまで例えばの話だが、ユキメノコが電磁波でギャロップの素早さを奪う事ができればルカリオのとび膝蹴りを先に当てる事ができる。これでギャロップのライフは2ポイントは削れる。最もこれはあくまでルールの存在する一般的なポケモンバトルの話であって、今まで君が体験してきた戦いとは少々違う。しかし一手のミスが勝敗を決する事があるポケモンバトルではこのような考え方を元に立ち回りを考える事は重要だと思う。」

担当直入に言つて、とアスナさんは続ける。

「君のポケモン達は炎に対して無策すぎる。君は灰色の男達を何回か撃退しているようだが、運がよかつただけだ。勘違いするな、君のポケモンたちが弱いと言つてはいるわけではない。ポケモン同士の戦いでは、相性が重要なのだ。種族としてのタイプと、使用する技のタイプだ。君が撃退した男達の使つていたポケモンはなんだつた？」

「…キリキザン、ゴルーグ、ダストダスです」

僕は灰色達が呼んでいたポケモンの名前を覚えていた。

「キリキザンは鋼+悪。ゴルーグは地面+ゴースト。ダストダスは毒だ」

アスナさんは言つ。

「対する君のポケモンはというと、ルカリオは鋼+格闘。ユキメノコは氷+ゴーストだ。…コイキングは水だが、とりあえず置いておこう。」

確かに、ルークはゴルーグには危ないところまで追い込まれてしまつたが、キリキザンは圧倒する事ができた。メメはその逆で、ルーグが助けに入るのが一歩遅ければキリキザンの刃の餌食になつてしまつていただろう。

「逆に、ルカリオがダストダスに勝てたのは何故だ?ダストダスのタイプは毒だ。格闘タイプの攻撃は半減されたはずだ。ルカリオの鋼の体は毒を通さないとはいえ、簡単には勝てなかつただろう」

「それは…」

あの時は確か。

「あの時は、ボーンラッシュという地面タイプの技を使つたんです」地面の力を拳に込めていたのだと、戦いの後ルークが教えてくれた。アスナさんは頷いた。ポケモンバトルの理論中では役割破壊というのだが、と前置きして、アスナさんは続ける。

「私が言いたいのはそれだ。自分のタイプではない技を使つても威力が充分に出るとは言いがたい。しかし、それで突破口が開けるこ

とも往々にしてある。特に今の君の置かれている状況では、敵に対して全く歯が立たないといいうのは非常に危険だ。ボーンラッシュは相手に接近する必要があるから、遠距離から炎を放つ事ができるポケモンを相手取るには少々危険だ。余計なお世話かもしれないが、炎タイプに対する策を練ることをお勧めする」

- 夜の篝火 - (前書き)

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

宿に泊まるなどと水臭い事は言わずにここに泊まつていけとアスナさんは言つてくれた。

僕はアスナさんの言葉に甘える事にして、用意してくれた布団に早々ともぐりこんだ。

温泉でいい感じに体がほぐれたのか、やたらと布団が気持ちよく感じじる。

布団が足りないというので、ルーク達にはモンスター・ボールの中で休んでもらつていた。考えてみると、一人で過ごす夜というのもなんだか久しぶりな気がした。

窓から外を見ると、周囲はすでに夜に包まれていた。家々の明かりがぼつぼつと点いており、さつき入った温泉の周囲には一際大きく篝火が炊かれている。もしかしたら夜間の入浴も可能なかもしない。

この町にもどうやら街灯と言えるような街灯は無いようで、光源の少ない独特の暗闇も何となくルネシティを連想させた。

僕は布団に仰向けになつて、アスナさんが言つていた事を思い返した。

とても勉強になつた。ジムリーダー直々に指導してもらえたというのは、なんとももつたない話だ。

アスナさんが言つていた通り、今までの戦いはルークやメメの力が強力だつたから乗り越えられたに過ぎない。実際僕が指示した事なんてごくわずかだし、運も良かつたのだろう。

ポケモンバトルにおいては運も重要な要素だよとアスナさんは言ってくれたけど、それだけでこれからも乗り越えていけるとは思わなかつた。

今まで右も左も分からぬままに故郷の外に放り出されてがむしゃ

らに進んできたけど、それじゃ駄目なんだ。僕は負けたらいけない。
そこで道は途絶えてしまうのだ。

僕はもっと考えなければいけない。僕の力不足が原因で、ルーク達
に苦しい思いばかりさせるわけにはいかない。

勝つために。先へ進むために。

ぼんやりと考え方をしている間に、次第に眠気が押し寄せてきた。
眠るという行為は不思議なもので、意識するほど眠れないのに、放
つておいても眠るときは眠ってしまう。もしかしたら呼吸や内臓の
活動と同じで、人間が意識しないでできる行動の一つなのかもなと
思う。

窓の外を見ると、いつの間にか家々の明かりは消え、温泉の周囲を
照らす篝火だけが暗闇の中に浮き上がつて見えた。

ルネシティのみんなはどうしているのかな…

いつの間にか僕は眠りに落ちていった。

ルネシティの夜は足が早い。日が落ちたかと思つと、辺りはすぐご暗くなつてしまつ。

単純に灯りが少ないからだ。しかし長年住んでいると、そんなことは全く気にならなかつた。

今は灰色達によつて松明のような物に灯がともされており、平時のルネシティより明るいくらいだつた。

実は私はもつと小さい頃、一度だけお父さんに連れられてルネシティの外に出たことがあつた。

初めて見る別の町は夜でもとても明るくて、なんだか別世界のようだつた。

それまで私の世界はルネシティが全てだつたけど、突然見たことの無い人たちや見た事の無い建物を田の辺たりにしてなんだか酷く混乱したのを覚えている。

世界は、広いのだ。この町の中にいるとそんな」とさえ実感を持つて感じる事はない。

「ねえシズクちゃん」

「はい、なんですか?」

おばさんは相変わらず私を名前で呼んだ。

番号で呼び合つていない事を男達に知られたらどんな田に合わされるのかわからない。ちよつと怖かつたけどしかし、名前で呼ばれるのはなんだか嬉しかつた。

「おばさんはもうおばさんになつちゃつたけど、シズクちゃんぐらいの歳の頃はとても毎日が長く感じたわ」

ランプの灯りの中で、おばさんは編み物をしながら話してくれた。

そうは言つても現役でこの年齢の私は毎日の長さを比べる指標が無

い。だけど、おばさんの言ひてることは何となくわかるよつた気がした。

「一日の中で動き回つている時間は今の方が全然長いのにね。シズクちゃんぐらいの歳の頃は、笑つちゃうかもしないけど私も9時は寝ていたのよ。見たいテレビアニメが終わつたら、そこで一日は終了。歯を磨いて布団に入つて、夢を見ながら次の日を待つの」

「ちょっと寝るの早すぎよねえと、おばさんは笑つた。

「私はその頃コガネシティっていう町に住んでいたの。ジョウト地方ね」

私は相槌を打つ。「コガネシティは随分発展した町だと、本で読んだことがある。

「結婚してからルネシティに越してきたの。最初はこんな刺激も何もない町で生きていけるのかしらと心配だつたけど、今ではコガネシティに戻りたいとは思わないわ。父さんも母さんも、もういないし」

懐かしく思わないわけじゃないのだけれど、とおばさんは言つた。なんだか自分の故郷が誉められてゐるようで、私は少し嬉しかつた。スズくんのお父さんと私のお父さんは、ポケモンのダイビングという技を使って外部からルネシティへ物資を運ぶ仕事をしてゐた。スズくんのお父さんは私達がまだ小さい頃に事故で死んでしまつたと聞かされていたけど、とてもすごい使い手だつたと聞いた事があつた。

「コガネシティには何でもあつたけど、絶対に手に入らないものもあつた。例えばルネシティで見える星空。夜でも煌々と電気が点いているコガネシティでは絶対に見る事なんてできない」

私達はふと窓から星空を眺めた。いつもと変わらない夜空に星が瞬いてゐる。そいいえば以前本で読んだんだけど、あの星の光が年百年前に発せられたものだなんて、なんだかよくわからない。言つてることはわかるけど、全く実感が伴わなかつた。

私達は星空をしばらく眺めていた。

「あら、もうこんな時間。じめんね、そろそろ寝ましょうか。：夜なんて特に短くなつちやつたみたい。小さい頃は夜がいつまでも続くよつの気がしていいたけど、今では夜明けが来るのが随分早く感じるよになつたわ」

おばさんがランプの灯を消し、明かりはわずかに差し込む月明かりだけになつた。

「シズクちゃん、おやすみなさい」

「おやすみなさい、おばさん」

- 下山 - (前書き)

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ロープウェイで登ってきた山を、今度はひたすら降りる。かなり急な斜面だったが、僕達は注意深く降りていった。

メメなんかはふよふよと浮いているから別に大変ではないのだろうが、僕とルークは足元に気をつけながら下山しなければならなかつた。

言うが早いが、僕は飛び出している突起に足を取られてつんのめり、膝をすりむいてしまつた。

「あいたた…」

”スズ、大丈夫？”

先行していたルークが戻つてきた。

「うん…なんとか」

”ロープウェイつかえればいいのに”

メメが残念そうに言つた。メメはロープウェイが気に入つていたようで、下りも乗つて帰るものだと思つていたらしい。

そうはいかない。あんな恐ろしい乗り物になど一度と乗るものか。アスナさんもロープウェイを勧めてくれたのだが、僕は修行のためですとかなんとか言つて強引に徒步での下山を選んだのだ。例え傷だらけになつたとしても、この選択は後悔するものか。

もう一日ぐらいいゆつくりしていつたらどうだとアスナさんは言つてくれたが、さすがにそういうわけにはいかなかつた。

もう一回ぐらいあの温泉に浸かりたかったというのも本音であつたが、アスナさんも察してくれたのかそれ以上勧めようとはしなかつた。

「まあ、別にこれでもう一度とフエンに来ないというわけでもあるまい。また全て片付いたら入りにくればいいよ。そうだ、スズこれを持つていけ」

アスナさんはそういうと、小さな布袋を僕に渡してくれた。

「これは…なんですか？」

僕は布袋を掲げてみた。

「それはフエンタウンに伝わる漢方薬だ

「かんぽうやく？」

聞いたことのない響きだった。

「知らないか？まあ、薬のようなものだ。これは状態異常によく効く薬だ。なにかの役に立つだろうから、少ないがプレゼントだ。ただ…

「ありがとうございます……え、ただ何ですか？」

にやりと笑つてアスナさんは言った。

「すゞく苦」

カバンの中の漢方薬を思い出した。

僕ももう薬が苦くて飲めないような年齢ではない。アスナさんも大袈裟にいったのだろう。

何はともあれ薬をもらえたのはありがたかった。

そうこうしているうちに山道を下りきり、ロープウェイのある麓まで戻ってきた。

「ええと…ハジツゲタウンには炎の抜け道を通るのか。ロープウェイのすぐ近くにあるみたいだけど…」

”スズあれじやない？”

辺りを見回していたルークが指差す先には、洞窟の入り口のようなものが口を開けていた。

「うん、たぶんあれだ。そんなに大きな洞窟じゃないみたいだし、さつさと抜けちゃおう」

憎きロープウェイを横目に、僕達は炎の抜け道に足を踏み入れた。

・ 下 二 一 (後書き)

ぬのぶくろのかほていなのか。
ほていがぬのぶくろのかぬのぶくろがほていなのか。

- ほのむ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{スズ}

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

炎の抜け道に足を踏み入れるなり、猛烈な熱気を感じた。

「うわ…なんだこの暑さ」

洞窟の中には熱気が閉じ込められているようだった。吸い込む空気が熱く、汗がじわりと滲み出してくる。

火山の影響だろうか、あちらこちらでボロボロと泡のようなものが湧いては消えていた。

「みんな大丈夫?」

”あつい…”

氷タイプのメメには余計に堪えるのだろう、相当地にきつめだった。

”僕もちょっと…早く抜けちゃおう、スズ”

僕達は言葉少なに、洞窟を進んだ。

薄暗くてはつきりとわからないが、地面が砂地なのだろうか。足をとられてしまい、進むのに余計に体力を使う。

そうしてどのくらい進んだらうか。洞窟の明るさが増したように感じた。

「出口が近いのかな…」

思わず足早になつた僕達に、ふいに声が聞こえた。

”やつときたわね。この洞窟、暑くて参つたわよ”

声が聞こえた途端、周囲の温度が一際上がつたような気がした。

洞窟の角を曲がつたとき、光の差し込む出口が見えた。

出口と共に、そこに立ちはだかる人影も。

もう洞窟内の暗さに目が慣れていたため、はつきりわかる。女は灰色の服を着ていた。

「あなたは…」

聞かなくてもわかつてていたが、思わず口に出してしまった。

「聞かなくてももうわかつてるでしょ。あんたを捕まえにきましたあ

んふふ、と女は笑った。

僕達は身構えて距離を取った。出口まではあと少しの距離だったが、女が立ちふさがっている以上素通りできる訳はなかつた。

「…くそつ、やるしかない…」

「あら、随分好戦的な口ね。話とちよつと違つじやない。それとも洞窟の暑さで参つてゐのかしら? まあ逃げられるより面倒がなくていいわ…シャンテラ、おいでっ!」

女が手をかざすと、洞窟の天井から何かが降下してきた。なんだか洞窟の温度がさらに上昇したような気がする。

”スズ、あいつのポケモン…!”

僕は無言で頷いた。暑さで出たものとは違つ、嫌な汗が頬を伝つ。

「…間違ひない、炎タイプだ」

”あつい…”

メメが呟いた。

- 炎の抜け道の戦い - (前書き)

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
コイキング（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

「ほらほら、ほーっとしてると火傷しちゃうわよ…」
シャンデラと呼ばれたポケモンは炎を纏い、一いつ瞬間に向けて放射してきた。

標的になつたのはメメだ。

”メメ！”

暑さで朦朧としていたメメを、ルークが横つ飛びにさらい。

”みんな下がつてて、僕がやる！”

ルークが飛び出していった。

まずい。炎タイプはまずい。

くそつ、アスナさんに忠告されたばっかりだつたのに…

悔やんでも仕方なかつた。

「ルーク、近付くのは危険だ！波導弾で遠くから…」

”だめだよ、スズ”

頭の中で声が聞こえる。

”あいつ多分ゴーストだ。波導弾じゃ炎はかき消せてダメージを与える事はできない。それにアイツの火力、尋常じゃない。今の僕の力じやきつと打ち負ける”

シャンデラの炎を紙一重でかわし、ルークが洞窟の地面に拳を叩き付けた。砂煙が舞い上がって田くらましとなり、薄暗い洞窟の中でもルークの姿が隠される。

”小賢しいわね…シャンデラ、オーバーヒート！”

シャンデラを包んでいた炎が一気に膨れ上がり、目前まで迫つていたルークを襲つた。直撃こそかわしたものの、その炎は片腕を包んだ。

”…つづつ…！”

ルークが右腕を押さえて歩みを止めてしまつ。

「シャンデラ、押し戻してあげなさいな」

以前メメやゴルーグが使っていた黒色の球体を生成し、ルークにぶつけた。

”……！”

かわす事のできなかつたルークはそれを正面から受け止めた。

”ぐううう……ああつ！”

ルークがそれをかき消す頃には、一ちらまで押し戻されてしまつていた。

「ルーク！」

”スズ……あいつの力……半端じゃ……”

ルークの肩が苦しそうに上下している。

「ほらほら、休んでる場合じやないわよ！」

シャンデラの炎が再びこちらに向けて放たれた。

”くそつ……”

ルークが両掌で球体をつくり、波導弾を放つ。シャンデラの炎と空中でぶつかり、双方のエネルギーは消滅した。

「ん~、さすがにオーバーヒートは消耗が激しいわねえ……まあいいわ。あんたのポケモン、もう息も絶え絶えつて感じだし」

波導弾を放つたルークは、膝から崩れ落ちてしまつた。

見ると、炎に包まれた右腕が酷い火傷を負つていた。

「これでとどめよ！」

シャンデラが再びシャドーボールを生成し、ルークに向けて打ち出した。

”……”

「ルーク！」

と、横から飛んできたもう一つの黒球がシャンデラのそれに当たり、軌道を逸らした。

もう一つのシャドーボールが飛んできた方を見ると、メメがゼニゼエと苦しそうにしていた。

”スズ、ルーク……だいじょうぶ……？”

「メメ！」

僕はメメに駆け寄った。洞窟内の高温のせいか、メメも随分と消耗しているようだった。

「ああんもう、面倒臭いわね！あんたたち歯ごたえなさすぎ。それによく他の奴らを退けられたものだわ…もう飽きちゃったから、まとめて終わりにしてあげる。なるべく生かして連れ帰るようになって言われてたけど、まあ不幸な事故よね…うふふ」
打つ手がない。シャンデラの火力は圧倒的だった。

僕はルークたちを庇うように前に立った。

”スズ！”

「ごめんな。僕の力が及ばないせいで…」

”スズ、だめ”

「あんた、バカじゃないの？人間がポケモン庇つてどうすんのよ。生身でシャンデラの炎受けたらどうなると思つてんの？こいつの炎は魂まで燃やしきくすわよ」

「…」

「ふふ、まあいいわ。死体はしつかり処理してあげるから安心なさいな。じゃあね、まあここまでよくがんばったわよ」

シャンデラが再び業火を纏い始め、僕は思わず目をつぶつた。

”…るな”

”…ん？”

聞き覚えのない声が頭の中に聞こえた気がした。

”メメ姉ちゃんにひどいことすんな！”

今度ははっきりと聞こえた。

思わず後ろを振り向くと、メメの腕の中のギイが激しい光を発していた。

- 炎の抜け道の戦い - (後書き)

「ランダムマッチ1000勝達成しました。
トレーナーカードがかっこよくなつた…！」

- オーバーヒート - (前書き)

主人公の所持ポケモン

ルカリオ（ルーク）

コイキング（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

- オーバーヒート -

一瞬だつた。

巨大な竜の胴体が僕達を守るように巻きつき、シャンデラの炎を受け止めていた。

シャンデラの炎を受け流し、直後に鼓膜をつんざくよつた咆哮が洞窟内に響いた。

この鳴き声はルネシティで聞いたことがあつた。あの時は絶望を感じたが、今はなんと力強く響く事か。

ギヤラドスの威嚇の咆哮。そうか、ギイがギヤラドスに…。

「ギ、ギヤラドス… 嘘でしょ！？」

”……”

メメが目を丸くしてギイを見上げていた。

改めて見ると、やはりギヤラドスは大きい。ギイだとわかつていても、たじろいでしまう迫力があった。

”スズ、あいつが戸惑つてゐうちに片をつけるぞ。おいらはまだこの姿になつたばかりで、大した事はできないんだ”

ギイの声が頭に響く。

「わかつた。ルーク、メメ、もうひと踏ん張り力をかしてくれ！」

ルークが力を振り絞り立ち上がる。

「くつ、冗談じゃないわよ…シャンデラ！ オーバーヒート！」

シャンデラが再び業火を纏い、一気に爆発させた。

「二人ともっ！」

”メメ、いくぞっ！”

”うん！”

メメとルークが最後の力を振り絞り、エネルギーを放つた。

ルークの掌から放たれた波導弾が襲い来るシャンデラの炎とぶつかり、それを相殺する。無防備となつたシャンデラに、メメの放つた漆黒のシャドーボールが直撃した。

シャンデラに灯っていた炎が急激に弱くなつていくのが目に見えてわかる。

「シャンデラ！シャンデラ！…くそつ、こんなやつらに…！」

灰色は地面に倒れているシャンデラをモンスター・ボールに戻すと、一目散に洞窟の外に走り去つていた。

「か、勝つた…勝つたよみんな…」

「なん…と…か…」

苦しそうにルークは笑うと、その場に倒れてしまった。

「ルーク！…急いで洞窟を抜けよう。ハジツゲタウンまでもうひとふんばかり…あ、あれ…なんかおかしい…」

目の前がなんだか歪んで見える。気がついたら僕は地面に倒れていた。

「なんだ…これ…もうちょっとで出口……」

「…ズ…！」

「…た…」

ルークが意識を失いかけているからだろうか、メメたちの声が途切れ途切れになつて聞こえてきた。

くそ、どうしたんだ。早くハジツゲタウンに行かないといけないのに…

思いとは裏腹に、僕の意識は急激に失われていった。

- オーバーヒート - (後書き)

3 対 1 は卑怯とか言わないように

- on the other hand 4 - (前書き)

8番 : ノリ
23番 : シズク

「23番…」このままじや駄目だと思つただ
いつもの円形広場で私達は話していた。

「8くん…それどういうこと?」

番号で呼び合うのも何だか慣れてきたよつた氣がする。少しも嬉しくはないけれど。

「このまま黙つて過いじつても事態は何一つ良くならないだらうつて事だよ」

「だけど……そんなのわからなによ」

「そうか? 23番: この事態の結末はどうなると思つ?」

私は少し考えていたが、ノリくんが続けた。

「有りうるレベルで最も樂觀的なパターンは…そうだな、あいつらは目的達成できず、いやーすいませんとか言って素直にこの町を出て行くことかな」

私は想像してみた。ノリくんは続ける。

「最も悲觀的なパターンは…あいつらは当初の目的を達成。用済みとなつた俺達を虐殺。あいつらが引き上げた後にはルネシティには誰もいなくなるつて感じか。まだ生ぬるいかな…」

「…やめて」

どちらかといふと後者の方が想像しやす「よつた氣がして、私は思わず身震いした。

「23番、俺達は当事者だ。このまま待つついても何も解決はしない。解決したとしても、それを時間に任せていたらどんな形になつても文句は言えないんだぜ」

「でも…でも…」

「ルネシティは平和過ぎたんだ。この町には暴力の影が余りに薄い。もちろんそれはいい事だと思うけど、こんな事態になつてしまつた話は別だ。みんな自分がまさか死ぬはずないと思つてゐる。こうで

あつてほしいという楽観的な考えに流されていく。今思えば、あいつらが攻めてきた時ミクリさんだけが今の状況を懸念していたんだ」「でも…今私達は生かされているじゃない？ルネシティは大して大きな町じゃないけど、こんな風に統治しているぐらいなんだから私達の存在は邪魔なはずでしょう？いつそ殺してしまつほうが楽なはずなのに…」

うーんとノリくんは唸つた。

「そりなんだよな…あいつらもさすがに大量殺人には抵抗があるのか、あるいはもっと別の理由があるのか…」

できれば前者であつてほしいけどなど、ノリくんは肩をすくめた。

「23番のマリルはどうしてる？」

「マリちゃんは…昼間は湖に隠れているように言つてあるよ」町の人々のポケモンは灰色達が町を占拠したときに取り上げられてしまつていて、私はこつそりマリルを湖に逃がす事ができた。町の唯一の出入り口である湖にも灰色達が見張りに立つてるので昼間は会うことが出来ないが、夜の闇にまぎれてだつたらこつそりと会う事ができた。

ポケモンを逃がされたのではなく取り上げられたという事は、いざれ返してくれるということだつうと以前ノリくんに言つてみたのだけど、そういう希望をぶら下げる見せてはいるだけかもしれないバツサリ切られた。绝望と希望を程よくブレンンドして見せて、私達を大人しくさせておきたいだけだろう、と。

言われてみると、全くその通りな気もした（事実私は指摘されたとおりの感情を持っていたのだから）。それに、もしかしたら逃がしたポケモンが持ち主の下に帰つてしまつたのを懸念しての事かもれない。

「うーん…どうにかして…」

ノリくんは何やら考え込んでいるようだった。

- ハジッゲタウン - (前書き)

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

- ハジックタウン -

「ああ、ギャラドスだ！なんでこんな山奥の町に……」

「うわははは、大丈夫じゃ！ワシヒライボルトに任せろー・ライボルト、10万ボル……ん？あれは……」

「う、うーん……」

僕は目を覚ました。

……目を覚ました？僕は眠ったんだつけ？

「は……」

「ああ、目を覚ました！よかつた……」

白衣の男の人が僕を見下ろしていた。

なんだか前にも似たようなことがあつたような気がするなあと思いつながら、僕はゆっくりと起き上がつた。どうやらベッドに寝ていたようだつた。

確か僕は炎の抜け道で…倒れて…倒れて…

「ここは……どこですか？…みんなは！？」

「ここはハジックタウンだよ。君達は町の入り口で倒れていたんだ。私とテッセンさんとで君を運んできたんだ」

ふと隣を見てみると、ベッドでルークが寝ていた。

ん…テッセンさん…テッセンさん…

「あの、あの、テッセンさんは…！テッセンさんはここにいるんですけどか！？」

僕の突然の剣幕に白衣の男性は驚いたように言つた。

「少し落ち着きなさい、テッセンさんなら…あ、帰ってきたみたいだ」

「おう、小僧が起きたか。うわははは、小僧、大丈夫じゃったか

？」

豪快な笑い声と共に玄関のドアが開き、初老の男性が入ってきた。

「どこかで見た顔じゃと思ったが、そうかキンセツシティで感電させてしまった小僧じやつたか。いや、申し訳ないことをしたのう」

「いえ、あれは……仕方ないです……」

あの時の電撃を思い出して少し身震いした。テッセンさん隣に座っているライボルトというポケモンが放った電撃らしい。立派な黄金色の鬱をしていた。

「申し遅れました、僕はスズといいます。あっちのベッドで寝ているのはルカリオのルークです」

「ワシはテッセン。こつちはソライシ博士じゃ」

よろしく、と白衣の男性は微笑んだ。

「あの……僕はどうしてここに……」

「小僧とルークは町の入り口で倒れておったんじゃよ。ギャラドスとユキメノコが引きづるようにして小僧達を運んできておった。最初は君らの事が見えんかったから、ギャラドスが現れたと思つて町はパニックになりかけたわい」

うわつはつはとテッセンさんは笑つた。豪快に笑う人だ。

「もしかして随分長い事炎の抜け道にいたんじゃないか？あそこは火山ガスが発生してるから普通に取りぬけるぐらいだつたら問題ないけど、長時間洞窟内にいるとちょっと危ないんだよ」

そうだったのか。戦いに必死で全然気がつかなかつた。

「ルークは……ルークは大丈夫ですか？怪我は……それに他のみんなは

……」

「ああ、ルーク君は右腕を火傷していたようだつたから、手当てしておいたよ。しばらく休めば大丈夫だと思つ。ギャラドスはさすがに町の人々が不安そうにしていたから、ボールに戻つてもらつてる」

「あ……ありがとうございます……ソライシ博士」

僕はホッとしてお礼を言った。

「困ったときはお互い様じやよ。して小僧、ワシに何か用事があるんじやないのか？」

テッセンさんから話を振つてくれた。

「はい……実は……」

僕はルネシティに起つたことを話し始めた。

主人公の所持ポケモン^{ズズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

外の空氣を吸いにソライシ博士の家から出ると、メメが飛びついてきた。

しゃくつ、と足が地面にめり込む音がする。この辺りもずいぶんと火山灰が堆積しているようだ。

空はぼんやりと曇っていた。

”……！”

「メメ！大丈夫だったか？」

”……？”

「あ…そうか。ルークが寝てるから、メメとも話せないのか」

今までルークを介して当然のように意思疎通していたから、なんだか妙な感じがした。

しかしそれでも、メメが何を言っているのか何となく感じる事ができた。

「うん、僕は大丈夫。ルークも手当をしてもらつて今は寝てる」

”……”

「テッセンさんにも話を聞いてもらえたよ。すぐにキンセツシティに向かってくれた。アスナさんと合流してくれるつて」

あのミクリが…とテッセンさんは最初は半信半疑だったようだが、最後まで黙つて聞いてくれた。

”……”

「メメも大変だつたでしょ、炎の抜け道。ただでさえ暑かつたのに、あんな敵まで出てきちゃつて…」

今思えばよく勝てたものだ。ギイが進化してくれなかつたら、手の打ち様がなかつた。

”……から”

「えつ」

”ギイもがんばってくれたから”
突然メメの声が聞こえてきた。

ルークが目覚めたのだろうか。

「ギイもがんばってくれたもんな。 そりいえばまだギイとはちゃんと話してなかつた。 後でゆつくり話そつ」

”うん。 メメも…”

そりいえば、メメはコイキングのギイを溺愛していたけど、進化した今のはどうなのだろうか。

そのあたりの事も聞いてみよう。

そんな事を思いながら、僕はソライシ博士の家のドアを空けた。

ルークはベッドの上で上半身だけ起こしていた。

「ルーク、 大丈夫？」

”スズ…”

「スズ君… それが…」

ソライシ博士が深刻そうな顔をしていた。

「博士… どうしたんですか？」

僕はなんだか嫌な予感がした。 部屋を出たときよりも、 なんだか空気が重くなつたような気がする。

”腕が… 右腕が動かないんだ…”

「右腕… え？」

「スズ君。 この火傷… 誰にやられた？」

「博士… ええと、 シヤンデラというポケモンと戦つて、 火傷を負いました。 あの、 それが…？」

ソライシ博士は静かにルークの包帯を解いた。

ルークの右腕が露になつていくにつれ、 僕は息を呑んだ。

美しい青い毛並みのルークの右腕に、 まるで蛇が巻き付いているように黒い紋様が刻み込まれていた。

それがただの火傷ではないことは、 一目見れば明らかだつた。

「治療をしたときはこんなになつていなかつたから気がつかなかつたんだが…シャンテラの炎は普通の炎じゃないんだ。対象の肉体だけではなくて、魂にまで作用する」

「……こいつの炎は魂まで燃やしきくすわよ……灰色が言つていった言葉が頭によみがえつた。あのセリフがただの脅し文句などではなかつたとしたら…」

「な…なあるんですね？」

「…少なくとも私の知識には無い。調べてみるとから少し時間をくれないか」

僕は体から血の気が引いていくのを感じた。

”スズ…「じめん…僕のせいで足止めしちゃ”

「謝る事なんてない！」

思わず大きな声で叫んでしまった。

- IJIIまでの裏設定的なもの - (前書き)

です。読まなくても全然物語に影響ないです。
ここまでのネタバレ含みます。

スズ、ノリ、シズクは大体中学生くらいのイメージです。ゲームのグラフィックを見ると随分幼く見えますが、気にしない気にしない。あんまりキャラの外見的特徴を描写していないので、好きに想像してください。別に描写がめんどくさいわけではありません

ノリはシズクが好き。シズクはスズが好き。スズはなんにも気づいてない。

スズがルネシティにいた頃に全然ポケモン釣れなかつたのは灰色達がルネシティ制圧の準備として水中の調査なんかをしていたため、水の中のポケモンがあまりルネ近海に寄り付かなくなつていたから。特別釣りスキルが無いわけではないが、本人は無いと思ってる。

10話でシロナさんがスズに提示したモンスター・ボールの中身は、
- リオル・フカマル・ロゼリア - でした。

「」のシロナさんはまだシンオウリーグ制覇する前です。

スズは警察行けよつて話ですが、ポケモン世界の警察の立ち位置がよくわからなかつたので警察は出さない展開にしました（話終わつちやうし）。国際警察とかあるみたいですが、実態よくわからないです。あと、基本ゲーム準拠なのでジュンサーさんとかは出ません。

読者様の好きなポケモンが例えば敵として登場して不愉快な思いを抱かせてしまうこともあるかもしれません、その種族全体を悪いとしてとらえているわけではありません。ご了承ください。作者が

憎んでこののは嘘偽りないアートへござんなもんです。永続雨だめ
だめ
...

- IJIIまでの裏設定的なもの - (後書き)

夕方ぐらいに次話投稿します

- 摺れる草むら - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{ズズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ソライシ博士が治療法を調べてくれているあいだ、僕達は町から少し離れた114番道路の草むらで仲間達と話し合っていた。町中でギヤラードスを出したらパニックが起こりてしまつ。以前ギヤラードスの恐怖を身をもつて感じている身としては仕方の無いことかもしれないと思つた。

ギイに危険は無いとはいへ、多くの人にどうやらギヤラードスは恐怖の象徴なのだ。

「ギイとはまともに話すの初めてだよね」

「おう、そうだなスズ。よろしくな！」

「よろしく。でも驚いたよ、随分大きくなつちゃつて……」

”メメねえちゃんが危ないと思ったら、なんだか力が湧いてきてさ。気がついたらでかくなつてたよ。おいらが進化しなかつたら危いところだつたろ？スズももつとしつかりしろよ、あんまりメメねえちゃん危ない目に遭わせたら許さないからな！”

「「、ごめんなさい……気をつけます……」

ダメ出しされてしまった。

口調は少し幼かつたが、やはりギヤラードスの姿で言われると迫力がある。

”ギイ…すじくかつじつよくなつた”

”ありがとねえちゃん。今まではオイラの事守つてくれてたから、今度はオイラがねえちゃん守るから！”

”ありがと。ギイとつてもつよそ”

メメはどうやらこの姿になつたギイのことも弟の様に思つてゐるようで、僕はなんだか少し安心した。

”それで、ルークは大丈夫なのか？”

「うん、それなんだけど…」

“なんだか波導の力が上手く流れていかないんだ。まるで自分の腕じゃないみたいだよ…”

ルークは苦虫を噛み潰したような顔で、自らの右腕を見ていた。もしかしたら今も右腕を動かそうと試みているのかもしれない。

不幸中の幸いというわけではないが、ルークは右腕が動かないという事以外は大きな怪我は無いようだった。僕はソライシ博士から聞いた現状を説明した。

“みんなごめん…僕のせいで…”

“何言ってんだよ！ルークがいなかつたらここまで来ることだってできなかつたろ。そんなふうに思つてるやつなんていないよ！ねえ、メメねえちゃん”

“うん”

「今ソライシ博士が治す方法を調べてくれているんだ…だからきっとすぐによくなるよ！」

”助けて！”

突然頭の中に声が響いた。思わず僕達は身構える。

ガサガサとふいに草むらが揺れ、一匹のポケモンが飛び出してきた。青い体に綿毛の様な翼が翼が生えている。これは…確かにチルツトというポケモンだつただろ？

「ど、どうしたの？誰かに追いかけられるの？」

チルツトの声があまりに緊迫していたので、僕は多少緊張して問いかけた。

”兄ちゃんを助けて！”

そう言つと、チルツトは再び草むらに飛び込んでいつてしまつた。

「助けてだって…。さつきの感じだと相当切羽詰つてているようだつたけど…後を追いかけてみようか…」

ルーク達も無言で頷いた。

僕達はチルットの消えた草むらに飛び込み、チルットが搔き分けたと見られる後を進んだ。

しばらく進むとふいに草むらが途切れ、大きな岩が姿を現した。岩によりかかるようにして、何かが荒い息をついている。

”チー：何処に行っていた。あんまり出歩くなと……誰だ！”

鋭い声が飛んだ。

声の主は壁に寄りかかるようにして座り、荒く息をしている。白い毛並みは出血で赤く染まっていた。

このポケモンは確か、ザングース。

- 血まみれザングース - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{ズズ}
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

野生のザングース（ザック）
野生のチルット（チー）

- 血まみれザングース -

”俺の言葉がわかるのか？とつととここから消えろ、人間！”
ザングースは荒い息を吐きながら言った。

”違うの兄ちゃん！チーがこの人たち呼んできたの！”

”なんだと…余計な事を…”

”だつてザック兄ちゃん、血が止まらない！”

ザングースの体は血に染まっていた。ザングースは強気な言葉とは裏腹に、随分と衰弱しているように見える。

「と、とにかく手当てさせてくれないかな？絶対君達に危害は加えないから…」

”人間の言う事なんぞ信用できるか…な、なんだ！くそつ、話せ！“

ザングースは暴れたが、その抵抗には力が無かつた。

ルークがザングースを抱き上げ、僕達は足早にハジツゲタウンへの帰路についた。

「おおスズ！シャンデラの呪いを解く方法がわかつたぞ！…って、なんだそのザングース、血だらけじゃないか！」

ルークが抱いでいるザングースを見て、ソライシ博士は驚きの声をあげた。

「あの、すみません、治療をお願いしても…」

「…わかつたよ、任せてくれ」

俺は医者じゃないんだがなあなんてため息をつきながらも、博士はザングースの治療を始めてくれた。

「出血は…胸の傷からか？しかし傷の割りに出血が多いな…」

”ザック兄ちゃんは毒蛇の奴らにやられたんだ…すごく大きい毒蛇に！”

チーが泣き叫んでいる。

「二十……二十歳にならねたようなんですが……」

ハブネークとザングースの話は以前に本で読んだことがあり、印象に残っていた。二つの種族は互いに憎しみ合い、争っているのだと。『毒蛇？ハブネークの事か。では傷のわりに出血が激しいのは毒に侵されているということか。…しかしちょっと待てよ…なぜこのザングースは毒に侵されているんだ？ザングースはハブネークの毒に 対して免疫があるはずなのに…』

うーんと博士は唸つた。

「こうして毒に犯されたザングースがいるということがその事実を証明しているわけだが……しかしそれが事実だとすればあまりよろしくないな……完全に種族間のパワーバランスが崩れてしまう……」

「十種」

「あ、悪い、職業病かな。しかし、そうなるとまずいな。この町にもハブネークの毒に対する解毒剤はあるにはあるけど、あくまで既存の毒に対する解毒剤だからな。このザングースが受けた毒にそれが効くとは思えない……」

解毒剤……薬……………そういえば、

「あの…博士。フヨンタウンで貰つた漢方薬があるのですが…」

方藥。

「漢方薬か……俺はこの分野が専門ではないから、新しい抗体を作り出す事はすぐにはできない。今はそれに賭けるしかないか……」
僕はザングースに漢方薬を飲ませた。

口に流し込むと、サンクースの顔が歪んだ。やはり相当苦いのだろうか。自分で飲むハメにならなくてよかつたと、僕は不謹慎な心配をした。

「効くんでしょうか…」

「なにぶん未知の毒だ。しかし、元々ザングースは毒に対する抵抗力は高いし、漢方というのは自然治癒力を高める効果があるからな。ザックの体力に賭けてみるしかない」

ベッドの横で、チーが心配そうにザックを覗き込んでいた。

主人公の所持ポケモン
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）

野生のザングース（ザック）
野生のチルット（チー）

午前零時を過ぎる頃になると、ザックの呼吸は安定し始めた。

耳を近付けてみると、どうやら穏やかな寝息をたてているようだ。チーが一晩中看病すると言つて聞かないでの、僕達は交代でチーとザックに付き添つようとした。万が一様態が急変しては大変だからだ。

僕はメメと交代し、ぼんやりと外が明るくなつてきた頃ベッドに入つた。

「……ズ……スズ、起きろ……寝起きの悪い奴だな。おい、スズ！」ソライシ博士に体を搖さぶられて、僕は目を覚ました。

「はかせ……おはようございます」

「ああ、おはよう。ザックが目覚めたぞ」

「……本当ですか！」

「ああ本当だ。早くお前も来い」

”……世話をかけたな”

午後の日差しが差し込む部屋の中で、ザックはベッドに横たわり上半身だけ起こしていた。

ザックの膝の上ではチーがスヤスヤと寝息を立てていた。

「いや……僕達が勝手にやつたことだから」

”しかし驚いたものだ。俺達の言葉を理解する人間は初めてだ”

「いや、それはルークのおかげなんだ。波導つていう力らしいんだけど……」

”波導そのものの力というか、波導を操る技術を応用しているんだ。僕も独学で学んだだけだから、つまく説明できないんだけど……”

”とにかく悪かったな。この恩は俺が生きていたら返させてもらひう

ぞ、人間”

「生きてたらつて…もつ毒は大丈夫なんじゃ…？」

”毒は大丈夫だ。まだ少し体内に違和感があるが、この程度なら差し支えないだろう。俺が言つたのは、毒蛇の連中との決着の事だ”

「決着つて…じゃあその体で戦いに行くつもり！？」

ああそうだと、ザックは僕の目をまっすぐみて言つた。

”俺達の一族はこの辺りを住処にしていたんだ。俺達ははるか昔から毒蛇の奴らと戦い続けている。それこそ戦いのきっかけなんか分からなくなつてしまふぐらい昔からだ。実力はほぼ拮抗していく、どちらかが決定的に有利になる状況というは今まで決して訪れる事はなかつた”

ハブネークとザングースが争い続けている事は知つていたが、何故争いあつているのかは知らなかつた。まさか当事者達もそれを知らないという事実には、僕はかなり驚いた。

”それが少し前から、ハブネークの奴らに変化があつた。巨大な奴が現れたんだ。姿かたち事態に変化があつたわけじゃないから、あれは進化ではないと思う。そいつが現れてから、俺達の力関係は一気に崩れたんだ。仲間はほとんどやられてしまつた”

「ふむ…それはあまりよろしくないな…。完全に生態系が崩れてしまつてゐる。ハブネークが進化するなんて話は聞いたことないから、突然変異体なのか…。いやそれにしたつて、一種族を壊滅に追い込むほどの変異が短期間で起こるものなのだろうか…人為的な変異原が？いや、それにしたつて…」

博士はなにやらブツブツと咳きだしてしまつた。

”続けて構わないか？”

ザックが僕を見て言つた。

- ザックの話 2 - (前書き)

ザック…東の集落のザングース。

チ…チルット。ザックの妹。

オズ…西の集落のザングース。ザックの親友。

春を告げる風と共に、ザングースの集落はにわかに活氣付く。多くの命が芽吹くこの季節。健康と武運を大地と海の神に祈る、年に一度の祭りが行なわれるのだ。

ザングースはそれほど個体が多い種族ではない。長きに渡つて続いているハブネークとの争いの中で、その数は増えすぎる事も無く減りすぎる事も無く、絶妙なバランスを保つていた。

「ザック、今年はお前が東の代表に選出されると思うぞ。先代ももうピークは過ぎただろうし、去年も結果は残せなかつたしな」

西の集落の代表に選出されたオズは、ザックの肩を叩いてにっこりと笑つた。

「どうだかな…それに、俺にそんな大役が務まるかどうか。何も考えずにハブネークの奴らと戦つてるほうがよっぽど楽だ」

「まあ、そういうな。季節は巡り、命あるものは盛衰を繰り返す。実際東の集落が存続し続けられているのはお前の力あつてこそだ…じやあ俺は西に戻るぜ。また武祭で会おうや」

「ああ。じゃあな」

ザックは夕暮の中、自らの拠点がある東の集落まで戻つた。

集落に戻ると、捕まえた獲物を保存庫に貯蔵し、自分の家に戻る。

「おかえり兄ちゃん！」

洞穴に戻ると、彼の妹であるチーがパタパタと飛びついてきた。

「ただいま、チー」

チーは嬉しそうにザックの頭に飛び乗つた。

ザックは妹のチーと一人で暮らしていた。と言つても、チーはザングースではない。チルットという種族だ。

数年前、群れからはぐれたと思しきまだ赤子だったチルットを偶然ザックが見つけ、それ以来一人は同居していた。

最初の内こそチーの存在を面倒だと感じていたザックだったが、次

第に彼女の存在は大切なものへと変わつていった。

「オズと会つてきた。あいつも武祭の準備で大変そうだつたよ」

「今年は兄ちゃん達戦うの？」

武祭では各集落の強者が集い、種族内で一番強いものを決める祭りが開かれるのだ。

今年は東の集落からはザックが出場する事がほぼ決定していた。ザックは東の英雄と呼ばれ、広く知られていた。この東の集落を切り開く際、近辺に拠点を持つていたハブネーク達との流血戦に大きく貢献し、勝利を導いた事からその称号を与えられたのだ。

「兄ちゃんすごいなあ。チーも一生懸命応援するから!」

「ああ…」

ザングースの集落は、距離を隔てて東西南北の四つに分かれていた。本来一つの大きな集落だったのだが、ハブネーク達の奇襲で全滅してしまう事を懸念し、集落を分けたのだ。大元の集落は南で、最初は北。次に西。ザックのいる東の集落は新たに作られたばかりで、未だ発展途上だつた。

戦力を分散させることを懸念する声もあつたが、万全の警備体制を敷き、各拠点間の連絡を密に取る事によつて次第に各集落は発展していった。

- ザックの話 3 - (前書き)

ザック…東の集落のザングース。東の英雄と呼ばれる。

チ…チルット。ザックの妹。

オズ…西の集落のザングース。ザックの親友。

ザックは、ふと考える時があった。

ザングースとハブネークは、そもそも何故争いあつてゐるのだろうかと。

仲間に問い合わせたこともあるのだが、ザックが求めていた答えを聞けたことはなかつた。

というか、そもそもそんな事を考へた事がある者がいなかつた。

問い合わせられた仲間達は一瞬きょとんとしてから、口々に「うづうづ」と。

「我々は大昔から争いあつてきたのだ。汚らわしい毒蛇の奴らと同じ大地に生きていくことなどできん！」

「俺の親父はハブネークの奴らに殺されたんだ。許す事などできるものか！」

それぞれが争いあう理由にはなるだらうがしかし、争いの根源的な理由を知つてゐる者は集落の長を含め、誰一人としていなかつた。ザック自身、これまで多くのハブネークの命をその鋭い爪で引き裂いてきたし、それにためらいを覚えるわけではない。戦いの中でそんな考へがよきるようなら、ザックは東の英雄などと呼ばれる」とはなかつたであろう。

しかし、戦いを終えてふと血だまりの中へ戻つたとき、どうしようもない虚しさのような感覚を覚える事があつた。

俺達は何故憎しみあつてゐるのだろうか。毒蛇どもはその答えを知つてゐるのだろうか。

「なあオズ。お前は……」

「うん？」

「……いや、なんでもない。武祭の準備は順調か？」

南の集落にいた頃は共にすごしていた事もある親友のオズに、兼ねてからの疑問を投げかけてみようかと思つたが、なんとなく思いでまつたザックは代わりになんでもない世間話を持ちかけた。

「ああ、うちの集落は順調だよ。俺はプレッシャー感じてるけどな。西が優勝した事はここ最近ではないからな。みんなフラストレーシヨンが溜まってるのや…」

「はは、それはプレッシャーだな。東は結局俺が出る事になつたよ。お手柔らかに頼む」

「そりやこっちのセリフだよ、東の英雄…」

オズはため息をついた。

「北と南の集落はどうだ？」

「北には去年優勝したレンがいるからな…さらに腕を上げたとも聞く。今年もアイツが出てくるのは間違いないだろうな。南はどうだろ？……そりや、昨曰南からの定期連絡が来るはずだつたんだけど、珍しく来てないんだよ。忘れてるのかな？」

オズが思い出したように言つた。

「今年の武祭は南の仕切りだつたよな。準備で忙しいのか？大元の集落が情けない話だ。そんなところに負けるわけにはいかないな」

何気ない会話であつたが、おかしいと感じるべきだった。

各集落間の定期連絡が途絶えた事は、集落を分割してから一度もなかつた。

そんな事を考えもせず、ザックとオズは別れた。

- ザックの話 4 - (前書き)

ザック…東の集落のザングース。東の英雄と呼ばれる。

チ…チルット。ザックの妹。

オズ…西の集落のザングース。ザックの親友。

何か様子がおかしい。

同じ道を歩いているのに、何かが違つ。胸騒ぎのような感覚に襲わ
れていた。

ふと地面に視線を落としたザックは、何かを引きずつたような奇妙
な痕跡を見つけた。

「これは……毒蛇のやつらの這つた跡？なぜこんな集落の近くに……」
周囲への警戒を強めながら、ザックは集落に向かって歩調を速めた。

「ばかなん……」

集落に戻ったザックが見たものは、毒蛇達に蹂躪された見るも無残
な集落の姿だった。

「みんな！無事か！」

あちらこちらに鮮血が散っている。明らかに助からないであろう姿
を晒してくる者も至る所に倒れていた。

「おい、しつかりしろ！」

ザックは倒れている仲間を抱き起こした。その体は異様に重たく感
じた。

「おい……おい……しつかりしてくれ……」

「ザック……毒蛇の奴ら……が……」

「……おい、あまりしゃべるな

ゴホッと、抱き起こした同胞は血を吐いた。

「……に気をつける……俺達の抗体が……きかな……」

腕の中にあつた命の灯は消えてしまった。

「くそつ……そうだ、チーは！」

自らのねぐらとするほら穴にたどり着くと、近くに倒れていた同胞
を助け起こした。

「おい、大丈夫か！」

「ああ……ザック……全く、いいタイミングで留守にしてやがつて……」

へつへと、同胞は笑う。呼吸は激しかった。

「……つ！チーを知らないか！」

「チーちゃんは、あいつらが連れて行つたよ。東の英雄の妹分つて事を知つていたんだろうな……はやく……おい……かけてやれ……」

「……すまん！」

「ああ……ザック……」

「なんだ」

「あいつら、ぶつ殺してくれ……俺達の……を……」

「わかつてん！一匹残らず引き裂いてやる！」

「頼んだぜ……東の英雄……」

毒蛇の這つた跡を追いかけ、殺意を漲らせてザックは走つた。數十匹ほどの毒蛇たちの群れにはすぐに追いついた。

「チー！」

「兄ちゃん！」

全身の体毛が逆立つ。鋭利な爪が飛び出す。

ザックは怒りに任せ、毒蛇たちをなぎ払つていった。

チーを解放し、毒蛇の群れと向かい合つ。

「チー、無事か！」

「兄ちゃん……兄ちゃん……！」

チーは泣きながらザックにしがみついた。

「……お前、東の英雄か」

ザックはギョッとして声のしたほうを見た。

「なに……貴様、どうして俺達の言語を！？」

「お前たちの稚拙な疎通言語など簡単に理解できるよ

シャーシャーと笑い、ハブネークは言った。

ザックは改めて群れの中心にいるハブネークを見た。

他の個体と比べて、一回りも一回りも大きな体をしていて、尾が一

股に分かれていた。

「チー、離れてろ」

ザックは自分の倍はあるつかというハブネークに向かい合つた。

「許さん……！」

ザックはハブネークに特攻した。

巨大な刀のような刃がついた二股の尾を振りながらそれを迎撃する。ザックはそれを巧みにかいぐぐり、尾を切り落とさんと鋭い爪を立てた。

「！？」

ハブネークの鱗はザックの爪を通さなかつた。

「そんな程度か東の英雄。まだ他の集落の奴らの方が骨があつたぞ」「なんだと！？貴様ら、まさか…」

「少々平和ボケしすぎじゃないかね。こんな種族を相手に長年遅れをとつていたかと思うと、少々はずかしくなるな…」

二股の尾が舞い踊り、鋭い刃がザックの胸を十字に裂いた。

「くつ…おのれ…！？…な…に…」

途端にザックは体の自由が効かなくなるのを感じた。

「なんだ…これは…」

「これだからザングースどもは愚かだというのだよ。長い戦いの中で貴様らが我々の毒を受けなくなつたよつて、逆もまた然り。貴様らの抗体を我々が上回つただけの事だ」

「兄ちゃん！」

チーの声が聞こえる。今意識を失うわけにはいかない。

「くそつ…！」

ザックはチーを銜ると、戦場を一目散に離脱した。

「…放つて置け。どの道奴はもう終わりだ。我々はこのまま最後の集落に向かうとしようか」

ハブネークはシャーシャーと笑う。

「東の英雄、恐れるに足らぬ」

回想話は今回で終わりです。

- そして現在にいたる - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{ズズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザック：野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。
チー：野生のチルット。ザックの妹。

そして今に至るというわけである。

”これが俺達に起つた事だ。あまり考えたくはないが、あの毒蛇の口ぶりだと、他の集落はすでに恐らく残るは西の集落だけだ。なんとしても守らなければならん”

ザックは布団の上の拳を握り締めた。

「にわかに信じがたい話だが…」

しばらくの沈黙の後、ソライシ博士が話しだした。

「こうして毒に犯されたザックがいるということがその事実を証明しているわけか。しかし、そうなるとまずいな。この町にもハブネークの毒に対する解毒剤はあるにはあるけど、ザングースの免疫すら凌駕するこの新しい毒に既存の治療薬が役に立つとは思えない…ソライシ博士はまたブツブツと咳きだしてしまつた。どうやら思考モードに入つてしまつたらしい。

”そういうわけだ。世話になつたな人間達。俺達がもし生き延びる事ができたら、この借りは必ず返す”

ザックはそういうと、ベッドから起き上がつた。

「ザック、まだ駄目だ。まだ体の毒は完全に消えてはいないだろうソライシ博士は慌ててザックを静止しようとした。

”俺が寝てれば事態が好転するのか？一族の危機だ、少々の不調などに構つていられるか……人間、すまんがチーを見ていてもられないか。こいつは見ての通り別の種族だ。俺の妹には違ひないが、戦いに連れて行きたくないんだ…”

ザックは看病疲れで布団の上でうずくまつたままのチルットを指差していった。

「それはもちろん、いいけど……ザック、僕達も一緒に…」
ザックは静かに首を振つた。

”これは俺達ザングースとハブネークの奴らとの戦いだ。人間に介入される筋合いは無い”

僕は何も言う事ができなかつた。ザックの口ぶりは静かだつたが、強い決意が込められていた。

”じゃあな。…本当に助かつた、ありがとう”
ザックはそれだけ言うと、勢いよく飛び出して行つてしまつた。

何だか時計の音がいやにはつきりと聞こえる。

後に残された僕達は、ぼんやりとしている事しかできなかつた。

しばらくして田を覚まし、ザックが行つてしまつた事を知つたチーは泣き喚いた。

”兄ちゃんを追いかける！チーだつて戦えるもん！英雄の妹だもん！お願ひ、スズ兄ちゃん！チー達に力をかして…このままじゃ、みんなしんじやう…”

「チー…だけど、ザックは…」

「スズ、私からもお願ひする。力を貸してくれないか」

「そ、ソライシ博士？どうしたんですか急に…」

ソライシ博士から意外な言葉が飛び出し、僕は少々驚いた。

「これが単なる種族間の争いだつたら俺も口は出さない。しかし、この状況はあまりに不自然だ。他種族の言葉を理解し、それまでの天敵を完全に圧倒するほどの進化がこの短期間で起る事は考えにくい。はつきりとしたことは言えないが、少々人為的なものを感じるんだ」

人為的にポケモンを進化させる。そんなことが可能なのだろうか。

「もし何者かがハブネークを進化させたのだとしたら、俺達が種族間の争いに介入する理由には充分なるだろう。それに、それほど強力な毒を持つハブネークが町の近くに存在しているとあつては見過ごすことはできない。もし天敵であるザングースがいなくなつてしまえば、ハブネークは一気に増殖するだろうしな」

確かにそれは言えるだろう。ポケモンジムの無いこの町にとつては、ハブネーク達の存在は大きな脅威となりうるだろう。僕がこの町に来たときも、もしテッセンさんのがいなかつたら、ギイを見た町の人たちは果たしてどうしただろうか。

「…わかりました。みんな、いいかな…？」

”片腕でどこまで力になれるかわからないけど、やってみるよ”

”メメも。ザックたちをたすける”

”おいらも賛成だよ。あいつあんな体で行つても、返り討ちにされちやうぞ”

決まりだつた。

「すぐに向かおう。チー、西の集落に案内してくれ」

ソライシ博士がモンスター ボールを手に、言つた。

- そして現在にいたる - (後書き)

ソライシ博士がルークを介して普通にポケモン達としゃべっていますが、ポケモンと会話できてビックリ！的なエピソードは割愛しました。別に忘れたわけじゃあります

- 西へ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{ズズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザック：野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。
チー：野生のチルット。ザックの妹。

数時間前にザックが通ったと思われる獸道を、僕達は走った。

「チー、西の集落まで後どのくらいだ？」

ソライシ博士が息を切らしながらチーに尋ねる。

”うーん、いつもはザック兄ちゃんの頭の上に乗っているからもつと早く着くんだけど…このペースだと後1時間ぐらいで着くと思う！”

ルークの頭の上で方向を指示していたチーが答えた。

「い、1時間か…」

ソライシ博士は苦しそうな声を上げたが、速度を緩める事はなかつた。

みんな、あまり時間に猶予がない事はわかつていた。

僕達は森の中を走り続け、夕日が大地を赤く染める頃、西の集落を望む高台にたどり着いた。

”もう集落はすぐそこだよ…毒蛇たちが潜んでるかもしれないから、気をつけて…”

チーは声を潜めていった。

僕達は周囲を警戒しながら、集落への歩を進めた。

「ルーク…周りの様子わかる？」

”ちょっとまって……右腕のせいで上手く波導が使えないからあんまり自信がないけど……うん、たぶん大丈夫だと思う。周りに敵意を放つ存在は無いみたい”

「そうか…よし、みんな一氣に行こう。ザングース達がやられてしまってはしょうがないし…」

「そうだな…行こう。ルーク、もし何か感知したらすぐに知らしてくれ」

”わかりました”

集落まで後一步といつとこりで、背後から声が飛んだ。

“！背後から何か来ます！数は… 2… 3…！”

言つて、ルークは迎撃体勢に入る。威嚇の波導弾をたつた今通つてきた森の奥に向けて放つた。

「…ダメージはあまり通らないかもしねないが、威嚇にはなつただろつ。スズ達は先に進んでくれ。後方は俺が引き受ける」

「博士…大丈夫ですか？」

「ああ…ハガネール！」

ソライシ博士がモンスター・ボールを放り投げると、見るからに堅牢そうな体を持つ巨大な蛇のようなポケモンが現れた。

「俺の専門分野は鉱石学でね。研究の過程でコイツと仲良くなつたんだ。俺はポケモンバトルは特別得意なわけじゃないが、鉄蛇で毒蛇を相手にするには丁度いいハンドだろつ」

ハガネールのタイプは確か、地面+鋼だつただろうか。確かに、ハブネークを相手にするにはこれ以上ないポケモンだろつ。音を聞きつけたのか、ハブネーク達がさらに数匹集まつてきた。シャーシャーと舌を出し、こちらを睨みつけている。

「博士…お願いします。ギイ！博士を援護してあげてくれ！」

“おう、わかつた。スズ、メメねえちゃんを危ない目にあわせたら後で承知しないからな！”

「…肝に命じておきます」

“ギイ、きをつけて”

“ありがとう、姉ちゃんも！”

ギヤラドスの威嚇の咆哮が背後で反響する中、僕達は集落の中心に到達した。

- 西へ - (後書き)

10万アクセス超えました… ありがとうございます。

m () m

- 消えゆく種族 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{ズズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザック：野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。
チー：野生のチルット。ザックの妹。

ザックは集落の中心で巨大なハブネークと向かい合っていた。隣には一匹のザングースが膝をつき、荒い息を吐いている。ザックの話にあつた、オズというザングースだろうか。

僕は改めてハブネークの姿を見た。ザックの話に聞いたとおり、尾が二股に分かれており、先ほど見たハブネーク達よりずいぶんと大きかった。

「ザック！ 大丈夫か！」

ザックは僕の声に驚いて振り返った。

「人間…何故来た！ お前達には関係ないと言つただろう！」

「関係なくないもん！ チーは兄ちゃんの妹だもん！」

「チーまで…お前を危険な目にあわせるわけには…」

“兄ちゃんのばか！ 兄ちゃん達が死んじやつたらチーだけ生きてるなんて、やだもん！ そんなのやだ！”

チーは僕の頭の上で泣き叫んだ。

“英雄殿の妹か。…人間もつれてきているようだな。多種族に助力を乞うなど、恥ずかしくないのか貴様ら。まあ、貴様の妹にしたつてそもそもザングースではないしな。本当に恥知らずな種族だ貴様らは。”

“黙れ、汚らわしい毒蛇が！”

ザックはハブネークに飛び掛つていったが、その爪がハブネークを傷つけることはできなかつた。

“なんだやつてもムダだよ。先日の毒もまだ回復しきつていないのでう。少し大人しくしていてもらおつか”

そう言つと、ハブネークは鋭利な尻尾でザックに容赦ない斬撃を浴びせた。

“…………つ！”

たまらずザックは膝を折る。体中に無数の切り傷が刻まれていた。

”ふん、まあいい。どの道貴様らは消え行く種族だ。英雄殿の妹よ。ザングースを捨てて我々の仲間になるというなら、命は取らないで置いてやる。どうだ、我々の仲間にならないか？”

チーは少しもためらわずに叫んだ。

”チーはザック兄ちゃんの妹だもん！バカにしないで！チーはずつと兄ちゃん達と生きていくんだ！”

チーは毅然として言った。

”死を選ぶか。ならば要望どおり貴様ら皆殺しだ！この大地から消えるがいい！”

ハブネークが戦闘態勢に入つた。二股の尻尾が踊るように動き、鋭い刃がヒュンヒュンと音を立てて舞つている。

「チー、下がれ！メメ、援護を頼む！ルーケはハブネークを！」

ルーケとメメも頷くと、戦闘態勢に入つた。

メメが放つた猛吹雪を背に、ルーケがハブネークとの距離を詰める。

”それがどうした！”

ハブネークは大きく息を吸い込むと、口から炎を放射した。

”！”

炎はメメの吹雪を突き破り、メメを襲う。慌ててメメは回避した。

「ルーケ、ボーンラッシュ！」

接近していたルーケがハブネークの横つ一面に拳を叩き込んだ。爬虫類特有の目がぎょろりとルーケを睨む。

”その程度か、波導使い！”

ハブネークが身を翻し、尻尾でルーケをなぎ払つた。

”うつ！”

ルーケが慌てて飛びのいて、僕のところまで戻つてくる。腕を斬られたのか、青い毛並みに血が滲んでいた。

”…スズ、あいつ強い。片腕じゃとても太刀打ちできない…最も万全の状態だったとしてもどうなるかわからないけど…”

ルーケは悔しそうに言った。

”もう終わりか、人間共！”

再びハブネークが炎を吐いた。

”危ない！”

ルークが僕を押しのけて炎をまともに受けてしまう。

”ふふ、もはや私に敵はない…この地は我らのものだ。英雄殿の妹から血祭りにあげてやろう”

”…なんだと！ま、待て…”

”そこで大人しくしていろ、東の英雄。仲間が切り刻まれる様を見て残された少ない時間を精々苦しみたまえよ”

”やめろ…そいつらは関係ないだろう…”

ザックの叫び声が聞こえた。

”関係ない事はないさ。ザングースに与するものは生かしてはおけぬ。それが例え取るに足らない存在であつてもな”

ハブネークが僕とチーの前まで迫つてきた。

”お前達に直接の恨みはないが、この世界から消えてもらひ。悪く思うなよ”

ハブネークの鋭い刃が風を切る音がして、そして…

ハブネークの体が吹き飛ばされていた。

- 毒暴走 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{ズズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザック：野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。
チー：野生のチルット。ザックの妹。

ザックは体が燃えあがるような熱さを感じていた。まるで再び毒が体を巡り始めたかのような感覚だつた。実際にその通りなのかもしない。前の戦いで受けたハブネークの毒は完治しておらず、まだ体に残留していたのだ。

ふと体に手をやると、以前ハブネークに十字に切られた胸の傷が再び開き、ザックの胸から腹部にかけてを赤く染めていた。しかし燃えるような熱さと共に、ザックは奇妙な感覚を覚えていた。体の氣だるさとは裏腹に、何故か力が湧いてくるのだ。

これは…

戦士の勘が告げている。この力なら毒蛇に届くと。

突如、僕達の目の前まで迫っていたハブネークの巨体が吹き飛び、白い影が現れた。

「ザ、ザック！」

「兄ちゃん！」

「一人とも、下がつてろ。すぐに片付く

吹き飛ばされたハブネークがゆっくりと起き上がつた。

“すぐに片付くだと? なめられたものだ…先ほどまで手も足も出なかつた者の”

“勘違いするな、毒蛇”

ザックはハブネークを遮つて言った。

“俺が勝つなどと覺えはない。俺が言いたかったのは、決着が近いってことだ。この力はどうやらそれほど長く使えないようだからな…”

見ると、ザックの胸の十字傷から絶え間なく血が流れ出していた。

” 覚悟しろ、毒蛇。今こそこの地に、我らが種族に安寧を
” この地に生き残るのは我々だ。貴様ら全員根絶やしにしてくれる
！”

ザックは大地を蹴り、ハブネークの刃を潜り抜けてすれ違いざまに切り付ける。

返す刀で、ハブネークの刃がザックの皮膚を裂いた。

どちらかが傷つけば、負けじと鮮血が飛ぶ。

僕は半ば呆然として、二つの種族の戦いを眺めている事しかできなかつた。

夕日が世界を赤く染めていた。

どのくらい戦つていただろうか。決着の時は訪れた。

ザックがハブネークの二股の尻尾の片方を切り落とし、その胴体を切り裂いた。

うめき声をあげ、ハブネークは倒れた。徐々に血だまりが広がつてゆく。ザックはしばらく荒い息を吐いて天を仰いでいたが、やがてその場に崩れ落ちてしまった。

” 勝った！ザック兄ちゃんが勝ったよ、スズ！”

チーは嬉しそうに僕の頭を離れると、ザックに飛びついた。

” おのれ……ザングースごとに……遅れを……この長き戦いの終わりを……”

ハブネークが途切れ途切れに呟いてる。

” ……悪いな、毒蛇。生き残るのは俺達みたいだ”

” ……ふん…これで終わりで…はない。貴様らの被つた被害も…軽いものではあるまいよ。……私はまもなく退場する事になるだろうがしかし、貴様のその力も…また異端。種族間の秩序を乱すものだ… ……いつか我々の中から現れるであろう新たな脅威の出現におびえながら精々つかの間の勝利に酔いしれるがよい……”

” いや、恐らくこれ以上の進化は近い未来には起こらないだろうな

突然、声が聞こえた。

- 研究者 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{ズズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザック：野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。
チー：野生のチルット。ザックの妹。

「まさか強化ハブネークが負けるとは… 一つの変異が天敵の変異をも促したのか… ふむふむ」

突如声が聞こえた。

声の先に目をやると、灰色の白衣を着た男が立っていた。灰色だから白衣とは言わないのだろうか。

「なつ… お前、いつから…」

「慌てるな少年。私の正体についてはもはや説明する必要はないだろうが、私はただの研究者だよ。ボスの作った新薬の実験にここまで来ただけのことだ。少年をどうにかして氣はない」

” なんだと… 人間、貴様まさか… ”

ハブネークは苦しそうに言つた。

「ああ、そうだ。お前の体に特殊な薬剤を投与させてもらつた。気づかれないようにやるのはなかなか骨が折れたが、ボスも実験結果には満足してくださるだろう。お前のその力はいわば我々のおかげつて事だよ」

” …… ”

ハブネークは放心状態になつてしまつた。

「まあ結果は上々だ。毒蛇の毒はさらなる強化を遂げ、新たな毒は対抗種族の力さえ引き上げた。ハブネーク側これ以上の変異がないと言つたのは、ザック君の新しい力がハブネークに影響を及ぼす種類のものではないからだよ。ザック君の変異は元々君から受けた毒に対抗するためのものだからね。あくまで自分の中で完結している最も長い目で見ればわからんがねと、ハブネークを見て灰色は言つた。

” …… これは傑作だ。多種族の力を借りてでかい顔をしていたのは、ほかならぬ私自身だったというわけか。はつはつは！ ”

ハブネークは血の涙を流しながら笑つた。

”貴様…そんなくだらん実験のために……俺達の戦いに踏み入ったのか！”

ザックが激昂し灰色に向かって一步踏み出しが、すぐに崩れ落ちてしまった。

”……！”

「無理するな、君の体だつてもうボロボロだろ？その力は毒を無効化しているわけじゃない。慣れない力の使いすぎは感心しないな。……じゃあ、そろそろ俺は引き上げさせてもらう」

そう言ひうと、灰色はハブネークに向かってモンスター・ボールを投げた。

ボールはハブネークの眼前で二つに割れると、その巨体をその中に収めて地面に転がった。

「なつ…ハブネークをどうするつもりだ！」

僕の問いかけに、灰色はさも当然と言つた様子で答えた。

「どうするつて…持ち帰つて研究するのさ。思つたとおりの実験結果が出て、ボスもきっとお喜びになるだろ？じゃあな少年。お前が無事だつたらまた会うこともあるかもしれないな。……しかし、こういう形でポケモンと会話するつてのは中々貴重な体験だ。少年のルカリオは随分強い波導力を持つているんだな」

灰色はそう言い残すと、森の中へと消えていった。

「スズ、大丈夫か！ハブネークの親玉はどこへ行つた！？」

ソライシ博士がハガネールとギィを連れてこちらに走つてきた。

「戦いは…勝ちました。でも…」

なんと言つていいのか、僕はよくわからなかつた。

ハブネークの残した血溜まりとザックに切り落とされた尻尾だけが、夕闇の中に残されていた。

- 研究者 - (後書き)

毒暴走は夢特性です一応。
そういえば夢イーブイ解禁されましたね。マジックポートエーフィ
とか使ってみたい。

- パワーバランス - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{ズズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザック：野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。
チー：野生のチルット。ザックの妹。

僕達は満身創痍のザックを抱えて急いでハジツゲタウンに戻ると一通り治療を終えた。

みんな疲労困憊で、怪我をした者の手当てを終えると、僕達も死んだように眠った。

翌日、僕は昏過ぎに目が覚めた。

外はいい天気のようで、窓から口差しが差し込んでいた。ザックはまだベッドで寝ていた。チーも枕元で寝息を立てている。あれだけの戦闘の後だ。消耗していく当然だろう。僕はなんとなく新鮮な空気を吸いたくなつて、外に出た。

外に出ると、ソライシ博士がぼんやりと煙草をふかしていた。

「おおスズ、起きたか」

「おはよう」ざいます。博士… 今回の件、ありがとうございました「いやなに、放つておいたらゆくゆくはこの町にもかかわつてくる事だったからな。むしろ俺も助かつたよ」

昨夜は疲労困憊で治療を終えるとすぐ眠りについてしまったので、僕は博士に事のあらましについて説明した。

「なるほど…やはり第三者の思惑が紛れ込んでいたのか。それもスズ、お前の故郷を襲つた奴らだったとはな」ソライシ博士が唸り声を上げた。

「あのハブネークはすごい力でした。ザックが新しい力に目覚めなければ、多分僕達は…」

「そういえばそのザックの新しい力だが、話を聞く限りだと毒について攻撃能力を飛躍的に上昇させるものなのつだな。免疫機能を失う代わりに新しい力を手に入れたってことか」

どうやらそのようだつた。ザックが力を発動したとき、ハブネーク

の出血毒が再び体の中を巡り、ザックは胸の古傷から激しく出血していた。

「しかし、ザングース達が全く歯が立たなかつたそのハブネークすら退けるとは…捨て身の力とはいえ、強力なものだな……」ソライシ博士は何故か難しい顔をしていた。

「博士…どうかしたんですか？」

「いやな…ザックが勝つたのはもちろん嬉しいよ。俺達はザックの味方としてこの争いに加わつていたからな。しかし二つの種族間のパワーバランスを考えると、複雑だよ。今のザックの力は明らかにハブネーク達の上をいっているからな…」

「あ…」

力を持ったハブネークはザングース達の集落を襲い、壊滅状態に追いやつた。

今新しい力を手に入れたザックは、果たしてどうするのだろう。

「でも…ザックがそんなことを…」

「…起こつてしまつた事はどうしようもない。しかしあの灰色の奴ら、なんのためにこんな事をしたんだ。単なる学術的興味か？スズは心当たりはないか？」

「すみません…僕には…」

見当もつかなかつた。ここまできて、僕はいまだに灰色達の目的がわからなかつた。

「スズ

ルークの声が聞こえた。

「おはよう。昨日はルークも大変だつたね」

「スズより遅く起きるなんて、ちょっとショックだけどね。スズ…ザックも目を覚ましたよ。スズを呼んでる」

「そうか…よかつた。僕を…？」

「うん

- アンビバレンス - (前書き)

主人公の所持ポケモン^{ズズ}

ルカリオ（ルーク）

ギャラドス（ギイ）

ユキメノコ（メメ）

ザック：野生のザングース。東の英雄と呼ばれる。
チー：野生のチルット。ザックの妹。

博士の家に戻ると、目を覚ましたザックはベッドに横たわり窓の外を見ていた。チーはまだザックの上で寝息を立てている。

「人間…世話をかけたな…」

ザックがベッドから上半身を起こした。

「ザック…まだ寝ていないと…」

“大丈夫だ…今回の件、本当に感謝する。俺達だけでは正直どんな結末を迎えていた事か…”

ザック僕に頭を下げる。僕は慌ててしまった。

「そんな…気にしないで。元々僕達が首を突っ込んだんだし、最初に君達のバランスを崩したのは僕達人間ということになるんだから…むしろ謝らないといけないのは僕達だ」

“そんなことはない。ここは純粹に礼を言わせてくれ”

「ザック…その…これからどうするんだ?」

“…その質問はどういう意図だ?”

逆に問い合わせられ、僕は言葉に詰まってしまった。

“…俺達はこれまでずっと戦い続けてきたんだ”

ザックは独り言のように話始めた。

“…だが、理由無き種族間の戦いに一体何の意味があつたのか。仲間達を守るというのはもちろん理由になるが、そもそもなぜ俺達は互いに潰しあう事を選んで、理由無き憎しみに身をゆだねていたのだろうか”

「…この世に正義と悪の価値観がある限り、利と害がある限り、争い事があるのは仕方ない事だとは思う…」

なんて陳腐な言葉だと、僕は口にして思う。僕自身、ルネシティを襲つた灰色達の組織に激しい憎しみを感じている。何をどう取り繕つたって、言葉を乗り越えて感情は押し寄せてくる。

“…これはチーには黙っている事なのだが…”

ザックは前置きして続けた。

“あいつには、群れからはぐれでいるところを保護したと言つてあるのだが、チーの両親はハブネークに殺されている。数年前、縄張り争いが激化していてな……毒蛇の奴らは他種族の棲み処にまで手を伸ばしたんだ。俺達の争いの延長線上で巻き込まれたわけだから、直接的ではないとはいえ俺達にも原因があるのだが……”

ザックは膝の上で眠るチーをそつと撫でた。

“チーはすでに事切れた親のチルタリスの羽に守られて、静かに眠つていた。……なんでだろうな、俺はどうしてもチーを放つておくことができなかつた。今思えば、チルタリスの親達の圧倒的な愛を目の当たりにして以来、俺の中に迷いが生まれたように思う。原因の一端は俺達にもあるとはい、他種族の子を引き取つて育てる事は仲間にも反対されたが……結局、今に至ると言つわけだ”

僕は何も言つ事ができず、しばらく沈黙が流れた。

“人間、お前は故郷を守るためにあの男達と戦つているのだとか”
「ルークから聞いたのか……うん、そうなんだ」

“人間……どうか俺も連れて行ってもらえないか。ぜひお前の力となる事を許して欲しい”

「ザック……それは……ありがたい話だけど。ザングースの集落は大丈夫なのか？」

“今回の戦いで、双方大きな被害を被つた。相手をどうこうしようという話はしばらく起きないだろう。それに……この力を手に入れてしまつた今、俺も種族間の秩序を乱す存在となつてしまつた……”
「そんな……」

“いいんだ。集落の再興は残つた者達だけでもやれるだろ？。もちろん、お前さえよければという話だが……”

“それは……ザックが来てくれば、僕達もとても心強いよ”

“そうか”

ザックはベッドから起き上がり、大仰に跪いて言つた。

“よろしく頼む、スズ”

シズク（23番）の所持ポケモン
マリル（マリちゃん）

私はルネシティに住む者です。

私達の町は侵略者に支配されています。

助けてください。

どうかこの手紙を読んだ方、私達を助けてください。

××××年 月×日

私は小石を湖に投げ込み、小さく咳払いをした。

月の見えない闇夜だ。

ルネシティの暗さには慣れているとはいえ、状況が状況だけに心細さが私を襲った。

しかし夜間外出が認められない現在、闇夜は身を隠すのに都合がいいとも言えた。

夜の闇に身を潜めてしばらく待つて、湖からマリちゃんが顔を出した。

私達の町がこんな事になる前はいつも一緒にいたのに、今となつては深夜に会えるか会えないかという状態だ。私はマリちゃんを抱きしめた。

「マリちゃん、お願ひね」

私は手紙を瓶に詰め、マリちゃんに渡した。

マリちゃんは小瓶を受け取つて小さく鳴くと、夜の湖に潜つていった。

手紙入りの小瓶を流すのは何個目になるだろつか。

町の人たちが持つていたポケモンは灰色たちに取り上げられてしまつていたため、現在この町でポケモンを所持しているのは私しかいない。だったら私は、できる事をやろうと思った。

ルネシティの現状を外に伝えるのだ。

訪れる人の極めて少ないこの町で、外からの助けは期待できない。生まれてそれほど経つてないマリちゃんは、まだまだダイビングを使いこなせていないため長距離を航行することができない。なるべく小瓶を遠くに運んでもらい、後は海流任せにするしかなかつた。果たして、外の人がこの手紙を読んでくれる可能性はどのくらいあるのだろうか。誰の手にも届かず、海底に沈んでしまうことだって充分考えられる。

それに、運よく誰かの手に渡り手紙が読まれたにしたつて、何かの冗談だと思われてそれで終わりという可能性もあつた。

実際私がこの手紙を読んで、何か行動を起こすかと言われると自信がなかつた。しかしそれでも、何もしないでいることはできなかつた。

私はしばらく水面を眺めていたが、身を潜めながらスズくんのお母さんが寝ている家に戻つた。

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）

114番道路を進むと次第に火山灰が体積した道路は終わり、ゴツゴツした岩肌があたりを占め始めた。

ぼんやりと曇つていた空は晴れ、太陽が顔を出す。

”スズ、目的地まではどれくらい？”

ルークが尋ねた。

「ソライシ博士の話ではそれほど遠くないみたいだつたけど…」

” そうだな、もう數十分といつたところだろう。俺も一度だけ訪れた事がある。あの滝は中々壯觀だつたな”

” チーも見たことある! とつてもキレイだつたよ! ”

” たのしみ ”

僕達はハジツゲタウンを出発し、114番道路にある流星の滝を目指していた。

博士が調べてくれた方法によると、ルークの右腕の呪いを解くには、清淨な水で清める事が必要なのだそうだ。

「荒ぶる炎の呪いを沈め、清らかな水で浄化しなければならない」ハジツゲタウンを出発する前日、ソライシ博士はルークの右腕の呪いについて話してくれた。

「114番道路を抜けた先に、流星の滝と呼ばれている滝がある。この滝に浸かり身を清めれば、恐らく呪いは解けるはずだ」

「流星の滝…ですか」

「ああ。どのくらい浸かればいいのかはわからないが、ルークの場合呪いが侵食しているのは右腕だけだからな。シャンデラの呪いとはいえ、解呪にそれほど時間はかかるないと思う。…ルークもいつまでもあのままじきついたりうし、明日にでも向かつてみるといい」

「ですね…日常生活も大変そうですし…」

「それけじやない。ルークは表にだしていないが、おそらくあの右腕は相当熱をもつているはずだ」

「…………え？」

「火傷自体は治っているが、シャンデラの呪いは炎の呪いの中でも上位のものだ。今回のケースはおそらく意図して呪いにかけられたわけではないのだろうが、かなり苦しいはずだ」

僕は改めて、前を歩くルークの右腕を見た。

ルークの右腕には未だ包帯が巻かれていた。ルークは泣き言を一度も言わなかつたが、それが逆に辛さを物語つているようにも思えた。

「…………ズ…………

「…………え？」

“スズ！なにボーッとしてるの？チーの話ちゃんと聞いてるの！？”

“あ、うん、ごめん。…………なんだっけ？”

“もう、やっぱり聞いてなかつたんだ！”

チーはザックの頭の上でむくれた顔をした。

ザックが仲間になつてくれたあの日、ザックはチーをザングースの集落に残るよう説得した。しかし、もうザック兄ちゃんの傍を離れるのは嫌だと言つて、彼女は聞き入れなかつた。結局ザックと共にチーも付いてきてくれるこになつたのだ。

ザックはため息をついていたが、その実まんざらでもなさそうだった。やはり妹を残していくのは気が引ける部分もあつたのだろう。口には出さないがザックは心なしか嬉しそうだつた。

進む道が勾配を帯び始め、岩山が目立ち始めた。
程なくして、洞窟の入り口が目に入る。あれが流星の滝への入り口だろうか。

「なんだ、随分大所帯なんだな。聞いてた報告と少し違う

突如上から声が降つてきた。

ぎょっとして小高い岩山を見上げると、灰色のシルエットが見えた。

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）

「今更説明は必要ねえと思つが」

灰色はゆつくりと若山を降りてきた。

「そろそろ終わつてもらつ。さすがにこれ以上動き回られると、俺達も都合が悪いんだよ」

”スズ、こいつがお前の言つていた灰色の一昧か”

鋭い目でにらみつけながら、ザックが言つた。

「うん……」

灰色は僕達の正面に立つた。

「お前ジムリーダーを味方につけてるんだって？ジムリーダー」と
きに遅れを取るつもりはないが、その上にいる奴らにまで出てこら
れるとさすがにやつかいだからな……現段階でこれ以上事を大きくさ
せるわけにはいかねえ」

「……なに言つてるんだ。僕に撃退されるようなお前らの仲間なんか
がジムリーダーに敵うわけないだろ」

「俺達なんか下つ端だよ。お前の故郷にはちゃんと実力派が待機し
てるさ。……そうそう、ちょっと前の話だが、ルネシティ近海の上空
を飛んでた鳥を落としたって言つてたなあ。確かトロピウスつてい
つてたつけか。女が一人乗つていたらしいが、お前何か心当たりは
ないか？」

灰色がにやりと笑う。

「…………え…………？」

僕は頭を殴られたような衝撃を受けた。

ヒワマキシティを飛び立つたとき、ナギさんが乗つていたのはトロ
ピウスだった。

前日にトロピウスから取れた木の実のジュースをモナリさんにもら
つていたので、印象に残つていた。

僕は血の気が引いていくのを感じた。

「どうした？急に元気がなくなつたようだが

「そ、それがどうした！」

僕は精一杯強がつて言った。

「別にどうもしないわ。ただ起こつた事を伝えただけだ。何も情報がないのはお前も不安だらうからなあ……さて、始めようか。おひつ！」

男のモンスター・ボールが宙を舞つと、一つの影が飛び出した。一体は鎧を身に纏つたような、まるで騎士を彷彿とさせるポケモン。もう一体は、まるで忍者のようなポケモンだ。

「……」

「一体が場に姿を現した途端、空気が張り詰めていくのを感じる。相変わらず、見たことがないポケモンだつた。

くそつ……敵のタイプはなんだ……

”スズ、落ち着け。動搖していてはこの場は切り抜けらない”

隣のザックが囁き、僕は我に返つた。

”俺が出来る。流星の滝はすぐそこだらう。お前ヒルークは滝を田指せ。こつちは俺達でなんとかしておく”

「ザック……でも……」

ザックは騎士を見て言った。

”あいつは恐らく鋼タイプ……しかも相当できれいだ。俺の技がどこまで通るかわからん。俺達の中ではルークが一番奴を倒せる可能性がある”

ザックは淡々と言つた。

”ギイも連れて行け。滝に近付くためにはもしかしたらアイツの力が必要になるかもしけん”

「……わかった……メメ、ザックと協力して。チーはサポートを頼む」

メメとチーはこくりと頷いた

”……みんな、ありがとう。波導の通信回線は繋げておくから、何かあつたらすぐに連絡して”

「……ここは頼んだ。すぐに戻つてくるから……！」

”合図したら走れ…ルークもいいな。

1 · 2 · · · 3 !

僕達は弾かれたように走り出した。

「おお？なんだ、逃げるのか少年」

「…くそつ！」

不敵に笑う男の言葉を無視して、僕たちは大急ぎで流星の滝のある洞窟へと飛び込んだ。

- 騎士と忍者 - (後書き)

れこさん じんせいが くだりやかなんだよ…

主人公の所持ポケモン
スス
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）

洞窟の中はぼんやりと明るかった。ビックリともなく滝の音が聞こえてくる。

光源はなんだろうか？じつくりとあたりを見渡しているヒトも無い。僕達は、滝の音が聞こえる方へと急いだ。

開けた場所に出ると、なんとも静謐な空間が広がっていた。洞窟の中に滝がある。それほど大きな規模ではないが、僕達は圧倒されました。

見ると、流れ落ちる滝の水がぼんやりと光を発しているように見える。

「… ゆっくり見ていたいけど、あまり時間が無い。早速滝に…」

”よし、ルーク、オイラに乗りなよ”

ギイが水の上に降り、ルークに乗るよう促す。

”うん。よろしく、ギイ”

ルークは飛び乗ると、ギイは滝に向かって泳ぎだした。

よし…これで呪いが解けて腕が動くようになれば…ルークのことを気にかけながらも、僕は洞窟の外に残してきた仲間達の事が気がかりで仕方なかった。

「…まあ、自分のポケモンおいて逃げる奴じゃなさそうだしな。お前らを適当に痛めつけてやれば戻つてくるだろ。シユバルゴ、アギルダー、始めるか。どうやら相手トレーナーはポケモンバトルを放棄したみたいだから、お前ら好きに戦つてみな。…あのガキが戻つてくるまでは殺さない程度にしてやれよ」

シユバルゴとアギルダーが一步前に出てきた。

”メメ、俺は鋼のやつとやる。お前はもう一匹を頼めるか？”

”わかった”

”俺と戦ってくれるのはお前か。早速始めようか”

シェバルゴが槍の様に鋭利に尖った腕をザックに向かって突き出す。

”随分好戦的な事だな鋼の騎士よ”

ザックも一步前に出る。

両者の視線が空中でぶつかり合い、ザックは一気に距離をつめる。シェバルゴはザックを迎え撃つ形で、槍を構える。

空気を裂く音がして、シェバルゴの槍が空を裂く。ザックは紙一重でそれを交わし、ブレイククローを叩き込んだ。

”…つ、硬いな…！”

シェバルゴの体には傷一つ付いていなかつた。

”なかなかやる…”

シェバルゴは再び槍を構えた。

シェバルゴの一撃はザックのそれより明らかに威力がありそうだった。再び槍を構え、まるで大砲のような一撃を放ってきた。

ザックは再びそれを回避し、シェバルゴの懷に入ると再びブレイククローでシェバルゴの胸部を切りつけ、距離を取る。

素早さではザックが上回っているようだが、破壊力は明らかに相手が上だつた。

”…この削りあいは少々割に合わないな…”

呴くと、ザックは首から提げていたペンドントを握り締めた。ザックの掌から血がぽたぽたと垂れる。

同時に、以前改造ハブネークに十字に裂かれたザックの胸の古傷から、徐々に血が滲み出してきた。毒が体内を駆け回り始めた証だつた。

”！兄ちゃん！”

”…このまま分の悪い戦いを続けていてはいざれヤツの槍に捕まる。…なるべく早く勝負をつける”

ザックは深く呼吸をして言った。

ザックのペンドントは、いつかの改造ハブネークの切り落とした尻尾の刃を削り、作ったものだつた。切り落とした今も、その刃には

純度の高い毒が封じられている。

”まだまだ楽しませてくれそうだな。来い、獣の戦士”
シユバルゴはにやりと笑い、再び槍の照準をザックに合わせた。

- **壘槍** - (後書き)

主人公の手持ち + これから仲間になる予定のポケでランダムマッチ
潜つてみたけど中々勝てません。

- アギルダー - (前書き)

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）

”…やめる。無駄に血を流す必要はない”

今までに戦闘態勢に入ろうとしていたメメに、アギルダーは静かに言った。

”シユバ達の戦いの結果如何で俺も手を引こう。お前達の側が負けたら、お前も手を引いてくれると嬉しい。もし納得がいかなかつたらお前がシユバと戦えばいい。…どうだ？”

”…あなたはたたかわないの？”

メメは首を傾げて、少々戸惑いながら問いかけた。

極めて好戦的で、目的のためなら手段を選ばない…そんなイメージを、メメは灰色達に対して抱いていたのだ。

”ご主人は好きにやれと言つてくれたからな。シユバがやられるような相手に俺が敵うとは思えん。それはお前も同じだろ？”
まさにその通りだつた。メメの氷はシユバルゴに対して有効な手段とは言えない。メメもそれは充分承知だつた。

”メメも、たたかうのはすきじゃない”

背後で吹きすさび始めていた吹雪を抑え、メメは言った。

”あなたたちのもくてきは？”

”俺達はご主人の命令にただ従うだけだ。俺達は目的遂行の為の手段でしかない。そんな俺達が、知るはずが無いだろ？”

”そう…”

アギルダーの言葉を全て信じたわけではなかつたが、メメは警戒のレベルを下げるた。

ルークが滝つぼに浸かり始めてからどのくらい経つだろうか。
僕は気ばかり焦つてしまい、ソワソワとしていた。

美しい流星の滝もまるで目に入つてこない。

外に残してきたみんなは大丈夫だろうか…」こにはギイに任せて、僕も外に戻ろうかと考えていたその時だった。洞窟の壁に反響して、微かに音が聞こえる。

ポケモンの鳴き声のようだ。声は僕達が通つてきた方向から聞こえてきた。

まさか…ザック達は負けてしまつたのだろうか。残してきた仲間達が灰色のポケモンに串刺しにされている映像が頭をよぎつた。

…何を考へてるんだ！

僕は頭を振つて、悪い妄想を追い出した。しかし、音は相変わらず続いていた。ルーク達はいまだ滝つぼから上がつてくる気配は無い。僕は心を決めて、音の正体を確かめるべく、前のフロアを恐る恐る覗いて見た。

そこには、一羽の巨大な蝙蝠に纏わりつかれている一匹のポケモンがいた。あれは…確かにゴルバットというポケモンだったか。実際に見るのは初めてだつた。もう一匹のポケモンの姿はゴルバットの陰になつてしまいはつきりとは確認できなかつたが、その雰囲気から察するにどうやら苛められているようだ。ポケモンの体から出血が見られ、悲痛そうな声を上げている。

僕はその光景を見ていることができず、気がつけばポケモン達の間に割つて入つていた。

突然の僕の乱入に驚いたのか、一羽の蝙蝠はどこかに飛び去つてしまつてしまつた。

「ふう…よかつた…君、大丈夫？」

僕は地面にうずくまつてゐるポケモンを見た。そのポケモンは、弱々しい声で小さく鳴き声をあげた。

「あれ、このポケモンは…」

あまりポケモンの種類に詳しくない僕でも、知つていた。硬いカラに覆われたポケモン。硬いカラに覆われ、大空を夢見るポケモン。

確か名前は、
コモルー。

- アギルダー - (後書き)

仮面サイダー おいしい。

- おぐひょう「モルー - (前書き)

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）

「コモル」。ホウエン地方を代表するといつても過言ではないドラゴン、ボーマンダの進化する前の姿。

あまりポケモンに詳しくない僕でさえ知っているのだから、ことホウエン地方におけるその認知度は相当なものだろう。ずっと昔に図鑑で見たきりだつたが、進化前と後のギャップがとても印象に残っていた。それにドラゴンという存在は、多くの少年の心の琴線に触れるものがあるのだろう。

僕は包帯を持つていなかつたので、服の袖を破つて包帯代わりに撒き、出血していた部分を簡単に手当てしてあげた。

「じゃあ「コモル」はトレーナーとはぐれちやつたの？」

僕が尋ねると、「コモル」は小さく頷いた。

とりあえずの危機が去つた今も、「コモル」は小刻みに震えていた。どのくらい前になるだろうか、「コモル」はトレーナーと流星の滝を訪れた。しかし何かの拍子に滝に落ちてしまい、そのままトレーナーとはぐれてしまったのだそうだ。

「コモル」は日付を数えていなかつたため正確な日数はわからなかつたが、トレーナーとはぐれてしまったのはそれほど前のことではないようと思われた。

いずれは強大なポケモンになるとはい、今はまだ力を蓄える時期である。一人で見知らぬ地に放り出すのは少々酷といつものかもしれない。

「「コモル」……君のトレーナーさんが見つかるまで、一緒に来る？ もちろん君さえよければだけど……」

”…………”

「モルーは迷っていたようだったが、やがて首を縦に振った。

「そうか。よろしく、モルー。僕の仲間は…今はちょっとばらばらになっているんだけど、後で紹介するよ。…ところでモルーは、名前はあるの?」

“…………ルー…………”

「ルー、か。もしかしたら短い間になるかもしれないけどよろしく、ルー」

“…………”

ギイイン!

真っ向から繰り出されたシユバルゴの刺突を、ザックは両の爪でがつちりと受け止めた。

驚いたのはシユバルゴだ。

ザックはそのままシユバルゴの懷に飛び込み、拳を固めて強力な連撃を放つた。

”ぐつ……”

シユバルゴの顔が初めて苦痛に歪み、吹き飛ばされる。

”っくつ”

土煙の中、シユバルゴはつくりと立ち上がった。

”っくつははははっはあーこれほどの相手とめぐりあつたのは久方ぶりだ！”

シユバルゴが心底楽しそうな声で笑い、立ち上がった。

”来い、獣の戦士！まだ足りないぞ！もっと俺を楽しませててくれ！”

”よく喋る騎士殿だ”

ザックは再びシユバルゴの槍を潜り抜けて懷に飛び込み、再度連撃を叩き込む。

しかし今度は先刻のようにはいかなかつた。シユバルゴはその場に踏み止まり、その強固な頭をザックの頭部に叩き付けた。

”ぐ…つ！”

たまらずよろめいたザックを、乱れ突きが襲つた。

今度は吹き飛ぶのはザックの方だつた。

”どうした、それまでか？俺も全力を出させてもらひぞ！”

シユバルゴの槍がさらに太く、鋭く形態を変える。

全身から放つオーラがさらに力強さを増したように見えた。

”はあつ、はあつ……くそつ、やはり割に合わん削り合いだ…”

さらに威圧感の増したシユバルゴに、ザックは再び向かい合つた。

- おぐひょうゴモル - (後書き)

毒暴走 vs 虫の知らせ

- 炎の爪痕 - (前書き)

主人公の所持ポケモン^ズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

“あれは……”
明らかにパワーアップしたシユバルゴを見て、メメが呟いた。

“シユバの全力だ”

アギルダーがそれに答える。

“あいつが虫の知らせを発動させている所は俺も数えるほどしか見た事が無い。それだけでもあの戦士は賞賛に値するよ”

“メメお姉ちゃん……”

いつの間にか隣に来ていたチーが、不安そうにメメの手を握った。

“だいじょうぶ。ザックはつよい”

「大丈夫。ザックが負けるわけ無い。

そう思いながらも、メメの中の不安は膨らんでいった。

「！光が……」

ルークが浸かっている滝つぼの辺りが、一際明るく光り始めた。

光は段々と激しくなる。ぼんやりと明るかつた洞窟内を閃光が照らし、収束した。

「ルーク！」

僕の呼びかけに応えるように、ギィに乗ったルークが戻ってくる。

「ルーク！腕は……」

ルークは無言で僕に腕を見せた。

シャンデラにかけられた炎の呪い。黒い蛇が巻き付いているかのように刻み込まれていた呪いの痕は、未だそこに存在していた。

しかし、誰が見てもそれとわかる変化が生じていた。黒い痕が、真紅に変わっている。

「それは……」

”大丈夫、なんとも無いよ。腕も動くし、右腕から流れ込んでいた禍々しい波導も今はもう感じない。それどころか、何だか力が湧いてくるような気さえするんだ”

ルークは右腕を振り回して、にっこり笑つて見せた。

”やっぱり自由に腕を自由に動かせるつていいなー！なんだか生まれ変わったみたいな気分だよ！”

ルークは宙返りして喜んでいる。青い毛並みに真紅の紋様が映えていた。

”聞いていたよ。ルー、僕はルーク。よろしく！”

”おいらはギイだ。よろしくな”

ルーは戻ってきたギイとルークを見て、僕の後ろに隠れてしまった。小刻みに振動が伝わってくる。どうやら怯えているようだった。ギイの姿は、確かに他者を威圧するものがある。僕だってギイがギヤラドスに進化したときは、その姿に怯んだものだ。……それに、今でも正直外見は怖い。

”なんだよ。スズ、そいつ大丈夫か？おいらを随分怖がってるみたいだけど”

ギイは、僕の後ろに隠れるようにして震えているドラゴンを見て言った。

”大丈夫、ちょっと驚いているだけだよ。……さて、ゆっくりしていの時間はない。早くザック達のところに戻らないとー！”

”うん、急いでー。”

もう七月も折り返しですね

- リフレッシュ - (前書き)

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

”ふつ！”

シユバルゴの連續突きがザックを襲う。

突きの一発一発が先ほどとは比べ物にならない威力である。鋭く、重い。紙一重でかわしたザックの皮膚が裂ける。

”どうした、それまでか獣の戦士！”

ザックがバランスを崩したところに、シユバルゴの強烈な横薙ぎが入った。

”がつ……！”

かろうじて受け止めたザックだったが、ついに膝をついてしまった。

”……降参だ、騎士殿”

肩膝を着いたザックに、尚もシユバルゴは槍を向けて言い放つ。

”潔い事は悪い事ではないが、俺はまだ満足していない。お前が駄目なら次はあの雪女に相手をしてもらうことになるが？”

シユバルゴの目は獰猛な光を帶びていた。力の解放によつて軽い興奮状態に陥っているのだろうか。

”心配しなくとも、お前の相手は別にいるさ”

”何？”

”俺は負けた。しかし大局はまだわからんぞ”

突如、ザックとシユバルゴを分断するように背後からエネルギーの塊が飛んできた。

”これは……波導エネルギーか？”

シユバルゴが視線を向けた先には、スズ達の姿があつた。

「みんな、大丈夫か！」

僕は大急ぎで仲間の下に駆けつけた。

” メメたちはだいじょうぶ ”

メメもチーも、見たところ怪我はしていないようだった。

「 おお、戻つてきてくれて安心したよ。もしかしたら本当に逃げち
まつたのかと思い始めていたところだ 」

灰色が大仰な動作で僕に話しかけてきた。

「 … そんなことするわけがないだろう。仲間を置いて逃げるものか
！」

「 ふふ、おかげでそのお前の大事な仲間とやらは随分と傷を負つた
みたいだがな。自分勝手なトレーナーさんだ 」

「 あ… 」

僕はザックを見た。

体中に傷ができ、膝をついて苦しそうに呼吸をしていた。
ザックの胸の傷が開いているのを見て、僕は驚いた。

「 ザック！ まさか、毒暴走… 」

” 僕は大丈夫だ。状況を見る。後はお前達の役目だ ”

” 大丈夫、兄ちゃんはチーが治すからっ！ ”

ぱたぱたとチーが飛んできたかと思うと、ザックの肩にとまり、光
を発し始めた。

「 チー、それは… ？」

” ハジックタウンを出るときソライシ博士が教えてくれたの！ 今
チーじゃ毒しか治せないけど、これでザック兄ちゃんの役に立てる
！ ”

しばらくすると、ザックの胸の傷からの出血が止まった。
ザックの呼吸も多少なりとも落ち着いたように見えた。

「 よく戦つてくれた… よく持ちこたえてくれた… 」

僕は安堵のため息をついた。

” みんな、ありがとう。今度は僕が戦う ”

僕とルークは、猛烈な殺氣を放つ鋼の騎士に向き合つた。

” 次はお前が相手をしてくれるのか？ 青き波導使い ”

シユバルゴが臨戦態勢に入り、周囲の空気が張り詰めていく。

ルークも無言で構えた。両腕で構えているルークの姿を見るのは随分と久しぶりな気がした。

”波導使いと戦うのは久しいな。お前も俺を楽しませてくれ！”

- リフレッシュ - (後書き)

万能ソライシ博士。

- 壊れるまで - (前書き)

主人公の所持ポケモン^ズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

「ああ、戦う前に一つ言つておくが」

灰色が緊張感の無い声で話しかけてきた。

「今回の戦いは、完全にポケモン同士に任せているんだ。だからお

前も口出しすんなよ」

「…………… そう、なのか？」

” そうだ、スズ。俺もあの鋼の騎士と一対一で戦つた。少なくとも俺にはアイツが何か手出しをしているようには見えなかつた”

「…………… わかつたよ、僕も口出しせず静観する」

「はつ、信用のカケラもないな」

灰色が自重気味に言つた。

当たり前だ。この男に限つた話ではないが、灰色を信用する義理は何一つない。口出ししないと言つたが、僕は灰色の一拳手一投足を注視していた。

「口挟んで悪いなシユバルゴ。存分に戦つてくれ」

灰色がシユバルゴに言つて、一步下がつた。

” 添い、主殿。来い、波導使い！”

「ルーク、頼んだ！」

僕も一步下がつていつた。

” うん、見ててみんな。絶対勝つよ！”

言うが早いが、ルークは飛び出していつた。

シユバルゴはそれを迎え撃つ形でルークに照準を合わせる。先に手を出したのはシユバルゴだった。大砲のような一撃がルークに向かつて放たれる。

ルークはそれをかわし、連撃の置き土産をして再び距離を取つた。しかしシユバルゴは少しも怯んでいなかつた。

そのままバックステップしたルークを間合いの外に逃がさず、追いつをかけるように槍を突き出した。

”さすがに大したダメージにはならんか”

槍はルークの腹部をえぐつたが、大した怪我はしていないようだつた。

”あの騎士の攻撃力は恐るべきものだが、当たらなければ怖くない。格闘タイプのルークには、大降りの一撃を見切るのはそれほど難しくないはずだ。”

しかし…と、ザックは続けた。

”格闘タイプの拳をまともにくらつて涼しい顔をしていられるのはどういうわけだ。ルークの拳は決して軽くないのだが…”

それどころかシユバルゴはそのまま反撃までしてきた。

”お前達はいくつか勘違いをしているようだから訂正しておいてやる”

それまで沈黙を守っていたアギルダーが語りかけてきた。

”第一に、シユバのタイプは鋼+虫だ。故に、格闘術が格別弱点といふわけではない”

アギルダーは淡々と続ける。

”第二に、シユバがズバ抜けて打たれ強いわけではない。もちろん鋼である以上耐久力は高いが、アイツはそもそも痛みを感じない。氣力でカバーしているという意味ではない。単純に、痛覚がないんだ”

「痛覚がない？」

僕は驚いて言った。

”ああ、そうだ。俺たちが今の組織に入る代わりに、痛みを感じぬ体に作り変えてもらう…それがシユバの出した条件だ。より戦いを楽しむために、あえてそうしたのだ。だからアイツは、少々のダメージで立ち止まる事はない”

それこそ壊れでもしない限りな、とアギルダーは呟いた。

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

痛みを感じない。

果たしてそれがいい事なのか憂うべき事なのか、僕は迷ってしまった。

あまり殴りあいのケンカなんてしたことが無い僕だったが、今まで感じた事のある痛みを思い出して見た。痛みを感じない事は単純にいい事のようにも思える。

”何を考えている、スズ”

突然ザックが声をかけてきた。

「ザック…痛みを感じないっていつのは、どういうものなのかなつて」

”…それだけだと聞こえはいいがな。あらゆる生物が備えている痛覚という機能を捨てているわけだ。必ずどこかに歪は出る。それ相応の、な。少なくとも俺は、痛みを捨てよつとは思わん”

”青き波導使い。お前は命を奪つた事はあるか?”

”…？突然なんだよ…”

突然のシュバルゴの問いかけに、ルークは不審げな声をあげた。

”数年前、イツシユのとある地域で大きな争いがあつた”

シュバルゴは話しおした。

”俺達の組織は探し物をしていてな、それがある塔に眠つていると特定できたのだ。俺達もその作戦に狩り出された。かなり大掛かりな作戦で、組織の中核となる錚々たるポケモン達もそれに参加していた。現地のポケモン達とも争いになつたが、俺達は次々に蹴散らした。結局目的を達するには至らなかつたが、あの時の血風の臭いや土煙。我が槍が肉を貫く感触は鮮明に思い出すことができる”

”だから…突然なんだよ！”

”殺す氣でこい”

”！？なつ……”

”お前からは俺を殺してでも倒そうといつ氣迫を感じられん。先ほどの獸の戦士からは刺すような殺氣を感じたものだがな”

”……”

”俺は痛みを感じない。生半な事では止まらぬぞ”

”ルーク！”

僕は思わず声を上げた。

”スズ……”

手出し無用というルールだったが、ルークには何者かの命を奪う存在にはなってほしくなかつた。

何を甘い事をと思われるかもしけないけど、それでは灰色達と同じになつてしまつ。目的のためにあらゆる障害をあらゆる手段で排除しようと、灰色達と。

”……大丈夫。ありがとう、スズ”

ルークはにっこり笑つて前を向いた。

”シユバルゴ、お前は戦闘を楽しみたいんだろうけど、僕達にはあまり時間がない。一気に決めさせてもらつよ”

”ほう、それはつれないな波導使いよ。お前達は俺をここまで本気にさせたのだ、まだまだ楽しませてもらわねば困る”

ルークは腰を落とし、掌を腰の横で構えた。

”それは……先ほどの波導弾か？あれでは俺を止めることはできんぞ。溜めが必要となる技は注意するのだな。俺の槍がお前を捕らえる”ルークの右腕が紅く光を帯び始めた。光を放つてはいるのはシャンデラの炎呪の痕だった。

”……殺さなくたつて、やり方はある。僕はお前達と同じにならない！”

-宿りし力-（前書き）

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

” ! シュバ、炎だ ! ”

” なに ? ”

それまで状況を見守っていたアギルダーが、突然動いた。

一瞬体が光つたかと思うと、アギルダーが突如ルークめがけて凄まじい獄炎を放つた。

” なつ ! ”

ルークもそのまま右腕のエネルギーを解き放つ。ルークのその掌からも業火が放たれて、アギルダーのそれと相殺された。

” アギルダー、貴様 ! ”

加勢に入ろうとしたザックめがけて今度は巨大な鬪気エネルギーの塊が放たれた。

” ザック、あぶない ”

メメがザックの前に躍り出て、それを受け止める。メメの体に当たると、エネルギーは消失した。

アギルダーはその間にシユバルゴを連れ、灰色の元まで後退していった。

一瞬の出来事に、僕はただ見ていることしかできなかつた。

” 何をするアギイ ! 僕はまだ… ”

灰色の元まで半強制的に移動させられたシユバルゴは、不満の残る声を発している。

” シユバ、忘れたのか ? 僕が組織に入るときに提示した条件を ”

” 退却判断の絶対権限 ”

アギルダーはしばらくシユバルゴを見つめていたが、やがて騎士は舌打ちをして大人しくなつた。

アギルダーと灰色はしばらく意思疎通していたようだつたが、やがて灰色が口を開いた。

” あーあ、わかつたよ。お前がそう言つなら、ここらで退散か ”

灰色は騎士と忍者をモンスター・ボールに戻す。

”雪女、獣の戦士、それに青き波導使いよ。手出し無用の約束を破つて申し訳なく思つ。俺達はここで引く”

「おい、俺達はここに引いておいてやる。…正直炎には驚いたぜ。完全に俺達の弱点をつかれた」

次々と事が起こり流れについていけなかつた僕だが、我に返つて言つた。

「ま、待て！ナギさんについてもつと詳しく…」

「ナギ……？ああ、ルネで撃墜したあの鳥使いの事か。その様子だとやはりお前の関係者か。残念だつたな、俺も詳しくは知らない。俺も仲間内から聞いただけだからな。しかしお前の動搖つぶりを見れたのは気分がいいぜ。まあ精々足搔けるだけ足搔いてみることだな。俺たちにとっちゃそれも楽しみの一つだ」

くつくと笑い、灰色は去つていった。

”アギルダーつていつたつけ…あのポケモン。あいつも多分波導使いだ。僕が炎を撃つとき、僕の波導を読んで技を先取りされた”

ルークが自分の右腕を見ながら言つた。

「そういえば、あいつらもポケモンと意思疎通していようつだつた。波導の力つてルークだけが持つてている訳じゃないんだ…」

”波導の力は誰もが持つてているよ。素質がある者なら鍛えて強化することもできる。僕達の一族はそれが少し強いんだ”

「それにしてもあのアギルダーつていうポケモン…一瞬で状況を動かしたね」

”アギルダー…”
メメが呟く。

”思うのだが、恐らくアイツは本当は手出しするつもりはなかつたのだろうな”
ザックが言う。

”痛みを感じぬとはい、ダメージ自体がなくなるわけではない。いわばシユバルゴは、体の異常を伝えるアラームが無いのと一緒にだ。俺との戦いで消耗している上に炎を受けたのでは、危険だと判断したのだろう”

退却判断の絶対権限、だつたか。

”ねえねえ、ルーク右腕治つたんだ！”

チーがぱたぱたと羽ばたきながら、ルークの右腕に飛び乗つた。

そうだ。それに。

「あの炎なに！？」

僕は今更ながらルークに問いかけた。

”そうだよ！あんなこと、前はできなかつただろ！”

ギイも驚いた様子だつた。

”あれは…炎の呪いがもたらした副作用みたいなものかも。怨念だけが消えて、炎の波導をうまくコントロールできるようになつたんだ”

呪いは思わぬ副作用をもたらしてくれたと言つ事か。

話したいことはたくさんあつた。ルークの腕のこと。新しい仲間のこと。

でもとりあえずは。

「カナズミシティについてからゆづくつ話そつか…」

直接的な危機は、ひとまず去つたのだ。

「まあアギイはそういう権限を持つてるわけだし、俺も任せゆつたから文句は言わねえけどわ」

灰色が言つ。

「お前とシユバでやつてりや、あいつ等倒せたんじやねえか？」

”…どうかな。獣の戦士以外の経験値は未だそれほど高くはなさそ

うだったが、決して楽な相手ではなかつた。シユバも相当なダメージを蓄積しているはずだ。あの状態で炎を使う相手とやりあつには少々危険すぎる”

「ふうん…まあ、いいや。シユバも少し喋りすぎだつたしな。久々に全力でやりあえて高揚してたのはわかるが、あいつひに『えなくいい情報与えちました』

”…面白ない…”

「そういう意味ではアギイの退却判断もやっぱ妥当なところか。…そういう俺はその時はお前らと組んでなかつたから当時の事はよく知らないが、あの作戦はかつてない規模だったんだろ？真偽はわからんが、イッシユの伝説まで相手にしたらしいじゃないか…。まあいいさ。あれだけの情報じゃあいつも何も気づきようがないだろ。とりあえず俺達はルネに戻るか」

- 宿りし力 - (後書き)

し、 静まれ……俺の右腕……ッ！

8番 : ノリ

23番 : シズク

シズク (23番) の所持ポケモン
マリル (マリちゃん)

ガヤガヤと騒がしい外からの音で、目が覚めた。

一体どうしたんだろう…。灰色達に統制されてしまつてからのルネシティは全くと言つていいほど活気がなく、人間の集団が発するざわざわとした音を聞くのは久々のような気がした。

隣のベッドには畳まれた毛布が片付けてある。スズくんのお母さんは、もう起きて出かけたようだつた。

何となくただならぬ雰囲気を感じ、私は急いで服を着替えて表に出た。

広場に人だかりができており、灰色が何やら演説をぶつている。

「君達のポケモンである事は明白だ。早く名乗り出たまえ」

私は近付くにつれ、次第に鼓動が高まるのを感じた。嫌な汗がにじみ出るようだ。

「私も一ポケモントレーナーとして、無闇にポケモンを傷つけるのはとても心が痛む。君達が早く名乗り出してくれることを祈る」

ヒュウッ！と、ムチがしなる音と、何かが叩かれる音が聞こえた。

対象物は、小さな鳴き声を上げる。私はその声に聞き覚えがあった。マリちゃんだ。

なんで。どうして。

私は慌てて群集の中に飛びこんだ。

中心には灰色がいた。他の者達とは違い、頬に蛇の様な刺青が施してある。

「先日、このような手紙を運んでいるポケモンが発見された。が発見された。海底を探索していた私達の同胞が見つけてくれたのだ。これは明らかに町の状況を外部に伝える文脈であり、救援要請だ。私達は君達に真摯な姿勢で対応してきたつもりである。しかし、このような裏切り行為をされては私達も黙つているわけにはいかない。町の秩序を守るためにも、この手紙を出した者にはしかるべき措置

をとらねばならない」

迂闊だつた。軽率すぎた。

戸惑い。後悔。怒り。悲しみ。目の前の灰色が言葉を発するたびに、様々な感情が私の胸の中で交じり合つた。

マリちゃんの皮膚は裂け、瑞々しい青い肌には血が滲んでいた。幾度も幾度もムチで打たれたのだろう。

「痛いだろう…苦しいだろう…かわいそう」。トレーナーの下に帰つて手当してもらつたらどうだ?」

灰色が手を止めて、囁く。

マリちゃんだけに言つていいのではなく、これはトレーナーに向けての言葉でもあるのだろう。再び鞭が振り上げられた。

「…マ…！」

私が思わず叫ぼうとしたところを、ノリくんに抑えられた。

「…マ…！」

ヒュウッと鞭が空を裂き、再び小さな悲鳴が聞こえた。
我慢しろ、ということだろうか。

「せつかく耐えたマリルの気持ちをムダにするつもりか…大丈夫、犯人をいぶりだす為にも、必要以上に痛めつけたりしないさ…」
本当にそうだろうか。

マリちゃんは私の方を見向きもせず。ただじつと耐えていた。
甘えん坊でいつも私にだつこされていたマリちゃんが、私の方を見向きもせずただじつと耐えていた。

私はこれ以上耐えられそうになかった。

主人公の所持ポケモン^ズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

「すゞい…」

115番道路を抜けてカナズミシティにたどり着く頃には、夕暮時になっていた。

夕日に照らされる町を見た僕は驚いた。

今まで訪れたどの町よりも大きい。それに道路が綺麗に舗装されていて、土が見えるところはおよそ見当たらなかつた。

近代的な通りを多くの人々が行き交っている。きっとルネシティなんかとは比べ物にならないくらいたくさんの人人が住んでいるのだろう。

行き交う人々が着ている服もなんだかきれいで、僕の服装なんかにも田舎者まるだしのように思えた。それに長旅で、服もくたびれていた。

「みんな… とりあえずジムに向かおう」

僕は疲れた体を鼓舞し、足を進めた。

この町のジムリーダーの事は、少しだけ知っていた。

もちろん会つた事があるわけではないのだが、昔母さんが、僕をこの町のトレーナーズスクールに入れようとしていたのだ。カナズミジムのリーダーは、そのトレーナーズスクールの教師も兼任しているらしいのだ。

ジムの外観は統一性があるのか他の町のジムとほぼ同じ形をしていたため、すぐに見つけることができた。

僕は早速カナズミジムの門を叩いた。

「ツツジさんに用事?」

「はい、急ぎなんです。ヒワマキシティのジムリーダーの紹介状もあります」

僕はナギさんから受け取っていた書状を見せた。

「これはナギさん…… 実は今、トウカシティのジムリーダーさん

がいらしてゐるんだ。そちらも大事な話らしいから、用事はその後でもいいかな？」

「なんですか？」

それは…タイミングがいいというかなんというか。

「実はトウカシティのジムリーダーさんにもお話があるんです。なんとかお取次ぎしていただけないでしょうか」

「うーん、そうか…ちょっと待つててくれるか、今お一人に話を伺つてみるから」

僕は入り口でしばらく待機していたが、すぐにさつきのトレーナーの人が戻ってきた。

「二人ともお会いしてくれるそうだ。この廊下をまっすぐ進むとドアが見えてくるから、その部屋に入るといい」

僕はお礼を言つて、廊下を進んだ。

このジムは岩タイプのジムらしい、ジム内には岩をあしらつた装飾が散りばめられている。

なんとなく莊厳に感じるジム内を進み、僕は部屋に入った。

「失礼します」

僕が部屋に入ると、二人分の視線が集まるのを感じた。

「ルネシティのズズといいます。今日はお二人にお話があつて参りました」

「ようこそカナズミジムへ。わたくしはジムリーダーのツツジと申します」

「私はトウカジムのセンリだ。よろしく」

僕は一人のいるテーブルまで向かつた。

「わたくし達にお話があるそうですね」

「はい…まずはこの手紙を読んでいただけますか」

僕はナギさんが書いてくれた書状を渡した。

「センリさん、これは…」

「ふむ…確かにナギくんの筆跡だ…」

読み終えたセンリさんが口を開いた。

「そこに書いてある事は事実です。カナズミンティにくるまでキンセツとフエンのジムリーダーの方にも協力を要請しています」

二人はなにやら目配せしていたが、やがてツツジさんが口を開いた。

「…実は、わたくし達が今日集まっていたのはナギさんのことも関係しているのです」

センリさんが低いトーンでゆっくりと告げる。

「ナギくんと連絡が取れないんだ」

僕は血の気が引くのを感じた。

- センリヒッジ - (前書き)

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

「れ…連絡が取れない、どうのは？」

僕は動搖を隠し切れずに言つた。

「私達ジムリーダーは情報交換や技術の向上などを目的に、定期的に連絡を取り合つたり集まつたりしているんだが…ナギくんから返事がこないのだよ。盗聴なんかを避けるため連絡は鳥ポケモンを通じて行つていたのだが…」

ルネシティ上空で鳥使いを撃墜…灰色が言つていた言葉が蘇る。

「あの…実は…」

黙つていても仕方ない。僕は灰色が言つていた事をそのまま伝えた。部屋の中が静まり返る。

「まさか…ナギさんが…」

「しかしスズ君から聞いた話と合わせて考へると、な

「信じられません…ナギさんほどの使い手が…」

ツツジさんが呟く。

「私も信じたくないが、あのミクリ君までが無力化されてしまつてゐるというルネシティの状況を鑑みるに、可能性は高い可能性。つまり、ナギさんが灰色達にやられてしまつたといつ可能性。

「そう…ですわね…」

しばらくの沈黙の後、ツツジさんが口を開いた。

「わたくし達も最悪の事態を想定して動いた方がよろしいでしょう。センリさん…」

「うむ。スズ君、私達も全面的に協力しよう。今までこの話をしたジムリーダーは誰だ？」

「ええと…ナギさん、アスナさん、テッセンさんです。合流地点のカイナシティに集まつてもらつています。トクサネシティとムロタウンにはナギさんが向かつてくれているはずなんですが…」

「つむ…」の状況だとムロタウンは訪れていないと考へるのが妥当か…」

「やうですね。わたくし達もムロジムにコンタクトを取つた方がよろしいかと」

「じゃあ僕がこのままムロタウンに向かいます。お二人はカイナシティで他のジムリーダーの方と合流なさつてください」

「馬鹿を言つた。君を一人で行動させるわけにはいかない」

「そうですわね。灰色の組織から追つ手がかかっている以上、単独での行動は危険ですわ」

「ムロタウンには…ツヅジくん、同行してあげなさい。私はカイナシティに向かい、集まっているジムリーダー達に状況を説明しよう。…私が同行してもいいんだが、スズ君もむさいおつさんより若い女性の方が嬉しいだろ?」

「ちょっと、センリさん何を言つてるんですか…?」

慌てた様子でツヅジさんが反論した。

「はつは。まあともあれスズ君、私達も全力で…って、どうした?」

僕は我に返つた。安心し、力が抜けてしまつたのだ。ここまでの疲労もたまっていた。

「疲れているのでしょうか…無理もありません。今夜はジムに部屋を用意します、ゆっくり休んでいてください」

- センコヒシジジ - (後書き)

毎日暑いですねしかし…

主人公の所持ポケモン
スス
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

シャワーを借りた僕はツツジさんが用意してくれた部屋に戻り、布団の上に大の字になつた。

センリさんはトウカシティに帰つて行つた。準備をして、早速カイナシティに向かってくれるそうだ。

これで僕が話をしたジムリーダーは五人。残るジムリーダーはトクサネシティとムロタウン。トクサネジムにはナギさんがコンタクトを取つてくれている事を期待するのであれば、残るはムロタウンのみだ。

そのムロタウンまではツツジさんが同行してくれるという。今まで一人で旅してきたことを思えば、なんとも心強い限りだつた。

安心したと同時に、不安も大きくなつた。ナギさんは果たして大丈夫なのだろうか。

灰色達に捕まつてしまつたのか。無事でいてくれているのだろうか。センリさん達は連絡が取れないと言つていたけど…。

”スズ…ナギさんは大丈夫だよ”

僕の心を読んだかのように、ルークが話しかけてきた。

「ルーク…ありがとう。そうだよね、大丈夫だ、きっと」

僕は布団から起き上がつた。

「そうだ…ゆっくりできる時間がなかつたから、今みんなに紹介するね。流星の滝で仲間になつた、ルーだ」

みんなにちゃんと紹介しようと思い、僕はルーをモンスターボールから出した。

「ルーはトレーナーとはぐれちゃつたんだつて。だから元のトレーナーと会えるまでつていう期間限定ではあるんだけどね」

”よろしく”

メメがルーの頭を撫でようとしたが、ルーは僕の後ろに隠れてしまつた。

”あつ、お前せつかく姉ちゃんが……”

モンスター・ボールの中からギイの声が聞こえる。

”ギイ、しづかに。こわがつてる”

”あたしはチー！よろしくね！”

チーはぱたぱたと羽ばたきながらルーのそばに寄つて行つたが、ルーは未だに震えていた。

”もう、なにこのコ！せつかくみんなが挨拶してゐるのに、さつきから震えているばっかりじゃない！”

”チー！よせ。俺はザック。よろしくな”

ルーの反応は相変わらずだつた。

”はは……まあ、色々な事があつて疲れているのかもね。僕も疲れた今日はもう休もうか”

”わかった。おやすみスズ”

メメはそういうと、ギイのいるモンスター・ボールに入つていつた。

”俺達も寝るか”

”うん！みんな、おやすみ！”

ザックとチーもモンスター・ボールに戻る。

”今日は僕もモンスター・ボールか。じゃあ先に寝るね、スズ”

ルークもボールに戻つた。

”ルーク……腕が治つて本当によかつた。僕は……もし腕がずっとこのままだつたら、”

”スズ”

ルークが僕の言葉を遮つた。

”スズもあの時、僕達の前に立つて庇つてくれた。同じ日に遭つてたのはスズだつたかもしれないんだよ。それに、生身でみんな炎を受けたら呪いどころの話じやなかつた”

”それは……”

”だから、そういう事は言つこなしだよ。僕はスズが無事で本当によかつたと思ってるんだ”

”ルーク……”

ルークは少し照れくさそうに言った。

”さて、僕も寝るようかな。スズも早く寝ないと、また朝起きられなくてツツジさんにみつともない姿見られちゃうよ”

「それはまずい…」

ルークは笑つておやすみと言つた。

”もうひとつふんばりだよ、スズ。おやすみ”

「ありがとう…おやすみ、ルーク」

僕達はあつと/orに間に眠りに落ちていった。

主人公の所持ポケモン^ズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

「…ズさん、スズさん」
意識の彼方から女の人の声が聞こえる。ビーチやら僕を起しあわせ
ているようだ。

「おはようございます、スズさん」
どうやら僕はまた起きられなかつたようだと、ぼんやりと思つた。
「すいません…どうも僕、寝起きが…」
僕はゆっくりと上半身を起しじ、言つた。

「かまいませんわ、長旅で心身ともに疲れているのでしょうか…
でももうお日様も高いところまで登つてゐる事ですし、そろそろ起
きていただけると嬉しいのですが」
クスクスと笑いながらツツジさんは言つた。

無理やり意識を覚醒させた僕は、昨日二人で話していた部屋に向か
つた。

ドアを開けると、パンの焼ける匂いやコーヒーの香りが鼻をくすぐ
る。

「おはようございます…」

「おはようございます、スズさん。さあ、あまりゆっくりしてはい
られないのでしょうか? 朝ごはんを食べて出発しましよう」
テーブルの上には二人分の食事が用意されていた。僕達は早速向か
いあつて少し遅めの朝食を取つた。

「スズさんはムロタウンには行つた事があるですか?」
「いえ、初めてです。僕は今までルネシティから出たこともなかつ
たもので…」

まあ、とツツジさんは驚いた様子で言つた。

「そうでしたか。本当はカナズミシティも案内してさしあげたかっ

たのですが、状況が状況ですからね…」

ツツジさんは少々残念そうに言った。

何もカナズミにくるのはこれが最後というわけではない。ルネシティに平穏が戻つたら、僕は一度ホウエン地方をゆっくり回つてみたいと思つた。ミナモシティのデパートでみんなと買い物もしてみたい。随分と世話になつたモナミさんにももう一度会つてお礼を言いたいし、フエントタウンの温泉にもゆっくり浸かつてみたい。前はアスナさんと一緒にリラックスして入浴できなかつたので、今度はじっくりと。

僕は少しだけ楽しい想像をしつつ、残りのパンにかぶりついた。

「では、早速ムロタウンに向かいましょう。スズさん、準備はよろしいですか?」「僕は頷いた。

「ムロまではどうやって向かうんですか?もしかして、ギイに乗つていいくとか…」

ムロタウンは海を隔てている。

昨夜、ギイに聞いてみたのだが、曰く「短距離ならいけるが長距離は今のオイラの実力では無理」だそうだ。随分時間がかかってしまうし、自分一人ならばともかく乗つている者に気を使いながらの海の旅はそれなりに消耗してしまうとの事だ。また、ギイはダイビングも使えるらしい。父親が使うのを昔から見ていたといつてはいたが、こちらの方もまだ腕は未熟なようだつた。

「ふふ、海の旅も魅力的ですが、ここは私に任せてください。 プテラ! 来てください!」

ツツジさんがモンスター・ボールを投げると、中から巨大的な鳥が現れた。皮膚はゴツゴツしていて、なんだか荒削りな岩のような雰囲気がある。 プテラは大きな翼を広げると、高いトーンで一声鳴いた。ツツジさんに頸の辺りを撫でられて甘えているプテラをしばらく見

ていたが、僕はふと気がついた。

：ん？

ということは…まさか、空から？

ツツジさんは振り向いて言った。

「私のプロテラに乗つていきましょう。ムロタウンまではそれほど距離はありませんから、すぐに着くでしょう」

「ギイ！ギイ！なんとかがんばれないの！？」

僕は必死で懇願したが、ツツジさんは僕を引っ張るとプロテラの背に飛び乗つた。

- 空の旅 - (後書き)

割とどうでもいい事ですが、主人公は高所恐怖症設定です。
忘れてる方、途中からの方も多いかと思いますので、一応へへ；

- ムロタウン - (前書き)

主人公の所持ポケモン^ズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

「わ、わわ！」

僕達を乗せると、ブテラは大空に舞い上がった。

見る見るうちに大地が遠ざかっていく。僕は早くも口を開じた。今まで感じたことのない浮遊感が襲つてくる。

「ふふ、スズさんは空を飛ぶのは初めてですか？」

「は、はい！」

僕は恐怖のあまりツツジさんにしがみついていた。

本当に外の世界は始めてのことだらけだ。

「せつからくですか、景色を堪能しては？」

ツツジさんの気持ちよさそうな声が聞こえてくるが、じゅらはそれどころではない。口を開けたら、僕は間違いなく氣絶する自信があった。

フェンシティに行くときに乗ったロープウェイも恐怖を感じたが、直に風を受けている分、現在の状況の方が恐ろしかった。

「ツツジさん…ナギさんは大丈夫でしょうか…」

僕は口を開いた。何か話していたほうが少しでも気がまぎれると思つたし、どうしてもナギさんのことを考えてしまつ。考えても答えは出ないが、一人で考え込んでいるのは悶々としてしまい、結果思考がループに陥つてしまつ。

「…確実な事は言えませんわ…今はまだ情報が少なすぎますから…」

ナギさんは少しの沈黙の後、答えた。

「ですが、わたくし達はこのホウエン地方を代表するトレーナーとしてジムリーダーを務めておりますのよ。どこの誰とも分からぬ不逞の輩にそうそう簡単にやられてしまつわけにはいきませんわ」

そう言って微笑んでくれたツツジさんは、なんだかとても力強かつた。

どのくらい飛行していただろうか。ツツジさんの声が聞こえた。

「スズさん、ムロタウンが見えてきましたよ」

僕はおそるおそる目を開いた。前方にそれほど大きくない島が浮かんでおり、家々が小さく見えた。あれがムロタウンだろうか。遠めに見る限り、町の規模はルネシティとそれほど変わらないように思えた。

ブテラは一度島の上空をぐるりと回り、砂浜に向かって降下し始めた。徐々に大地が近付いてくる。

あともう少し…あともう少し…

「？ツツジさん、あれは何ですか？あの砂浜の…」

母なる大地に近付くにつれ、砂浜になにやら四角い建造物が見えてきた。石造りの不恰好なものだが、あれは…リング？

「あら、あれは…そういえばこの時期のムロタウンは…」

ツツジさんは思い出したように言った。

「闘技大会が催される時期ですわ」

- トウキ - (前書き)

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

ホテラは砂浜に無事着陸し、僕達はムロタウンに降り立つた。よく晴れていて、水平線の向こうまで見渡す事ができる。大地を踏みしめる事ができるところは、なんと幸せなことだろうか。地面というのは、当たり前すぎて気がつかない大切なものの一つだろう。間違いない。

「おーい、ツツジー！」

「わざわざ」と、砂浜を走ってくる音が聞こえてきた。

「あら…あの声は…」

声のした方を振り向くと、何やら洒落た板のような物を持った男性がこちらに向かって走ってくるところだった。

あれはサーフボードというやつだらうか。

走ってくる男性は、海を彷彿とさせるような青い髪をしている。

「お久しぶりです。よくわたくしが来たのがわかりましたね」

ツツジさんはにっこり微笑んで言つた。

「サーフインしてたらお前のホテラが飛んでくるのが見えたんだよ。それよか久しぶりじゃん！」うしたの、今日は…………って、お前誰だ？何してやがる！」

青い髪の男性は、僕の姿をじろじろ見た。

空の旅があまりに必死だったため指摘されるまで気がつかなかったのだが、僕は未だにツツジさんにしがみついたままだった。

「あつ…」

僕は慌ててツツジさんから離れた。

「おいお前！ツツジとどういう関係だ！」

青い髪の男性が僕に詰め寄つてくる。

「いや…えつとその…」

僕があたふたとしていると、ツツジさんも焦ったように口を開いた。

「トウキさん、違います。この方はスズさん。実は今日ムロタウンに来たのは…」

「いや、いい！聞かん！」

ツヅジさんの言葉を、トウキと呼ばれた男性は遮った。

「俺に話を聞いて欲しかつたら俺を倒してからにしりー。」

「何を言つてるんですの、トウキさん！彼は

「ツヅジと付き合つなら、それなりの力を持ったやつじゃないと俺は許さん！なんだその見るからになよなよとした…」

「もう、話を聞いてください！」

「決闘場所は、優勝をかけた闘技場の上だ。楽しみにしてるぜ」
言いたい事を言い終えたのか、青髪の男性は去つていってしまった。
僕は一部始終をぽかんとしてみてている事しかできなかつた。

「なんということでしょう…」

ツヅジさんのため息が聞こえた。

「闘技大会？」

「ええ。ムロタウンではこの時期、格闘大会が開催されるんですの。ムロは小さな町ですけど、格闘家達の間では由緒ある大会として知られているんですよ」

初めて聞いた。最も僕は格闘技に興味があるわけではないし、ただでさえ世間の事を知らなさ過ぎるので、一般的にどの程度の認知度の大会なのかを計る指標にはならなかつた。

「それで… その大会がなにか？」

「トウキさんは言い出したら聞かない方ですから… 少なくとも大会が終わるまでは会つてくださらないでしょう… 面倒な事になつてしましましたわ」

ツヅジさんは頭を抱えるようにしている。

「わたくしが歳若くしてジムリーダーに就任したせいか、トウキさ

んはわたくしに對してちょっと過保護なところがあるんですね。それは嬉しい事でもあるんですけど……どうやらわたくし達がその……お、お付き合いしていると勘違いされたようで……

ツツジさんは頬を赤らめながら言った。

「ええっ……！」

僕も驚いた。そういうえば僕はムロタウンについてからもずっとツツジさんの腕にしがみついていた。勘違いをせてしまつたのは明らかに僕のせいだろう。

でも……と、僕はいまひとつ状況がつかめず言った。

「あのう……その事とジムリーダーにお会いするのと何か関係が？」

ツツジさんは一瞬ぽかんと僕を見たが、やがて頷いた。

「ああ、スズさんはご存知なかつたのですか？ムロジムは格闘タイプのジム。ジムリーダーは……」

ツツジさんはため息をついて、告げた。

「先ほどの男性……トウキさんなんですね」

僕はよけいやく、面倒な事になつたと思つた。

-トウキ-（後書き）

ああ 夏休みが終わってしまひ

- 出場要綱 - (前書き)

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

「つまり… そのトウキさんが主催する闘技大会に出場して、勝てと？」

僕は恐る恐る口に出した。

「勝て、とは言いませんわ。しかしどの道大会が終わるまでトウキさんはお話を聞いてくれないと私は思います。ズズさんはルカリオをお持ちのようですし、修行の一環として参加してみてはいかがでしょう?」

「で、でもこの大会はタッグマッチなんですね? 僕の手持ちで格闘ポケモンはルークしか…」

「あら、心配には及びませんわ」

ツツジさんは何やら紙を取り出した。どうやら参加要綱のようだ。僕はさつと田を通した。参加資格は至ってシンプルだった。

- ・格闘家の誇りを重んじるポケモン
- ・格闘タイプの技を覚えているポケモン

「ちょっと大雑把すぎやしないか。これでは捉えようにはゴーストやエスパータイプのポケモンまで参加できることになってしまうではないか。」

僕の言いたいことがまるで伝わったかのようだ、ツツジさんは言つた。

「前にも申し上げましたが、この大会は格闘家の、格闘家による、格闘家のための、由緒ある大会です。ただ勝利のためだけにエスパーやゴーストタイプのポケモンを多様するトレーナーはおりません。みなさん格闘家としての誇りを大切にされているようですね」

つまり、参加ポケモンは自然と格闘タイプかそれに準ずるポケモンに絞られるというわけか。

僕はため息をついた。

「……ということは」

「ええ」

ツツジさんがにっこりと笑う。

「スズさんも充分参加可能と言つ事です」

「どうわけなんだけど…」

僕は仲間達をモンスター・ボールから呼び出し、話をした。

闘技大会は明日開催だったので、ツツジさんは今晚の宿を取りに行つてくれた。

”僕はもちろんいいよ。これでも格闘タイプだし、こうこう力試しの場はちょっと楽しそう”

ルークは参加を承諾してくれた。

「あと一名なんだけど…」

僕はみんなを見回した。

「メメはゴーストタイプだし、ギイは格闘タイプの技なんて覚えてないから参加は難しそうだ…チーヤルーに出場させるわけにいかないし…」

ザックのため息が聞こえた。

”…俺とルークで出る。ルールのある戦いの中で格闘の専門家達にどれだけ通用するか分からんがな”

「ありがとう…ザック、その、無理はしないで…」

”スズ、大丈夫！兄ちゃんは集落で一番強かつたんだから…”

チーがザックの頭の上で誇らしげに言つた。

”チー…あまり自らの強さを誇るな。それに俺達も所詮は閉じられたコミュニティの中で争い合つていたにすぎんからな。広い世界でどの程度力が通用するのか、もう少し試してみたくもある”

「うん、わかった。みんな精一杯がんばりうー！」

”スズ、出るからには勝たないとダメだぜ！”

”だいじょうぶ、ふたりともつよい”

ギイとメメが多少興奮したように話している。

と、その様子を眺めていたルーが突然走り出した。

「る、ルー？どうした？」

僕は慌ててルーを追いかけた。

”…………！”

ルーは砂浜にある参加者の登録手続きが行われているテントめがけて走つていき、エントリーの済んだトレーナーの前に立った。

「んあ……なんだ、お前ルーか？」

D S l i t e が壊れたので修理に出しました。いくらかかりますかね？

- ショウ - (前書き)

主人公の所持ポケモン^ズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

「ふ、ルー……どうしたの急に…」

僕は息を切らしながら突然走り出したルーを追いかけた。

ルーは一人のトレーナーの前に立つて、何やら必死に訴えている。

「ああ、アンタこいつ拾ったの？」

ようやく追いつきゼロゼロと呼吸を整える僕に、そのトレーナーは言つた。

「ええと……あなたは…」

「お前こそ誰だよ。俺はショウ。そいつの前のトレーナーだよ」

ショウはルーを顎でしゃくるように言った。

拾つた…？ 前のトレーナー…？

なんだか話が微妙にかみ合わない気がした。

「なんだよその顔。コイツは俺が115番道路で捨てたんだよ」

「捨て…た？」

「ああ。せつかくドラゴンポケモン捕まえたと思つたのに、コイツいつまで経つても進化しやがらねえんだよ。わざわざ流星群まで覚えさせたのに、大した威力にもならないしな」

冷たい目で殻に覆われたドラゴンを見下ろす。

ルーは隣で悲しそうな声で鳴いていた。

「…ルーはあなたを追いかけて…流星の滝に迷いこんで、ゴルバットに襲われていたんですよ！」

「知るかよ、そいつが勝手に迷い込んだんだろ。大体な、ゴルバットなんかにやられるようなドラゴンなんぞ、俺はいらねえんだよ！」

おら、あっち行け！と、ルーを忌々しそうに蹴り飛ばした。

「や、やめてください！今は僕の仲間だ！」

僕はルーの前に立つてショウを睨み付けた。

「お前もドラゴンを捕まえて舞い上がってんだろ？残念だったな、そいつは進化なんかできないぜ。ルーみたいな臆病者が殻を破れる

もんか。臆病者は一生大空を飛ぶことなんかできないんだよ
ショウは馬鹿にしたように言い放つた。

「…！その言葉を取り消してください…」

「嫌なこった。お前もさつさと新しいドラゴン見つけたほうがいい
ぜ。そんな役立たずなんか捨てちまえつて」

「なんだと…っ！」

僕は思わずショウに詰め寄つた。

「よせよ。お前も闘技大会参加者だろ？一二で争つても仕方ない、
決着は舞台の上でつけようじやないか」

ショウは不敵に笑つた。

なんだかとても気分が悪かつた。

”なんだアソツ、態度悪いな！オイラが噛み付いてきてやろうつか！
憤るギイを必死でなだめ、僕は隣で力なく蹲るルーの硬い皮膚を撫
でた。

「…あいつには絶対負けたくない…」

灰色達との戦いの中で、負けられないと思ったことはルネシティを
出てから幾度となくあつた。しかし、負けたくないと心から感じた
のは初めてのような気がした。

- ショウ - (後書き)

100話のようです。読んでくださっている方、本当にありがとうございます

大海原を一艘の船が進んでいた。

三人が乗っている。一人の男は船を漕ぎ、残りの二人はまるでその身を隠すように、マントとフードを纏っていた。

「悪いですねえ船頭さん。わざわざ運んでもらつちゃつて」

「いやー、気にスンナ。どうせ俺もムロタウンに向かう予定だつたからよ。ちょうど今格闘大会が開かれる時期だからな。毎年楽しみだー」

「へえ、格闘大会ですかい…頭巾の兄さん、聞きました? 中々…楽しそうなイベントじゃないですか」

「…」

どうやら一人は男性のようだった。一人は声質から、もう一人はその呼称からそれを判別することができる。

「特に興味はないですかい?」

「…」

頭巾の兄さんと呼ばれた男は相変わらず無口だったが、もう一人の男はしきりに話し続けた。

「アタシは楽しみですねえ。なんかこう、血が騒ぐって言つかねえ」

「…」

「兄さん相変わらず無口ですねえ。コンビ組んでるアタシの身にもなつてくださいよお」

「…すみません」

「おおっ、しゃべってくれたね! こいつは嬉しいねえ! 兄さん、あんた闘技大会つて聞いてなんかこう、湧き上がるものとかないんですかい?」

「俺は…特に…」

「ふーん、とおしゃべりな男は言つ。」

「そういうもんですかね」

「んじゃ、お一人さん気をつけでなー。つつてもここからムロは田と鼻の先だけよ俺はもつ一度戻つてお姫さん乗つけてくつから」「はーはー、ありがとう」やこますよ。んじゃ、行きますかね頭巾の兄さん」

おしゃべりな男は砂浜を踏みしめ、大きく伸びをした。

「シコバさんとアギイさんを退けたつていうお子さん、中々面白そうじやないですか。そう思いませんかい?」

「俺は…別に…」

おしゃべりな男はため息をついた。

とその時、一陣の風が通り過ぎ、おしゃべりな男のフードがはぐられた。

「おわっと、いけねえいけねえ。兄さんは大丈夫ですかい?」

「…問題ないです」

「なんというか、そういうことよりもむずがですねえ。アタシとは違つや」

「…そんなことは…ビアルさんには本当に感謝します…」「よ、よしてくださいよ急に…さて、これからどうじましようかねえ。格闘大会つても興味あるなあ」

二人はゆっくりと歩き出した。歩き出した一人を再び塩氣を孕んだ風が吹きぬける。

「わわわっと…危ない危ない。海沿いは風が強いやね。気をつけないといけませんねえ」

再びおしゃべりな男のフードがはぐられた。

「…ビアルさん…何かで固定した方が…」

「すいませんすいません…ちょっと一回どこかに隠れないとねえ…」

頭巾の男は、完全にフードを飛ばされてしまつて慌てているワードの様な頭部を持つ相棒に小さくため息をついた。

主人公の所持ポケモン
スズ
ルカリオ（ルーク）
ギャラドス（ギイ）
ユキメノコ（メメ）
ザングース（ザック）
チルツト（チー）
コモル（ルー）

空に高く上っていた太陽が水平線に沈みかけている。ムロタウンに夕暮が訪れた。

なんとなくその風景はカイナシティを彷彿とせるものがあった。

ツツジさんが取ってくれた宿で合流し、僕は一部始終を話した。

「それは…あまり気持ちのいいお話ではありませんわね…」

ツツジさんは表情を曇らせて言った。

「ただ、そのショウというトレーナーの方は去年も闘技大会に参加されていました。それなりの結果を残していたと記憶しておりますわ」

「そうなのか。闘技大会で結果を残すというからには、かなりの使い手と考えたほうがいいだろう。

しかし勢いで言つてしまつたとはい、後悔はなかつた。

ルーはすっかりし�ょげ返つてしまつて、モンスター・ボールから出でこようとはしなかつた。

「わたくしの方は…だめでした。やはりトウキさんに話を聞いてもらうには闘技大会が終わるまで待つしかないようです」

ツツジさんは申し訳なさそうにうなだれた。

「いえ、焦つても仕方ないです。それに誤解の原因は僕にあるわけですから…僕は僕でやれる事をやります」

「そう言つて頂けると助かりますわ…ところでスズさん、対戦相手はもう決ましたのですか？」

「いえ、明日クジを引いてその場で対戦相手が決まるそうです。勝ち残ったもの同士で戦つて、最終的に勝ち抜いたものが前回チャンピョンのトウキさんと戦えるとか」

考えてみれば、参加者の人数も大会の規模も、僕は全く分からなかつた。

しかし、元より大会に向けて準備する期間があつたわけでもない。

できる全力をつくすしかなかつた。

ムロタウンの洞窟に、二つの影があつた。ショウと、そのポケモンだ。

ドクロッグという猛毒を持つポケモンだつた。

二人は明日の大会への最終調整のため、大会にエントリー後洞窟に籠つていた。

「あのズズとかいうガキ、気にくわねえなあ……初戦であたらねえかなあ」

ブツブツと呟いていたショウに、応える声があつた。

「当たるといいですねえ」

突然聞こえた声に、ショウは驚いて振り向いた。そこにはフードで顔を隠した二つの人影が立つていた。

二人は薄暗い洞窟の奥から徐々に近付いてくる。

「あん？ 何あんたら」

「いえね、兄さんも大会に出場なさるんでしょう？ ちょっと相手をしていただけないかなあと思いましてね」

「模擬戦希望かい？ いいぜ、俺達も明日に備えてちょっと調整しうと思つていたところだ。なあドクロッグ」

ドクロッグはショウを見て、頷きを返す。

「へへ、楽しみですねえ……じゃ早速」

「あ？ ちょっとまで、あんたが準備してどうす……」

言い終わる前に、フードの男は動いていた。

慌てて臨戦態勢に入つたドクロッグの首根っこを無造作に掴み上げ、放り投げる。

体勢を崩しながらも着地したドクロッグに畳み掛けるように自身を浴びせ、洞窟の壁に叩きつけられたドクロッグは昏倒してしまつた。

「なつ……」

ショウは一瞬で起こつた出来事にあっけに取られていた。

「終わりですかい？なんだ、大したことないですねえ。闘技大会つてのもこの程度のレベルなのかな？これじゃあ砂漠にいた頃の方がよっぽど歯ごたえがある方々がいましたがねえ…」

「な、何言つてやがる！ただの模擬戦でここまでやるやつが…つていうか、お前なんなんだよ！なんで生身の人間が格闘ポケモン倒せんだよ！」

フードの男は一瞬動きを止めたが、しばらくすると笑い出した。

「はつはつは！こいつは可笑しいねえ。生身の人間が…ですかい」尚も笑い止まないフードの男に、ショウはイラついた素振りを見せる。

「ああ、すいませんねえ。すいませんすいません。いえね、兄さんがあまりに滑稽な事を言つからついね」

くつくつと、笑いながら続ける。

「兄さん、そもそもポケモンと人間つて何が違うんですかい？ポケモンだつて色んな種族がいるじゃないですか。空を飛べるヤツ。海に潜れるヤツ。土の中に住んでるヤツ。あんた達人間だけ特別な種なんですかねえ」

「な、何言つてんだ？」

ショウはフードの男の言つ事が理解できなかつた。ポケモンはポケモン。人間は人間ではないか。

あんた達人間。それではまるで、フードの男が人間ではないような口ぶりではないか。

「あんた達人間だけ特別なわけじゃあないんじやないかなあとアタシは思つんですがね…まあ、そんなのはどうでもいいや。あんた達のその感覚で言つなら、この場にいる”人間”は兄さんだけでさあ」フードの男一人はおもむろにその体に纏つていたものを脱ぎ捨てた。

「…お前…その姿…！」

フードを脱ぎ捨てたそこには、想像していたものとは違う生物の姿が存在していた。

ワルビアル。イッシュ地方に生息している、ワニの様な姿を持つポケモンだつた。姿があらわになると、獣猛そうな気性がより強く感じられた。

もう一体は頭部に鶏冠が逆立つており、体はドラゴンを彷彿とさせりを作りをしていた。こちらもイッシュに生息している、ズルズキンというポケモンだ。

ショウは動搖しながらも疑問を投げかけた。

「え……ポケモン？ だつて、人間の言葉を……」

動搖を隠し切れないショウに向かつて、ワルビアルは威圧するよう

に一步を踏み出す。

目と鼻の先まで接近したところでワルビアルは口を開いた。

「それで兄さん、一つお願いがあるんですけど、聞いちゃあくれませんかねえ」

- 前夜祭 - (後書き)

9月はゲームが豊作すぎて更新頻度がゴーヨゴーヨ

- 頭巾と砂ワニ 1 - (前書き)

登場人物

ワルビアル…ビアル
ズルズキン…

日は落ち、洞窟の中に濃い闇が訪れた。薄暗い洞窟の中は静まり返っていたが、やがて静寂をかき消すように声が聞こえてきた。

「ねえ頭巾の兄さん。アタシが砂漠にいた頃の話ですわ」

洞窟内に反響する声。

「…」

「相変わらず聞いてるんだか聞いてないんだかわかりませんねえ。夜が明けるまでまだ長いですよ? 少しくらい暇つぶしに付き合つてくれても…まあいいや」

勝手に続けますねと、おしゃべりな声は話し続ける。ズルズキンは洞窟の壁にもたれ掛かり、ビアルの言葉に返事をするでもなく目を閉じていた。

「ワルビアル一家つたら、砂漠じや知らないやつなんていませんでしたよ。争いとなれば尻馬に乗つかつて大暴れしてましたし、砂漠の勢力争いなんてのも性懲りもなく続けてました。今思えばくつだらないのにねえ」

「…知つてますよ……俺もそこにいた」

「おお、やつとしゃべつてくれましたねえ！」

ビアルが嬉しそうな声を上げた。

「そういうえばあの時は驚きましたよ。兄さんがいきなりアタシらに因縁ふつかけてきて…いや、ありやそういうのじゃないですかね。あの頃の砂漠で単独でアタシらにケンカ売るつなんて輩は、よっぽどのお馬鹿さんか世間知らずだったからねえ」

どつちも大して変わりませんかねえと、ビアルは笑う。

「少数派だったウチとしては兄さんもアタシらの一昧に加わってくれて助かりましたがね…ま、結局アタシらも井の中の蛙って事だつたんでしょうが」

「ビアルさん…」
あの頃が懐かしいですねえ…と、ビアルは少し感傷をこめて話し続けた。

20万アクセス超えました。

本当にありがとうございます（――）

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

砂漠。

砂。砂。

見渡す限りの砂でござります。

時には砂嵐が吹き荒れ、時には灼熱の太陽に焼かれる死の世界で生き残るために、少ない資源を手に入れなくてはなりません。分け合つか、奪い合つか。

生きるか死ぬかの世界で、前者を選択する者はいく稀でございました。

あの頃の砂漠はそこに生きる者達の間で争いが生まれ、修羅の時代を迎えておりました。

「おーいお前さん達、今日の戦果を報告して貰いたいねえ。さあ、一番上の兄さんから」

洞穴の中から暢気な声が聞こえてまいります。いかにも若々しい声がそれに應えます。

「マラカツチ共が拠点にしていたオアシスを奪つてやつたよ。2、3匹吹き飛ばしてやつたら蜘蛛の子散らすように逃げていきやがつた。貴重な水源をあいつらに使わせておくのはもったいねえからな」「ふむふむ、相変わらず上の兄さんいい仕事しますねえ。じゃあ次、真ん中の兄さん、おねがいしますねえ」

いかにも落ち着いた声がそれに應えます。

「私達の拠点の近辺で砂漠北部の最大勢力、ヒビダルマ達のものと思われる痕跡を発見しました。痕跡を隠そうとしている…やつ等、明らかに挑発しています」

ヒビダルマというのは、砂漠の北部を仕切っている最大勢力です。

勇猛であり獰猛であり凶猛な長として知られる猟々王を筆頭に、徐々に砂漠全域に勢力を拡大しようとしている模様でございました。

「ふむふむ、真ん中の兄さんはいい目を持つてますねえ。あいつらの動向には気をつけなくちゃいけませんね。最後に、一番下の妹さんはどうですかい？」

いかにも元気のいい声がそれに応えます。

「私は、これを見つけたの！」

「これは… イシズマイの殻ですかい？ ははっ、さすがですねえ」

一番下の妹は得意げに胸を張りました。

「田代のところ気をつけるのはヒヒダルマさん達の動きですかね…。兄さん達のおかげでアタシらは砂漠南部の最大勢力となることができました。本当に礼をいいますよ」

ビアルは改まって礼の言葉を告げました。

「何言ってんだよ。俺達はアンタについてるんだぜ、ビアルさん」「ははっ、そうまで言われちゃあかっこいいところ見せたくなつちまいますね。どれ、明日にでもヒヒダルマの連中のところ牽制にいってやりますかねえ」

ビアルが腕を振り回しながら言いました。

「砂鷲が直々に動くとなつては、あいつらも青くなるでしょうね」

真ん中のワルビルが誇らしげに言いました。

砂鷲というのは、かつて砂漠南部の数々の勢力を単独で殲滅してきましたビアルに付いた二つ名でした。砂鷲に狙われたら逃れる術は無いとまで言われ、南部を代表する畏怖の存在でござります。

「おお、オレも一緒に行つていいかい！？」

一番上のワルビアルが同行を申し出ました。

「そうですねえ。真ん中の兄さんの報告の感じだと本格的に事を構えるつて感じじゃなさそうですから、この近辺のやつ等の拠点にはそれほどの戦力はまだ常駐していないでしょうね。今後のためにも達磨さん達相手の実戦を経験しておぐのもいいかもしないですね

「よし、決まりだ！へへ、俺達もこつまでもジアルさんで守りれてばかりじやないつて見せてやるよー。」

「メグは？メグは？」

一番下のメグロゴが、楽しそうに聞きました。

「一番下の妹さんは、ここを守つていてくださいね。アタシ達の帰る家がなくなつたりしたら大変ですからねえ」

わかつた！と、メグは元気よく頷きました。

こいつは頼もしいですねえと、ビアルは笑つたものでした。

翌日、ワルビアル一家はヒヒダルマの拠点を見下ろす事のできる砂山の上に立つておりました。都合のいい事に砂嵐が吹き荒れしており、一家の姿を隠してくれているようじやります。。

「あれがヒヒダルマさん達の拠点ですか。見張りは…」じりじりには氣づいていないようですねえ。どれ、それじやあ早速

ビアルが鼻唄まじりに力をこめた右腕を地面に突き立てるとい地面が割れ、ヒヒダルマの拠点の一つが砂の中に沈んでゆきました。驚いたヒヒダルマ達がわらわらと拠点から出てまいります。

「出てきなすつたね。…それでは皆さん、達磨落としでも始めるとしましようかね」

ワルビアル一家は颶爽と砂山を滑り降り、動搖の渦中にいるヒヒダルマ達に飛び掛つてゆきました。

本編の少し前。ワルビアルとズルズキンがイッシュの砂漠にいた頃のお話です。

しかしワルビアル一家のネーミング安直すぎますね我ながら。

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ビアルはその手に掴んでいる真っ赤に染まつたヒヒダルマを無造作に放り投げると、仲間に問いかれます。

「真ん中の兄さん、ヒヒダルマ共の様子はどうです？」

ビアルは高台の上から戦場全体を見渡していたビルに尋ねました。「奴ら北へ逃げ帰つて行きます。恐らく本隊のところまで戻るつもりでしょう。この拠点は捨てたものと考えていいかと」

砂嵐の中でもその性能は衰えを見せないようになります。

ビルはその千里を見渡せる目で、状況を報告しました。

「真ん中の兄さんは相変わらずいい目を持つてますねえ。さて、今日のところはこんなもんですかねえ」

完全に不意を付かれたヒヒダルマ達はただただ動搖するばかり。慌てふためくヒヒダルマ達をワルビアル一家は次々と蹴散らし、ヒヒダルマ達の先遣隊を潰したのでした。

「ビアルさんはやつぱりすげえや。砂漠で一番強いんじゃねえの！」ビアル同様ヒヒダルマの殲滅に精を出していたアルも戻つてきました。

「ははっ、一番上の兄さんも随分力強くなつてきましたよ。この分なら砂漠を制圧するのも時間の問題じゃないですかねえ」

ビアルは豪快に笑了。

一仕事を終えて拠点への帰路についた一行でしたが、拠点が近付くにつれてビアルは何やら妙な気配を感じておりました。

”…何だか妙な感じがしますね…”

拠点の中から、留守を任せてきた一番下の妹であるメグ以外の気配がするのです。敵意のようなものは感じられませんでしたが、なんとも掴みがたい空気が漂つっていたのでした。

「…ダルマさん達の残党つてわけでもなさそりだし…兄さん達、少々気張つといてくださいね」

二人の兄弟達はまだ何も感じていないのか顔を見合わせておりましたが、ビアルの様子を見て浮き足立つていた気持ちを落ち着かせました。

「お前が砂鷗か？」

拠点に入ると同時に、洞窟の中に反響するよつに声が聞こえてまいりました。

聞き覚えの無い声で、じざこます。ビアル達は注意深く進むと、大きく円形に開けている拠点の最奥にメグと、もつ一つの影がじざいました。

ほう…と、ビアルは声を発しました。

「ズルズキン…ですか。おかしいですね…ズルズキンさん達はだいぶ前にこの砂漠から退場して頂いたはずですが…」

影の正体はズルズキンと呼ばれるポケモンでした。ビアルは以前ズルズキン一派と、砂漠南部の支配権を巡つて争つた事があつたのでした。

争いの結果につきましては、ここにこつして砂鷗が健在といつ事が、示しております事でしょう。

「俺と手合させ願いたい」

ズルズキンはこちらの返事を待たず、すでに戦闘態勢に入っているようです。

「ははっ、随分好戦的な兄さんですね。追い出された仲間のあだ討ちですかい？」

ズルズキンは無言で、攻撃的な気をビアルにぶつけておりました。

「ビアルさん、ここは俺が…わざわざ砂鷗が戦うまでもねえよ」

アルが口を挟みましたが、ビアルはそれを制しました。

「悪いが、アタシにやらせてくだけえ。ちょっと戦闘の後で気が立

つててね…」

もちろん、それもありました。しかしそれ以上に、兄弟達にこのズルズキンの相手をさせるのは少々荷が勝ちすぎていると感じたのでした。

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

目を覚ましたズルズキンは、砂で出来たベッドの上に寝かされていました。

「ここは…俺は…砂鷄と戦つて…」

「ああ、目が覚めましたか」

入り口からまさにその砂鷄の一昧がのつしのつしと入つてまいりました。思わず上半身を起こしたズルズキンでしたが、直後に激痛が走り体がまともに動きません。どうやら酷くやられたようだと、ズルズキンは今更ながらに認識しました。

「痛くしちまつてすみませんねえ。どつか動かないところありますか?」

「どういうつもりだ、砂鷄」

ワルビアル一家に目線を移し、ズルズキンは言いました。

「いや、申し訳ないねえ。あの状況じゃ手加減する要素が何一つなかつたですからね。この砂漠で見ず知らずの他人を信用するってのは中々難しいもん…いや、アタシ達もだまし討ちなんてもんは何度もやつてますよ。でもね、自分がやつてるからって、同じ事やられて許すかつて言われたらそういうモンでも無いでしょ。ま、何はともあれ別に兄さんが憎いわけじゃない。考えてみればアンタは、アタシ達が帰つてくるまで一番下の妹さんと一人つきりだったのに、人質を取るようなマネはしなかつたしねえ」

ズルズキンは黙つたまででした。

「ところでアンタ、なんでこんな事したんだ? 確かに中々腕は立つようですが、さすがにアタシら相手に敵うと思つてたわけじゃねえでしょ。いくらなんでも多勢に無勢、それがわからないほどアンタは弱くなかった。仲間達の復讐に燃え滾つてたつてトコですかい?」

「…俺には仲間はいない。ずっと一人で生きてきたんだ。俺の周り

には誰一人いなかつた

「だつたら尚更アタシ達に挑んでくる理由がわからないですねえ…まあ、いいか。アンタ、これからどうするんですかい？」

「…わからない」

「わからないって…アンタ生まればこの砂漠ですかい？」

「…」

「アンタなんにもわからないんですねえ…」

ビアルは少し考えるようにしてから、口を開きました。

「アンタ、もしよかつたらアタシ達の仲間になつちやくれないですかねえ？」

「…？」

「アタシ達の仲間になれば戦闘には困りませんぜ。もう少し頭数も欲しいと思ってたところだつたし、アンタだつたら申し分ない強さだ。どうでしょ、一丁アタシラに力を貸してくれないですかねえ」

「ビ、ビアルさん…本気ですか！？」

ビルが驚いたように口を開きました。

「ええええ本気ですとも。考へてもみなさいな、これほど使い手に他の勢力のところに付かれちゃアタシラとしても面倒だし、もし仲間になつてくれるつてんなら心強いでしょう。それにヒビダルマ達を制圧するには正直頭数がさすがに足りないと思いませんか？」

「私は反対です！そいつは何を考えてるかわからない。私達を襲つた理由だつてまともに話そうとしないじゃないですか！」

ビルが声を荒げました。

「まあまあ、落ち着いてくださいよ真ん中の兄さん。理由は聞いたじゃないですか、单なる腕試しだつて」

「仮にそれを信じたとしましょ。だけど、そいつが私達と一緒に行動する理由にはならない！私達は四人でやつてきたじゃないですか」

ビルはあくまで食い下がります。

「そつは言つてもねえ、これからはもつともつと厳しい戦いになつ

てくると思いますよ。ヒヒダルマさん達もこれから本腰を入れてくるだろうしねえ」「ですが…」

ビルは俯いてしまいました。ビアルの言つ事ももつともであると感じていたのでした。

「オレは賛成だぜ」

一番上のアルが言いました。

「さつきの一人の戦いを見る限り、俺の力じゃまだまだ至らない部分がある…悔しいけどよ」

「それを自分で認められただけでも大したモンです。アタシが保証します、兄さんはまだまだ強くなれますよ。……一番下の妹さんはどうです？」

メグは少しの間首をかしげて考えるようにおりました。

「メグは…わからないけど…でも、頭巾さんがいてくれるおかげで兄さん達やビアルさんの負担が軽くなるのなら、メグは頭巾さんにしてほしい！」

「優しい下の妹さんらしいですね。…真ん中の兄さん、どうでしょうここには一つアタシの顔を立てちゃあくれませんか。頭巾の兄さんの行動についてはアタシが全責任を持ちます。何か問題を起こそうとしたらその時は真ん中の兄さんの言つとおりにしますから…」

真ん中のワルビルは納得が出来ない様子でしたが、最終的には首を縊に振りました。ズルズキンを信用したわけでは有りませんでしたが、つまりそれほどの影響力をビアルは持っていたのでした。

「そういうわけで、後はアンタ次第だ…悪い話じゃないと思いますぜ。生き物つてのは何かしら目的を持つべきだ。どんな事にせよ、ね。もしアンタがまだアタシに挑みたいってんならそうすりやいい。まだまだアンタに負ける気はしませんがね。アンタがウチの一家として大暴れしてくれれば、アタシらも随分楽になる。アンタもレベルアップしてより強くなれる。お互い笑顔がこぼれるってわけですズルズキンはしばらくの間あっけに取られたようにビアルを見てい

ましたが、やがてため息をつき、布団に横たわりました。
「決ましたようですね！よろしくお願ひしますねえ、頭巾の兄さん」
ビアルは満足そうに笑つたのでした。

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

「くそつ！勝てねえ！」

灼熱の太陽が砂の大地を照らしています。

焼けるような地面を叩いて悔しがっているのは一番上のアルです。

「お前は力は強いが猪突猛進過ぎる。もう少し緩急をつけたほうが攻めの幅も広がる」

「……今日はやめだつ！」

肩をいからせて、一番上のワルビアルは行ってしまいました。ズルズキンがそれを見送っていると、ビアルが入れ替わるように拠点から出てきて言いました。

「『苦労さん。どうですかい、一番上の兄さんは？』

「…攻め手に単調なところがあるけれど、中々強い。砂漠のレベルはわからないけど、経験を積めば飛躍的に強くなると思う」

「そうですか！いやー親じやないから親バカつてのも変ですがね、あの子達は中々見所があると思ってたんですよ。そうですかそうですか」

それを聞いて、ビアルは嬉しそうに頷いておりました。

「そんな事より砂鷄、今日も頼む」

「そんな事つて…せつかく人がいい気分だつたのに。しかし頭巾の兄さんも懲りないですねえ毎日毎日…」

ぶつぶつと文句を呟きながらも、ビアルは戦闘体制にシフトいたしました。

それを見たズルズキンの眼光も、少しばかり鋭さを増します。

「どれ、じゃあ始めましょうか。どうした、攻めてこないんですかい？」

「…今日こそ」

ズルズキンが大地を蹴つて、ビアルに向かって距離を詰めます。決して素早いとは言えませんでしたが、ズルズキンの動きは独特的の捉

え辛さがありました。

「おっ…とど…相変わらずどうえどこの無い動きですねえ」
ようめきながらビアルはそれをかわすと、大振りの一撃を見舞いました。ズルズキンもそれをひらりとかわします。

間髪いれず、ズルズキンはビアルめがけて距離をつめてきました。
「確かに兄さんの動きは捉え辛いんですけどねえ、それだけじゃアタシに勝てないんですよ」

ビアルは微動だにしません。動きを止めた大柄なその姿はまるで的のようです。ズルズキンのとび膝蹴りが、ビアルに直撃しました。

「…頭巾の兄さんの攻撃は、ちょっと軽いんですよねえ。だから、アタシみたいな頑丈が取り得みたいなヤツにとっちゃ、一撃貰う覚悟でいれば」

ビアルはズルズキンの頭を驚づかみにして地面に叩きつけて動きを封じると、その強靭な顎を開いてズルズキンの喉笛数センチ手前の虚空を食いちぎりました。

「ほらね、相手に致命傷を与える事が出来るんですよ」

ビアルは倒れているズルズキンに手を差し伸べましたが、ズルズキンはそれを拒みました。

「ま、アタシと頭巾の兄さんとじゃあまだまだ実戦経験に差があるつてだけかもしれませんがね。さて今日の戦いも済んだ事だし、キリキリ働いてくださいねえ。働かざるもの食うべからず、つてね。さあ、一番下の妹さんが兄さんを待つてますよ」

「…」

ズルズキンは汚れを払うと、いつの間にか拠点の入り口でこちらをみていた一番下のメグの下へ向かいました。

「頭巾のお兄ちゃん、お疲れ様！」

「…ああ」

「ビアルさん強いでしょー。ビアルさんはね、スナワニなのー！」
メグは”砂鰐”という言葉の持つ意味を解つていないうちでしたが、誇らしそうに言いました。

「…知つていい。だからここにきたんだ」

自分の身一つで生きてきたズルズキンにとつて、戦つてゐるその時
こそが唯一生きてゐる事を実感できる瞬間なのでした。

「じゃあ行こう、そろそろお水が無くなっちゃうから

…」

ズルズキンは無言で歩き出しました。メグはそんなズルズキンの後
ろを嬉しそうに付いて行くのでした。

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

ズルズキンとメグの一人はしばらく砂漠を歩き、つい先日アルが制圧したオアシスへと向かいました。

オアシスはまるで生命力に満ちあふれているようです。

一人はオアシスのほとりまで進むと、持ってきた桶に早速水を汲みました。

「よし、これだけあればしばらくもつね！」

桶に汲まれた澄んだ水を見て、メグが嬉しそうに言います。

「… そうだな。用事も済んだことだし、戻るぞ」

ズルズキンがぶつきらぼつにいいました。

「少し休憩していこりつよ。メグ疲れちゃった」

ズルズキンはため息をつくと、小むく密集して生えている背の低い草の上に寝転がりました。

一步外に出れば荒れ果てた砂漠が広がっているというのに、オアシスには穏やかな時間が流れています。

ズルズキンはぼんやりと、砂漠に流れ着くまでの事を思い返していました。

「ねえ、頭巾のお兄ちゃんはどうしてビアルさんと毎日戦つてるの？」

メグが唐突に質問を投げかけきました。

「奴が強いからだ」

ズルズキンは簡潔に答えます。

「ビアルさん強いよねえ。メグ達のお父さんよりも強いかも！」

「… 砂鷄はお前達の父親じやないのか？」

ズルズキンはかねてから疑問に思つていたことを問いかかけました。

ワルビアル一家の兄妹達は砂鷄の事を”ビアルさん”と呼び、対してビアルは兄妹達のことをわざわざ回りくどい呼び方で呼んでいました。血の繋がつたもの同士の間でそれがいかにも不自然であると

いう事は、さすがにズルズキンにも感じることができました。

「ううん、違うよ。お父さんは随分前にいなくなっちゃったの。それからね、ビアルさんが来ててくれたのー！」

メグの回答はいまひとつ要領を得ませんでしたが疑問自体は解消したので、ズルズキンはそれ以上聞き返しませんでした。争い合いが蔓延しているこの砂漠で何も告げずに姿を消したというはつまり、決して歓迎すべき事態とは言いがたいのでした。

「…そろそろいいぞ。田が暮れる前に拠点に帰ろう」

「うんっ！」

立ち上がったメグが、ちらちらとオアシスを気にしている事にズルズキンは気が付きました。

「…？どうした？」

「ううん、なんでもない…」

ズルズキンがメグの目線を追うと、オアシスの底で何が光を反射しているのを確認できました。

「気になるのか？」

「別に！暗くなっちゃう前に帰ろうっ！」

明らかに意志に反する事を言つているメグに、ズルズキンはため息をつきました。

「…ちょっと待つてる」

「え……あつ、頭巾のお兄ちゃん！」

そういう残すと、ズルズキンはオアシスに飛び込みました。波紋が湖に広がります。

オアシスは思つたより深さがありました。ズルズキンは光つたあたりを目指して潜水を開始しました。

ズルズキンは自らの行動に不思議な感覚を覚えていました。戦い、戦い、戦う。止まる時は生命の終わり。自らの事ですらその程度にしか考えたことがなかつたズルズキンにとって、他者のために何かをするというのは始めてのことだったのです。初めて芽生えたこの思いを何と形容すべきなのかわからず戸惑いさえ覚えるズル

ズキンでしたが、それが嫌な気持ちでないことだけは彼にも解つておりました。

ぼんやりと考え方をしながら水をかけているうちに、ズルズキンはターゲットにたどり着きました。

「これは…イシズマイの殻か?…」 そういえばメグの奴、これをを集めているとか言つていたな

光を反射していたのは、小さなイシズマイの抜け殻でした。ズルズキンはそれを拾うと、岸をめがけて再び泳ぎ始めました。

「…や…て!返…て!」

岸が近付いてくるにつれ、何やらメグの緊張した声が聞こえてまいりました。

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

「返して！それはメグ達のお水なの！」
ズルズキンがオアシスから上ると、メグを取り囲むいくつかの影
がありました。

砂漠北部の雄、ヒヒダルマの群れです。

「まことに…」ズルズキンは思いました。このオアシスは完全にワルビアル一家の勢力下にあるのです。こんなところまでヒヒダルマ達が足を伸ばしているとは思ってもいませんでした。

「ほう、ズルズキンとは珍しい。貴様らの一族はこの砂漠から尻尾を巻いて逃げ出したと聞いていたがな」
オアシスから上がったズルズキンを見て、ヒヒダルマの一人が早速挑発してきます。

「貴様らの長、竜戦士も先の戦いで砂鷄に駆逐されたそうではないか」

「砂鷄」ときに遅れを取る種族だ。そもそもこの砂漠で生き延びられるはずが無い」

獰猛な鼻息と共に、ヒヒダルマ達は下品に笑いました。

ズルズキンは静かに立ち、ヒヒダルマ達の挑発をその身に受けています。

「…もういいか。水を持つて帰らなければいけないんだ」

この状況で戦闘を始めるのは得策ではありません。自らが傷つく事に対して抵抗があるズルズキンではありませんでしたが、メグが巻き込まれる事を考えると、このまま乱戦になるわけにはいかないのでした。

「はっ、腰抜けが。この周辺はまもなく我々ヒヒダルマとワルビアル共の戦闘区域になるだろう。せいぜい情けなく生き延びるがいい」
ヒヒダルマ達はメグから奪った桶を地面に叩きつけました。桶が割れ、地面に徐々に染みを作ります。

「頭巾のお兄ちゃんを悪く言わないでっ！あんた達なんかビアルさんにはやられちゃえればいいんだ！」

「メグっ！黙れ！」

それまで静かだったズルズキンの言葉に、メグはハツと我に返りました。

「ビアル…？」

その名前を聞いて、去ろうとしていたヒビダルマ達が足を止めます。
「砂鷄の事か？貴様まさか、ワルビアル一家のメグ口「」か」
ヒビダルマ達は目配せしましたが、すぐに意見が一致したようでした。

「お前、俺達と一緒に来い」

ヒビダルマの一人がメグの腕を掴みました。

「えっ」

「砂鷄をおびき出すエサに使える。さすがの砂鷄も自分の娘が人質に取られたら出てこざるをえんだわ！」

「び、ビアルさんはメグのお父さんじや…」

「ガタガタいのな。大人しく付いてきてもらおう」

強引にメグの手を引いたヒビダルマの体が吹き飛び、オアシスに大きな水しぶきがあがりました。

「手を離せ、醜い達磨ども。お前ら如きが砂鷄と戦う資格があるかどうか、俺が選定してやる」

突然の出来事に、ヒビダルマ達の顔色がみるみる真っ赤に染まっていきます。

「調子に乗るな、ズルズキン風情が！」

飛び掛つてくるヒビダルマを交わし、ズルズキンは強烈な蹴りを叩き込みます。ヒビダルマは小さくうめき声を漏らし、砂煙を舞い上げながら吹き飛びました。

「こいつ…少しばらうよ」

ヒビダルマ達は改めてズルズキンの周りを囲みます。

「メグ、先に帰つていろ」

「で、でも……」

「この程度の奴らに引けは取らん。お前も知っているだろ？、俺は砂鰐と毎日戦つてゐる」

「わ、わかった……すぐアル兄ちゃん達を呼んでくるからー！」

戸惑っていたようでしたが、メグは大急ぎで走り出しました。

「いいのか？」

「構わん。砂鰐どもの居場所ならこのズルズキンも知つていそうだしな」

先ほどズルズキンに吹き飛ばされたヒビダルマ達も戻つてしまりました。

「あまり時間はかけていられん、全員でかかるぞ。こいつらの準備が整う前に砂鰐に登場されても面倒だからな」

ズルズキンはヒビダルマ達の群れに向かい合いました。

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

所詮は多勢に無勢です。

奮戦していたズルズキンですが、次第に数に押され、動きを封じられていきました。

炎を受ける度に皮膚を焼かれ、攻撃を加えられる度に鮮血が飛び散り、骨も何箇所か折れているようです。それでもヒヒダルマ達は攻撃の手を緩めませんでした。

”あいつは無事に逃げられたか…”

ついには崩れ落ち、最早抵抗する事ができなくなってしまったズルズキンが思うことは、自らのことではなく、小さなメグの事でした。そんな自分がなんだか可笑しくて、地面に大の字になっていたズルズキンは小さく笑いました。

「もう終わりか、ズルズキン」

「そう言つてやるな。そもそもズルズキン風情、我々の相手ではない

”…からだが動かないな…ここまでかい”

「頭巾のお兄ちゃん！」

ズルズキンの意識が遠のいていったまさにその時、場を切裂くような大きな声が響き渡りました。

サツサツサツと、砂の上を走る音が聞こえ、ズルズキンの耳元で止まりました。それは聞きなれたメグの足音でした。

ぼんやりとしている視界の中に、涙を浮かべたメグの姿が飛び込んできました。

「おまえ…なんで…戻つて…」

「アル兄ちゃん達、まだ帰つてきていなかつたの！だから…だから

…」

「だからって戻つてくる奴が…」

「ほう、わざわざ戻つてきてくれるとは。これは手間が省けた、礼

を言つぞ。ズルズキンは用なしだ。奴らへの見せしめに、再起不能にしてやれ」

ヒヒダルマが冷酷に言い放ちました。

それを皮切りに、ヒヒダルマ達がズルズキンを肩を掴み、強引に立てて拘束します。

「頭巾のお兄ちゃん！」

「お前はこっちだ。来い」

「くそつ……」

メグを連れて行かせるわけにはいかない……！

ズルズキンは強く思いました。それはとても不思議な気持ちでした。強く思う、という事自体、今まで感じたことの無い感覚でした。自のことですら必死になることがなかつたズルズキンが今、全くの他人であるメグの事を必死で案じていたのでした。

と同時に、何か力がわきあがつてくるのを感じました。

腹の底から力の奔流のようなものが巻き起こり、全身を駆け巡つていくのがわかります。

”これは……”

ズルズキンはためらいなく、その力を解放しました。

「な、なんだ！？」

「これは……竜の気？ばかな！」

ズルズキンの周囲に、力が竜巻のように巻き上がりました。それはまるで、竜が翼を広げたようです。ズルズキンは強引に、両脇を拘束していたヒヒダルマを振り払いました。

「こ、このつ……！」

襲い掛かってくるヒヒダルマの動きがまるでスローモーションのように見えます。

「……」

ズルズキンは再び、ヒヒダルマ達の群れと向かい合いました。

- 頭巾と砂ワニ 8 - (後書き)

ズルズキン は 竜の舞 をおぼえた!

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

灼熱の太陽が沈み、砂漠に夜が来ます。大きな月が出ていて、静かな夜でした。

「これは…心配して来て見りやあ…どういうことですかい…」オアシスのいたるところに、真っ赤に染まつたヒビダルマ達が転がっていました。

「頭巾の兄さん！一番下の妹さん！大丈夫ですか！」

ビアルの声がオアシスに響き渡りました。

「あ、ビアルさんの声だ！心配して来てくれたんだー・ビアルさん、こつちー！」

声を聞きつけたメグが、大きな声でビアルを呼びます。

「頭巾の兄さん！こいつは一体…」

「何匹か逃がしてしまつたが…大丈夫だ、とりあえずは」ズルズキンは地面に寝転がつたまま、苦しそうに言います。

「これ…兄さん一人でやつたんですか…？」

「肩を貸してくれ…早く…帰つて休みたい…」

「…ははっ、お安い御用でさあ…」

「生き物つてのは何かしら目的を持つべきだ」

「え、なんか言いましたか？」

拠点への帰路、ビアルの背中で揺られるズルズキンが呟きました。

「あんたに仲間に誘われたときに言われた言葉だ。あの時は少しも理解できなかつたが…今ならなんとなくわかる気がする」

「はつは、そいつはよかつた。まあ、アタシの言う事なんぞ話半分で聞いてりやあいいんですよ。どうせ大したこと言つてやしないんですから」

おどけた素振りで応えるビアルでしたが、ズルズキンはその言葉を心の中で改めてかみ締めました。

降り注ぐ月光が、ビアル達を優しく照らしていました。

月の光は誰しもに等しく降り注ぎます。砂漠の入り口に立っている一つの影も、その例外ではありませんでした。

「砂漠か…俺は初めて訪れる」

「俺もだ。聞いていた通り、闘争の気が満ちている。ふふ、気が昂ぶる」

まるで騎士のような外見をした一方が言います。

「…ちゃんと任務を優先しろ」

忍者のような外見をした一方がそれをたしなめました。

「わかっている。ターゲットは竜戦士、狒々王、そして砂鷲だつたか。風の噂では俺もその通り名は聞いている。楽しみだ」

「情報によると、竜戦士はすでに砂漠を去つたらしいがな」「ではターゲットは後者というわけだな。行くぞ、アギイ」

「…」

早速砂漠に足を踏み入れた相棒の騎士を見て、アギイと呼ばれた方も無言でそれに続くのでした。

- 頭巾と砂ワニ 9 - (後書き)

アギイさんとシユバさん再登場。

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

「す」「かつたの！頭巾のお兄ちゃんの周りになんだか竜みたいなのがぐるぐる一つて回つて！す」「かつたの！」

メグは興奮した様子で、ヒヒダルマ達との闘争の一部始終を話しました。

「ふむ…そりやあ竜の力ですねえ。ズルズキンつて一族は竜の血を引いているらしいんでさあ。以前砂漠にいたズルズキン達の中にも、竜の力を使ってくる奴らがいましたよ。みんながみんな力を使えるわけじやなさそうでしたが、頭巾の兄さんも竜の血を色濃く引いてるのかもれませんねえ」

一同はベッドに寝ているズルズキンに目をやりました。一通りの治療が済んだズルズキンは、静かな寝息を立てています。

「しかし、帰つてくるなりぶつ倒れるからびびつたぜ。…すげえ怪我だつたしよお」

「竜の力は身体能力の飛躍的上昇だと聞いたことがあります。体力が回復するわけではなさそうですし、それに彼もまだ上手く力を使いいこなせていないんじやないですかね」

ビルが冷静に分析しました。

「それにしても…ヒヒダルマの奴ら、こんなとこり今まで姿を見せやがるとは。完全に俺達を潰す氣で来てやがるな」

いつも荒々しいアルが静かに言います。

「そうですね…あのオアシスはここからそう遠く離れていない。この拠点もやつらに見つかってしまう可能性がありますね」

拠点の中に、なんとも言えない空気が漂いました。

さつきまで元気にズルズキンの武勇伝を語っていたメグも、その空気を感じたのか大人しくなつてしましました。

「ま、今日のところは休みましょう。今後の事は、とりあえずアタシが考えておきますよ」

その空気を払拭するようにビアルは言つと、ぶらぶらと拠点の外に出ました。砂漠を月明かりが照らしています。夜は更けていました。太陽と入れ替わるまで、そう時間はかかるないでしょ。

「…アタシもいい加減…前に進んだほうがいいんでしょうがねえ…」

ため息混じりにビアルは呟きました。

ヒビダルマ達との間で本格的に抗争が始まれば、殲滅戦になる事は目に見えています。

もちろん負けるつもりはありませんでしたが、簡単に勝てる相手とは言えないのです。

「…誰です！？」

突然拠点の周囲に気配を感じました。ビアルは周囲を探るよつに警戒のレベルを高めます。

しばらく周囲を探つていたビアルでしたが、一瞬現れた気配はすぐに消えてしましました。警戒しつつ気配のした方へ注意深く近付いてみると、そこに何かが置かれていることに気が付きました。手にとつて見ると平べつたい石板のようなものであり、何かメッセージが刻まれています。

「？…こいつは…！」

見るとも無しに石板を見たビアルは、目を見開きました。

しばらくするとビアルはクックと静かに笑い、手に持つていた石板を握りつぶしました。

「…まだまだ抜けられそうにありませんねえ。いや、或いは終わりになるのかな」

そう言つて笑うビアルの目には、普段浮かべる事の無い光が宿っていました。

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。

アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。

ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。

メグ…一番下の妹メグロコ。元気。

ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

一夜が明け、ワルビアル一家は食卓を囲んでおりました。

最もズルズキンはベッドで寝たままでしたし、メグはズルズキンの看病で付き添つていましたので、若干寂しい食卓ではありました。

「じゃあ一番上の兄さんは近辺の見回りをお願いします。もしヒヒダルマ共を見つけても、決して無茶な事はしないでくださいね」

朝食をかきこみながら、ビアルが言います。

「ああ、大丈夫。…頭巾のヤツも満身創痍だし、今奴らとやり合つには少々分が悪いって事ぐらいわかるさ」

普段好戦的なアルでしたが、冷静さは失つていないうなりました。

「ありがとうございます。決して弱気になつてゐるわけじゃありませんが、わざわざ万全じやない状態でこちらから仕掛ける事もないですからねえ」

昨日のオアシスでの小さな紛争の結果を受けたヒヒダルマ達がどのような動きに出るのかは微妙なところではありました。少なくともこのまま大人しく引き下がるような者達ではないことだけは確実でした。

「真ん中の兄さんは、周囲を警戒していくください。もしこの拠点が発見されたら大急ぎでここを移動しなけりやなりませんからね…。頭巾の兄さんが動けない今、ここでの防衛は兄さんの任が頼りです」

「わかりました。ではもし何かあつたら我々はここを引き払います。その時は、例の場所に合図を残しておるので、以前使つていた砂漠南部の拠点で落ち合いましょう」

「はは、南に残してきた古巣が役に立つかもしそれませんねえ。頭巾の兄さんとメグを連れての移動はちと骨が折れるかもしれませんが

…」

「大丈夫です、任せてください。それで、ビアルさんは…」

「アタシはちと野暮用がありましてねえ。ま、心配しないでください

い。夕刻までには必ず帰りますんでねえ」

昨夜、ビアルの元に届けられた石板には、ただ一言刻まれておりました。

”遺跡で待つ”

砂漠で遺跡といえば、指示示す場所はひとつしか思い浮かびませんでした。

差出人の名前はありませんでしたがしかし、差出人は拠点の場所を把握している事になります。このまま放置しておく事はできませんでした。

「じゃあ、俺は行くぜ」

食事を終えたアルとビアルは拠点を出て、それぞれの方向へ出発していきました。

いつもと同じように太陽が昇り、いつもと同じように砂漠を灼熱の世界に変えていきます。

しかし、この日がワルビアル一家にとって大きな転機となる日である事を、この時はまだ誰も知らないのでした。

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。
アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。
ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。
メグ…一番下の妹メグロコ。元気。
ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

ヒビダルマ一派

砂漠北部を支配している。ワルビアル一家と抗争中。狒々王を長としている。

外部勢力

アギイ(アギルダー)…ある目的のために砂漠にやってきた。諜報活動に長ける。冷静。

「…アンタに呼び出されたとはねえ…めつたに前線に出でへる」と
のないアンタがどういう風の吹き回しですかい」
ビアルは静かに言いました。

「久しいな、砂鷗」

ただ一人遺跡に赴いたビアルを待ち受けっていた真紅の姿。
大きな体、他の個体にはない立派な鬚。ヒヒダルマ達の長、狒々王
でした。

「幸か不幸かそれなりに長い付き合いだが、直接相対するのは久し
ぶりになるのかな…そういえば、お前の仲間は元気か?ん?」

「アンタがその口で言うんじゃねえ…」

ビアルは拳を握り締めます。

「まあ、そう熱くなるな。今日は別にお前と戦いに来たわけではな
い」

「アンタがそうでもアタシは違つぜ。付き合つてもらうしかないね
え」

「未だにワシを憎むか

「憎い」

間髪いれずにビアルは答えます。

「テメエらがあいつにした事を忘れたとは言わせねえ。あんな手使
われなきや、あいつがテメエら如きに後れを取るはずがねえんだ…
ああ、アンタが憎いねえ。八つに裂いて…いや、そんなもんじゃ足
りねえ。十六、三十一、六十四…ああもう幾何級数的に増大するア
タシの憎しみ。アンタのその器量でどうか受け止めてくださいよ」
ビアルが残忍な笑みを浮かべました。

「ふん、お前ともあるう者がいつまでも過去の存在にしがみ付くと
はな。しかし泣く子も黙る砂鷗が、まさか泣く子の面倒を見るよう
になるとは誰が予想できたか」

「… わすがあいつの子供達ですよ、メキメキ腕を上げてきてる。アントアのところの雑兵程度、軽く蹴散らしますぜ？」

「ワシは、砂漠を出る」

突然流れを切る狒々王の言葉に、ビアルは虚を疲れたように首をかしげました。

「あん？」

「実は先日、外の組織からスカウトを受けてな、より広い世界でワシの力を行使してみたいと思ったのだ」

「はつ、何言つてんだかよくわからねえが、だつたら尚更今のうちにアンタをぶっ殺しておかなけりやいけませんねえ。何度も、何度も、苦痛を与えてやらなければいけませんねえ」

「お前がどうしてもというならここで戦うのも吝かではないがしかし、お前の大変な家族は今頃大丈夫かな」

狒々王がわざとらしく言います。

「あ？ そいつは… どういう意味ですかい？」

「ワシのところにスカウトに来た奴らだが、砂鷗の名にも関心を持つてゐるようでな。次は砂鷗のところに行くと言つていたので、貴様らの活動区域だけ伝えておいたぞ。かなりの手練だつたが、まあ遭遇したところで砂鷗殿ご自慢のワルビアル一家ともなれば問題ないのだろうな」

狒々王がクックと笑います。

「… てめえ、知つててアタシを呼び出したんですかい！」

「人聞きの悪い事を言わないでくれ。ワシは旧知のお前に砂漠からの旅立ちを一言伝えたかつただけだよ。黙つて出て行つてはお前が寂しがると思ってなあ」

狒々王がにんまりと口角をあげます。

「くそつ…！」

ビアルは躊躇せず、狒々王に背を向けて走り出しました。

「…あれが砂鷗か」

ビアルが去った後、遺跡に残された狒々王に近付く声がありました。
「おお、アギイ殿か。ちゃんと手紙を届けてくれたようだな。：しかし、ワシらが中々見つけられなかつた奴らの拠点をこうも簡単に発見してしまうとは」

「単に長けているだけだ。俺はそれしかできんぞ」

「謙遜を。して、砂鷗はどうだ?」

「彼なら資格充分だと思う」

シユバがどう選定するか知らんがな、と小さく呟きました。

「しかし、凄まじい殺氣だつた。一体どれだけの事を彼にしたのだ、

狒々王よ

「なあに、『ぐぐぐ』常識的な事しかしておらんよ…あくまで砂漠での常識だがね。さて、ワシも戻るとするか

「…」

狒々王は戻り、アギイも遺跡を去りました。

動くものがいなくなつた遺跡には、ただただ砂嵐が吹き荒れておりました。

あと2・3話で過去話終わる予定ですたぶん汗

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。
アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。
ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。
メグ…一番下の妹メグロコ。元気。
ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

ヒビダルマ一派

砂漠北部を支配している。ワルビアル一家と抗争中。狒々王を長としている。

外部勢力

アギイ（アギルダー）…ある目的のために砂漠にやってきた。諜報活動に長ける。冷静。シユバの相棒。
シユバ（シユバルゴ）…ある目的のために砂漠にやってきた。戦闘担当。強い。アギイの相棒。

「貴様、砂鷄か？」

砂漠北部との境界周辺を偵察していたアルは、突然声をかけられ驚いて振り返りました。

「あ？」

見慣れぬ者が立っています。まるで騎士の様な出で立ちをして、異様な雰囲気を放っていました。纏う空気はさながら刃のようです。そんな存在に気が付く事ができずこの距離まで近づけてしまつたという事実は、アルの警戒レベルを大いに引き上げました。

「なんだ、あんた」

「貴様、砂鷄…………ではないな」

騎士はアルを一瞥すると、興味を無くしたかの様にそのままアルの横を通り過ぎていきます。

「おいおいおい、ちょっと待てよ。見ねえ顔だけど、新参か？それともジアルさんの知り合いか？」

思わず肩を掴んだアルを、騎士はゆっくりと振り返ります。

「…砂鷄を知つてゐるのか？」

アルは内心失敗したと思いましたが、すぐに言葉を続けます。

「確かに俺は砂鷄を知つてゐるぜ。だが見ず知らずのヤツを案内するほど俺も無用心じゃねえ。お前は一体…うおつ！」

騎士はその槍のように研ぎ澄ませた腕を振り、アルの手を振りほどきました。

「俺はシユバという。砂鷄を探している。ヤツの元へ案内してくれ」

思いがけない素早い動きに、アルは大きく後退して身構えました。

「…と言つて素直に案内するように見えるか？」

アルは腕を「ゴキゴキ」とならします。

「やめておけと言つたが、手つ取り早くして」」からも助か

る

シユバと名乗つた騎士はゆっくりと構え、その大槍の照準をアルに合わせます。

「獲物は…見るからに立派なあの槍か。威力はありそうだが、小回りは効かなさそうだな…」

アルは相手の獲物を見定めると、すぐに騎士に向かつて襲い掛かりました。

両者の距離が縮まるや、騎士の一撃が放たれました。

「…っ！」

迫り来る槍を皮一枚で交わし、アルは騎士の頭部に拳をたたきつけました。

シユバは一撃を受けつつもすぐに槍を構え直し、再び標的に向かつて引き絞ります。

「あぶねえっ！」

「この程度か？これでは俺に膝をつかすこともできんぞ」

「タフな野郎だな…こいつはどうだ！」

アルは拳を突き立て、地面を揺らしました。衝撃波がシユバを目指して砂漠を走ります。

「随分と大雑把な攻撃だな…俺も人のことは言えぬが」

シユバは迫り来る地割れを最小限の動作で交わしました。

「…む、どこへ…」

シユバが視線を上げると、アルの姿は消えていました。

「目くらましというわけか…」

と、シユバの真下から突如両腕が生え、シユバを引きずり倒します。砂煙が舞とともにアルが姿を現し、倒れた騎士に馬乗りになりました。

「油断したな。砂漠じゃ…」つい戦闘方法もあるんだぜ…おらつ…」アルは馬乗りになつたまま、大地を割るそのエネルギーをシユバに直接叩き込みました。

「もう一発！」

衝撃が走り、周囲の砂が舞い上がります。

「はっはー。どうしたおらー！」

突然アルは右腕に鈍い痛みを感じました。

シユバの槍がアルの右肩を削っていたのです。

「つ……！お前……！」

思わず飛びのいたアルに、シユバはゆっくりと立ち上がります。

「ばかな……効いてねえだと……」

「いや、正直かなり効いているようだ……驚いたぞ」

アルは急に寒気を感じました。田の前の騎士の存在が、より一層プレッシャーを増したような感覚にとらわれたのです。

「少し強く行くぞ。我が槍しのいで見せる、砂漠の戦士」

- 頭巾と砂ワニ 13 - (後書き)

最近格闘統一パで潜つてます。

ルカリオ@スカーフ、ズルズキン@オボン、ゴウカザル@櫻、ヘラ
クロス@オツカ、カイリキー@ジユエル、ローブシン@バコウ
結構強い。超靈にめっちゃ弱いです。w
カイリキーとエルレイド入れ替えてみようかな…

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。
アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。
ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。
メグ…一番下の妹メグロコ。元気。
ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

ヒヒダルマ一派

砂漠北部を支配している。ワルビアル一家と抗争中。狒々王を長としている。

外部勢力

アギイ（アギルダー）…ある目的のために砂漠にやってきた。諜報活動に長ける。冷静。シユバの相棒。
シユバ（シユバルゴ）…ある目的のために砂漠にやってきた。戦闘担当。強い。アギイの相棒。

「父は、死にました」

拠点から周囲を見渡しつつ、ビルは淡々と言いました。
ズルズキンは無言で食事を取っていましたが、耳を傾けているよう
でした。

「父は強かつた。私たち兄妹はまだ幼かつたんですが、そんな父を
誇りに思っていたのです」

父親の事を思い出しているのか、ビルは少し懐かしそうな表情を浮
かべています。

「そんな父が、或る日突然姿を消しました。入れ替わるようにビア
ルさんが来てくれたんです。ビアルさんは、以前父に紹介された事
がありました。親友だと。当時の私たちは自らの力で生きていく事
など到底できませんでしたから、ビアルさんがいなければ私たちは
どうあつという間に駆逐されてしまつたでしょう。ビアルさんは父の
消息について何も語りませんでしたが、私もアルも、幼いながら察
する事ができました。父はもう帰つてこないんだと」
ビルは感情を込めずに続けます。意図的にそうしているようにも感
じました。

「ビアルさんは強かつた。当時私たちの住んでいた区域で幅を利か
せていたズルズキン達を打ち破つてから、その名は一層轟いていき
ました。いつの間にやら私たちは、少數ながら砂漠の一大勢力にな
ることができた」

「…俺にそんな話を聞かせるなんて、どういう風の吹き回しだ」

「別に、ただの気まぐれです…少し外を見ていてくれますか?私も
昼食を取つて来ます」

ビルはそう言つと、拠点の中に入つていきました。

「何者ですか！」

程なくして、ビルの緊迫した声が拠点の中から聞こえました。不審に思ったズルズキンは、足早に拠点の中へと戻ります。普段一家が食事をするスペースに見慣れぬ訪問者が佇んでおり、ビルと向かい合つていました。

「ばかな… いつの間に拠点の中に…」

ズルズキンはその姿に見覚えはありませんでした。ビルの様子を見る限り、どうやらそれは同じのようです。

「俺はアギイという。砂鷗と話をして来た。ヤツが戻つてくるまで待たせてもらつぞ」

いつの間にやら拠点に侵入していた訪問者に、ビルは心底驚きました。自分の目を信用していましたし、かなり注意深く周囲を見張つていたからです。

「砂鷗… なんのことです？」

動搖を隠し切れないながらも、ビルは質問を投げかけます。 「すでに把握している。別にお前に許可を求めたわけではない」

「……あなたは… いつの間に、そこに？」

「中々いい目を持っているようだが、それに頼りきりとこいつのはよくなない。気をつけることだな」

ビルが歯を食いしばる音が聞こえてくるようです。

拠点の中は、今まで感じたことの無いような空氣に支配されていました。

”… 頭巾さん… メグをつれて逃げてください…”

ビルが囁くように告げます。

”… 何？”

”ここを発見されてしまった以上、留まる意味は無い。もたもたしていれば、戻つてくるビアルさんやアル兄さんまで危険にさらしてしまう。あいつが纏つている空氣は、どう考えても普通じゃありません”

それはズルズキンも感じていることでした。今までに遭遇したどん

な強敵とも違いました。

”…それなら俺が…”

”ボロボロのあなたに何ができるんですか？それに…”

頭巾は言い返すことができません。少し躊躇つよう、ビルは言いました。

”…いえ、なんでもありません。早く行ってください”

”…ビル”

ビルは無言でしたが、ズルズキンは構わずビルの背に声をかけました。

”…やつをと追いついて来い”

そう言つとズルズキンは、今の彼にできる最高速度でメグの元へ向かいました。

「どこへいく？悪いがここに居てもらおう。妙な小細工をされては面倒なのでな」

「そつは行きません。あなたには少し私の相手をしてもらいます」進路を遮るように、ビルが立ちふさがります。

「お前がか？…俺との実力差がわからないほど未熟には見えないがとにかく感情を込めるでも無くアギイは静かに告げます。

「そうですね…その上でこうして残るつていつのは、中々精神的にキツいものがありますね…」

ビルはため息を吐いて言いました。

「しかし、大切な家族を差し置いて自分だけ助かるうなんて思う輩はウチの一家にいないんですよ、生憎」

ゴシゴシ追加されましたね。

昨日今日と潜つたけど、一度も行けなかつた。

夢島選択させて欲しいすな。

ワルビアル一家

ビアル…歴戦のワルビアル。つよい。砂鰐。
アル…一番上の長男ワルビアル。気性が荒い。
ビル…真ん中の次男ワルビル。冷静。
メグ…一番下の妹メグロコ。元気。
ズルズキン…ワルビアル一家の新入り。

ヒビダルマ一派

砂漠北部を支配している。ワルビアル一家と抗争中。狒々王を長としている。

外部勢力

アギイ（アギルダー）…ある目的のために砂漠にやってきた。諜報活動に長ける。冷静。シユバの相棒。
シユバ（シユバルゴ）…ある目的のために砂漠にやってきた。戦闘担当。強い。アギイの相棒。

「ふあ……あれ、頭巾のお兄ちゃん…？」

メグがズルズキンの背で目を覚ました。

裏口から拠点を抜け出し、砂漠をしばらく歩き出したところでした。

サクサクと、足音が聞こえます。

太陽はいつの間にか身を隠していました。

「起きたか」

「お兄ちゃん、体、大丈夫なの……どこに行くの？」

背に揺られつつ、メグが不安そうに尋ねます。

「……ちょっとな。お前達が昔使っていたといつ拠点を見てみたいと思つたんだ。案内してくれないか？」

メグはまだ寝ぼけているようでした。

「昔の拠点は、どんな場所だつたんだ？」

「あそこは……今のお兄ちゃんよりも少し狭かつたけど、あの頃はみんな小さかつたから……ねえ、頭巾のお兄ちゃん、みんなは？」

ズルズキンは無言で歩を進めました。

「……ねえ、頭巾のお兄ちゃん？」

時折砂塵がピシピシと頬を叩きます。大きな砂嵐の前兆のようでした。

「あいつらは、先に向かっているよ。俺達も早く行かないとな」

「……頭巾のお兄ちゃん、嘘付いてる」

「何言つてゐ？俺は嘘などついていない」

「嘘！わかるもん！わからないけど、嫌な感じがするんだもん！頭巾のお兄ちゃん、拠点に戻るうーみんな一緒にやなきやいやだ！」

メグは突然じたばたと暴れました。

ズルズキンはいつも通りに振舞つていたつもりでしたが、メグは何かを感じ取つたようでした。

「なんだか……お父さんが帰つてこなくなつちやつた時みたいなの……」

ひとしきりズルズキンの背中で暴れた後、メグは泣き出しちしました。

しばらくした後、ズルズキンはため息混じりに言いました。

「…わかった。だが、戻るのは俺だけだ。お前は物陰に隠れていろ」「うん！」

「何故戻ってきた？これでこいつが体を張った意味は無くなつたも同然だ」

アギイの声が拠点の中に響き渡ります。

「…」

頭部から血を流したビルが、壁にもたれてかろうじて立つていました。

”…全く、何で言つ事聞いてくれないんですか…”

息も絶え絶えと言つた様子で、ビルが声を発しました。

戻ってきたズルズキンを見ると、ビルは糸が切れたようにその場に崩れ落ちてしまいました。

ズルズキンは慌ててビルを支え、安心させるように言葉をかけます。

”メグは隠れている、大丈夫だ。……なんでさつさと逃げなかつた。お前なら俺達が行つた後でも離脱できただろうに…”

荒い呼吸に混じつて、ビルの言葉が聞こえきました。

”…今のあなたでは、すぐに追いつかれてしまうでしょう。私は、守りたかつたんですよ…体を張つて大切な妹を守つてくれた人の事も”

「アギイ。早いな、もう北から戻ってきたのか」

拠点の中に、聞き覚えの無い声がもう一つ響きました。

ドサッと、何か重量感のあるものが無造作に放り出されます。

「……アル？」

流れ出る血が、地面に赤黒い染みを作つていきます。

紅く染まつたアルは、ピクリとも動きませんでした。

声の主はまるで騎士のような外見をしています。アルの返り血で、その鎧はところどころ紅く染められていきました。

アルに見向きもせずにこちらに向かつてくる騎士は、まるで不吉の象徴のようでした。

騎士はビルを見て言います。

「そこに倒れているのは、砂鷗……ではないな。アギイ、砂鷗はまだか？」

「もうしばらくかかりそうだ」

「そうか。しかしアルといったか、そのワルビアル。中々できる。砂鷗への期待も膨らむと言うものだ」

ズルズキンは心中に、何かが膨れ上がつていくのを感じました。

憎しみ。

数多くの敵と戦つてきたズルズキンでしたが、戦いの理由に憎しみを抱くのは初めての事でした。

”なんだか最近、心の中がせわしないな……”

ズルズキンは深く呼吸をしました。ズルズキンの周囲をエネルギーが円を描くように回り始めます。

「竜の氣…貴様まさか、竜戦士か？」

鋼の騎士が目を細めます。

「…その名は何度か耳にしたが、人違ひだ。俺はただのワルビアル一家の新入りだよ」

- 頭巾と砂ワニ 15 - (後書き)

大会始まりますね。
エントリーまでにパーティ練り直さないと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0742q/>

ポケットモンスター * アストリスク *

2011年11月23日20時46分発行